
あいまいっ！

遠山竜児

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいまいっ！

【Nコード】

N6789V

【作者名】

遠山竜児

【あらすじ】

落ちて着け落ちて着け落ちて着け。あれは俺の 妹だぞ！

おおお落ちて着くよ私！ あ、あいつはただの 兄貴じゃない！

4月から高校2年生の鳴沢タカトシ（なるさわたかとし）、中学2年生の鳴沢穂波なるさわほなみの兄妹は、両親不在の春休みをいつも通り、特に会話もなく過ごす

はずだった。

「あ、あ、あんたどーゆーのつもりなの！？　ししし失恋の弱みに付け込んで、く、く、……口説こうとするなんて！」

「ちげえよバカ！　心配したり慰めたりするのは、その……当たり前……だろ。……あ、兄貴なんだからさ」

泣きながら家を飛び出した妹を追いかけた日から、兄妹以上恋人未満の曖昧な生活が始まった！？

くプロローグく 兄妹とはなんたるか

世の中には、妹というものがいる。

まあ、至極当たり前のことなんだが……

妹というのは、持つ者にとっては普通の存在であり

持たざる者にとっては、もし持っていたらあんなことやこんなことが……と自分に都合の良い妄想を膨らませたり、「お前の妹可愛すぎる！ 俺にください！ 妹にしたい！」と羨む存在でもある。

普通に考えて

兄と妹の間に

恋愛関係の発生する要素など

ない。

ぜったいに、ない。

これは、世の妹を持つ男性諸君にとっての、普遍であり不変の真理である。

このことは、遺伝子学の観点からも説明できる。

兄妹は共通の両親から生まれるため、DNAの構造が似通っている。そのため、もし兄妹の間に子供が生まれたら、同じような遺伝子と同じような遺伝子を合わせた子供になってしまい……

遺伝子に異常をきたす。

こういったことを防ぐため、幼少期から常に一緒にいる存在（つまり家族）は、たとえ年が近くても恋愛対象として見ない、と人間は遺伝子レベルでインプットされている。

ただ、先程絶対と言ってしまったのだが、森羅万象あらゆることに例外というものが存在するように

兄妹の間にも例外というものが存在する。

幼い頃両親が離婚して兄妹が離れ離れになり、そのため兄妹として認識できずに思いが募り、再開したときに恋愛感情が生まれた……などの場合だ。

そうだった場合は、まあ、仕方ない。軽蔑したりする気もないし、多少その気持ちは理解はできる。

複数の学者が原因を研究しているらしい、シスターコンプレックスとブラザーコンプレックス。いくつもの説があり定説というものがないが、一説によると家族問題や社会不安が引き起こすという。

……そういう場合も、まあ、俺は馬鹿にしたりはしない。

だが、俺の家庭はいたって平和だ。両親は旅行に行っていて不在だが、それも二人の仲が良い故のものであり、普段は俺達兄弟にも愛情を注いでくれている。

つまり、

幼い頃に両親を亡くし、兄妹二人で寄り添い生きてきた
ということとは断じてない。

そう、俺達は平凡で普通、周りより会話が少し少なかったりたまに喧嘩したりするだけの、どこにでもいる

兄妹、だった。

……過去形にしたのは、意味がある。

……現在進行形で変化しつつあるからだ。

そもそも何で俺がこんなにシスターコンプレックスやブラザーコンプレックスに詳しいのかというと

調べたから、である。

自分の心の変化を客観的に理解するために。

そして得た結論は……

「このままじゃ俺、変態になっちまうじゃねえか!!」

3月21日(月) 性格最悪な妹

俺 鳴沢タカトシは、普通という枠をはみ出してはいないと
思われる、どこにでもいそうな高校生だ。

勉強ができるという点では頭が良いという部類に入るだろうが、
一応県内では有数の進学校に通っているだけあって、周りには自分
より『できる』やつはたくさんいる。ゆえに、高校生活の中では自
分はいたって平均で平凡だ。

それに加え、我が家 鳴沢家も、いたって普通。そこら辺の家
庭となんら変わりもない。両親2人と妹1人と俺で、ごくごく平和
に暮らしている。

「穂波、今日は昼飯どうすんだ？」

「……外で食べてくる」

「そ、そうか……」

リビングの椅子に座り、サングラスをかけたおじさんが司会を務
める某お昼の定番番組を、さも暇だからという感じで見ているのが、
4月から中学2年生になる俺の妹 鳴沢穂波だ。

黒髪ロングに気の強そうなキリリとした目をしているが、キツ過
ぎるわけではなく、笑うと太陽のように明るい表情を見せる顔。背
は小さいがあくまで年相応、ついでに胸も小さいがまだ13歳なの
で将来に期待できる。全体的にかわいらしいその見た目は、実の兄
から見ても非常にハイレベルで

特に、脚は良い。身長割にすらりと長く、本人も好んで履くニ
ーソックスがよく映える。今だって、フリルがちょこつとついた短
めのスカートと黒ニーソが絶妙なコントラストを生み出し……

「……何ジロジロ見てるのよ、気持ち悪い」

「い、いや、何でもない、そう、何でもないんだ」

いかに俺がニーソ大
好きの脚フェチとはいえ、これじゃ変態丸出しじゃねえか。

とにかく、実の兄でもたまたまに妖しい気持ちになっってしまうほど、妹の容姿は優れているんだとご理解頂きたい。兄としてより、脚フェチとしてのひいき目が入ってはいるが “見た目は” 可愛い。

……繰り返す。“見た目は” 可愛い。

「ていうかお前、春休みになっってから昼も夜も外食ばっかじゃねえか。体に良くないぞ。 ったく、俺が作ってやるって言ってるのに」

料理を作ってやると申し出ているのは、何も飯で妹の気を引こうだとか、そういう邪な^{まじしひ}ことを考えているからではない。妹に対するただただ純粋な心配と、兄としての責任感がそうさせるのだ。

それなのにコイツときたら……

「うるさい。黙れ。……アンタの飯はマズい」

……睨まれた。まるで、本来かわいそうだな〜と思っっている男を、敢えて哀れむどころか見下し嫌悪し蔑むかのように、冷たい眼差しで……

これが、“見た目は” を強調せざるを得ない、穂波の可愛くない部分である。

いや、可愛くないなんてもんじゃない……

例えるなら、独裁主義で民のことなど家畜同然に考えている最低最悪の暴君 に、我が儘を聞かせまくり利用するだけ利用しているが実際父親のことなどこれっぽっちも愛していない王女、の如し。

つまり言ってみれば、妹は性格が悪い。

ものすんごく悪い。

見た目の良さを帳消しにするどころかマイナス方向へ限りなく突進しているほど、悪い。

「な、な、なにい！？ 兄のせつかくの好意を……てか待て、そもそもお前、俺の飯喰ったことないだろ！」

「……両親不在の春休みに、これ幸いと兄らしいところを見せて力

ツッコけよう、なんて魂胆で作られた料理なんか、マズいに決まってるわ。今さら兄貴ぶっちゃって、馬鹿みたい」

表情少なくともんでもない暴言を吐いた穂波。さすがの俺も力チンときた。

こ、こ、こ、こいつ……

言わせておけば……

ここは一発、ガツンと言ってやるしかないな……

決して、下心を見透かされムカついたからとか、そのような理由ではない。失礼な態度を振り撒く妹が、将来社会に出た時周りから嫌われないよう、改心させてやるためだ。

そう、これはあくまでもアイツのため。ここは心を鬼にしつつ、あくまで冷静に、広い心で諭すように……

「あ、りゅーくん！ ……うんうん、B駅の西口に1時に待ち合わせね！ ……うん、うん。 ……私も楽しみだよ！ それでね、昨日の話なんだけど……」

「おい、ちよっ、おま……」

いつの間にか、穂波は電話をしながら2階へと続く階段を登っていた。相手は彼氏だろうか……態度が豹変している。

まったく、いつもあんななら可愛いになあ。

「はあ……」と小さくため息をついて、俺はテレビの電源を切った。

3月21日(月) ギャルゲーの妹

一昨日の朝早く、ちょうど俺と穂波の学校が春休みに入ったあの日、両親はパリに出掛けた。なんでも結婚20周年旅行ということらしい。4月ちよつと過ぎまで、のんびり滞在するという話だ。

鳴沢家は、父さんが会社員、母さんは専業主婦の片働き家庭だから、家事のほとんどを母さんに依存している。そのため、この春休みの間に俺達が餓死しないよう、食費その他もろもろの費用として2万円ずつ俺と穂波は渡されているのだ。ちよつと多すぎやしないかと思つたのだが、子供2人を置いて外国に行くのは少し後ろめたかつたのだらう。俺達兄妹は大人しく受け取っておくことにした。

とはいえ、4月から高校2年生の俺は、再来年に希望の大学に受かつていたら今頃一人暮らしをしているはずなので、この春休み中にできるだけ料理を作つたり掃除をしたりしようと思気込んでいる。母さんが出掛ける前に買い溜めをしておいてくれたので今の所スーパーに食材を買いに行つたりはしてないが、ネットで調理方法を調べたりして、簡単な料理から挑戦していつてるのだ。

味はそこそこ……いや、どちらかといえばマズい……が、一応許容範囲だ、自分の中では。栄養バランスを考えたメニューにしているし、自分で苦労して作つた料理なら味覚補正がかけられる。それに春休みはまだ始まつたばかり、毎日料理を作つていれば始業式までにはきつと上達している……はずだ。頑張ろう。

一方の穂波はといえは……

朝食はパンを焼いて食べているのだが、昼夜は全部外食という始末。俺が2人分の夕飯を作つてやったときも、「は？ 別に頼んだ覚えなんてないんだけど」と一蹴しファミレスに行つてしまった。仕方ないので、残つた分は次の日朝食として食べたが

それに、どうやら穂波は彼氏と一緒に飯を喰っているらしい。もちろん毎回ではないと思うが、さっきみたいに俺の好意を蔑ろにし

ておきながら他の男と楽しくお食事しているのかと思うと、正直腹が立つ。

……決して、彼氏とやらに嫉妬しているわけではないと、ご理解頂きたい。

「ふー！ こ、う、りゃ、く、完！、了！！」
ついに、ついに

やり遂げた。あらゆる災厄や困難を乗り越え、仲間の手助けも借り、ついに俺とリサは

最高のエンディングへと、たどり着いたのだ！！

「……ひつく、グスン……。リサ、愛してるよ……。よかつた、ここまで辿り着けて……」

PC画面の奥にいる寺原リサに話し掛ける声が、自然と涙混じりになる。今までの二人の思い出が流れているエンドロールを見ながら、俺は幸福を噛み締めた。ヘッドフォンを通して流れるエンディングテーマ曲が、本だらけの俺の部屋をえもいわれぬ心地よさで満たしていく

俺は、ギャルゲーが好きだ。

俺とギャルゲーの出会いには複雑過ぎるので説明は省くが、とにかく俺は大のギャルゲー好きなのである。去年の12月頃からハマり始めたうえに、全ルートをクリアしたソフトはまだ2つしかないのだが、俺はすっかりギャルゲーの虜とらになってしまっていた。

この趣味を知っている者は、小学校からの付き合いの阪内大介さかうちだいすけしかない。あいつはギャルゲーどころかゲーム全般に興味がないのだが、年齢〓彼女いない歴の俺とは違い恋愛経験が豊富で、「ギャ

ルゲーかよっ！」と突っ込みたくなるような体験を実際にいくつもこなしている。なので、ギャルゲーの話をしても非常に盛り上がるのだ。信じられないことに。

今回俺が攻略した寺原リサというキャラは、自由の無い徹底した監視社会となった2036年の日本を舞台にした近未来型恋愛アクションアドベンチャーゲーム（R15作品）、『デイストピア』に登場するヒロインである。解放軍の主人公と敵対関係にある政府軍のリサは、予想通り本作最強の攻略難易度だった。

エンドロールを見終わりに、しばらく目を閉じて余韻に浸る……
戦場で芽生えた、許されざる敵同士の恋。戦うことでしか伝えられない、互いの愛……その全てが報われた、最高のエンディングだった。

俺はベッドの上になっところがり、再び回想モードに入ることにした。

しばらく後

ベッドの上から壁に掛かっている時計を見ると、まだ夜の9時だった。午後7時からゲームを始める前は、朝からずっと勉強をしたり本を読んでいたりしていたので、まだゲームに使える時間はある。

「そつえば、まだ全キャラクリアしてないんだよな……」

『デイストピア』にはまだ攻略するべきヒロインが一人残っていることを思い出した俺は、さてどうしようかと思案した。

リサ攻略は一昨日から開始し、今日エンディングを迎える計画だったのだが正直深夜12時くらいまでかかることを覚悟していた。しかし、今までの経験が生きてきたせいか思ったよりスムーズに進めることができた。この春休みはギャルゲーと将来の夢のための勉強に身を捧げると決めていたので、正直あと2時間はギャルゲーをやりたい。がしかし……

「妹キャラ、か……」

唯一残っている、朝井ユキあさいというヒロインは……主人公の実の妹なのだ。しかも、背がちつちやくて貧乳で切れ長の目に黒髪ロング、おまけに気が強くてニーソックスがデフォルトという、穂波にうりふたつのキャラである。

年齢は16歳で主人公と一つしか変わらないのだが、幼児体型のいわゆるロリキャラで、穂波と同じ13歳くらいにしか見えない。

さすがに、これを攻略するのは気が引けた。実際に妹を持っている身としては、たとえ2次元の話でも妹を恋愛対象に見ることなどできるわけがない。リアルの妹がどれだけ最悪かを知っているし、攻略中にゲームの妹とリアルの妹を重ねてしまうことは目に見えている。そんなことになったら、ゲームに集中するどころの話ではない。人として、侵してはならない領域に踏み込んでしまうことになる。

「妹萌えとか、理解不能だぜまったく……。なんで妹を持ってないやつの妄想に振り回されなきゃなんないんだよ。Teaは何考えてるんだっつーの」

Teaというギャルゲー制作会社に文句を垂れつつ、俺はしばらく迷っていたが

『ディストピア』は、全ヒロインを攻略しないとストーリーやちりばめられた謎などが完全には解明されない作品なので、ユキルートも攻略することを決めた。

「仕方ない、仕方ないんだ。あくまでストーリーを楽しむためにやるだけだ。絶対に感情移入はしないぞ……」

そう決心して、再びモニターの前に座り『ディストピア』を起動させた。

そして2時間後

後悔しながらモーレッツに感動するという、奇妙な状態に陥っていたことは言うまでもない。

「ユキ！ 俺が絶対、護つてやんよ！！ 絶対死なせはしねえ！！
死んでも護つてやる！！！！」

俺は浅はかだった。このゲームを舐めていた。……これはすごい。開始2時間ですでにどっぷり引き込まれていた。

なんだよコレ……今までで1番すぐえルートじゃねえか！

最初こそ穂波みたいにツンツンとがって主人公に牙向きまくりでうんざりしたが、少しずつ、少しずつ主人公に心を開いていきついにデレを見せ始めた。

めちやくちや感情移入しちゃってるし、しょっちゅうユキと穂波が重なってビビるけど……もうかまうものか！ 徹夜してでもクリアしてや……

「ドンドンドンッ！！」

その時、ヘッドフォンの外から、床や壁を激しく叩くような音が聞こえていることに気が付いた。

何だ一体……

まさか強盗！？

不安に思い慌ててヘッドフォンを外す。音はどうやら、隣の部屋は穂波の叫び声が俺の耳に飛び込んできた。それだけではなく、今度は「ぶざけないですよ！！ どうして……どうして急に別れようなんて言うの！？ 今日だって普通にデートしてたじゃない！！」

……穂波？ なにやってんだ？ 別れるとかどうとか……彼氏絡みか？ 電話でもしてるみたいだな……

なにやら不穏な空気を察知した俺は、ゲームを一時中断し、穂波の部屋に向けて聞き耳をたてることにした。

3月21日(月)家を飛び出した妹

「バカなの！？ 死ぬの！？ ……うるさいうるさい！！
もうアンタなんか大っ嫌いっ！！」

穂波が叫び終わると同時に、「バリッ！」とガラスが砕けるような音がした。

「おいおい！ 穂波のやつ、いくらなんでもやりすぎだろ！」
こいつはやばい。そうとうキレている。

さすがにじつとしていられなくなった俺は、居ても立ってもいられなくなり、自分の部屋を飛び出し穂波の部屋へと向かった。穂波のヒステリックな怒号が、ドアを通り抜け耳をつんざく。

どうにかして落ち着かせないと……家がめっちゃめっちゃになるどころか、あいつが怪我とかしちまうかもしれない……

勝手に妹の部屋を開けるのは少々気が引けたが、状況が状況だ。意を決してドアノブに手を差し延べたとき

「ガバッ！」

ドアが急に、部屋へと引かれた。

眼前には、目を真っ赤に腫らし髪も服装も乱れた、パジャマ姿の穂波が突っ立っていた。泣き叫んでいたのだと、事情を知らない奴が一目見てもわかるであろう、あられもない恰好をしている。

「っ……」

「ほ、ほな……」

目が合った0.5秒後、「ドンッ！」と穂波は俺を突き飛ばし、部屋の外へと走り去って行ってしまった。

「お、おい穂波！」

バタバタと階段を猛スピードで駆け降りる音が聞こえるが、穂波は終始無言だった。俺は穂波を追い掛けようか迷ったが、さっき聞こえたガラスが砕けるような音が気になり、穂波の部屋を覗いてみた。

「まさか、窓ぶち壊したんじゃないだろうな…… 修理費シャレにならねえぞ」

見るとそこには、ミッキーマウスの顔の形をした目覚まし時計が、表面のガラスが粉々に砕けた状態で床にほっぽり出されていた。

「どうやら、穂波は激情に任せてこの目覚まし時計を床におもいきりたたき付けたらしい。」

「うわー、やべえぞ、これは。…… ガラスの破片がそこら中に散らばってるじゃねえか…… あいつ、踏ん付けたりして怪我してねえかな……」

妹の身を案じ、やつぱり追い掛けて話を聞こうと思った矢先、鳴沢家の玄関が開く「ギイイ」という鈍い音がした。

「つつ！ あいつつ！……」

外へ出やがった！？

もう夜中の11時だぞ！
それにパジャマ姿で……

「ったく、しょうがねえ奴だなおいつ！」

兄として取るべき行動は、一つしかないと分かっていた。

「何で！？ なんで突然フラれなきゃならないの！？ もう意味わからないよ……」

3月下旬の夜風は、思ったより冷たかった。私はD公園のベンチの上で膝を抱えて丸まり、顔を膝に押し当てるように俯いた。上着もかけず、ついでに靴も履かずに衝動的に家を飛び出した短絡さには呆れているが、今は、是原龍斗これはいちゅうと 私の彼氏 “だった” 男に対する怒りのほうが、圧倒的に頭を占めている状況だ。

フラれたのに、悲しみよりも怒りのほうが強くなって、どうしてなのかな……

わからない。今まで付き合った男はあいつ1人しかいないし、男をフットたことはあるけどフラれたことがないから経験不足なのだ。

確かに、理不尽なフラれかたをされたのは本当だけど……
なにも、あんなに怒鳴り散らさなくてもよかったじゃない……
ちゃんと落ち着いて話し合えば、またやり直せたかもしれないの
に……

あいつに対する怒りから、今度は自分に対する怒りも生まれてきた。しかし……

もう、何もかもが遅かった。

大嫌いって、

死んじゃえばいいって、

とても酷いことを……

とても酷い『嘘』を、言ってしまった……

「ハックシユンっ！」

……寒い。

寒いし、寂しい。

これが後2週間遅かったら、夜桜が自分を慰めてくれていたかもしれない。けど残念なことに、周りに何本も植えられている桜の花はまだ壺の状態だった。公園の真ん中に建っている一本きりの街灯じゃ、寂しさを紛らわすのには少し物足りない。

家に、戻ろうか……

いやいや、あんなに大暴れした揚げ句、突き飛ばしたりしちゃったんだ……

兄貴はきつと、怒っている。絶対に、怒っている。

それに、家を飛び出してまだ5分くらいしか経ってないのこのこ帰るのは、なんか格好悪いし惨めだ。

別に風邪を引いてもいいや。むしろたっかい熱出して寝込みたい気分だわ……

と、半ばヤケになり自虐的な気分になっていると……

「そんなところに…ハアハア…いる…と…ハアハア…か、風邪…ひ

くぞ……」

突然、前方から男の声がした。驚いて顔を上げると、目の前には

「あ、兄貴……」

私の兄貴が、黒いジャンパーを片手で私のほうへ差し出しながら

走ってきたのだろうか　息を切らして、立ち止まっていた。

3月21日(月)家を飛び出した妹「2」

今から8分ほど前

家を飛び出した穂波を追い掛け、俺も家を飛び出した。

あんなパジャマ姿じゃ、華奢な体をしている穂波は絶対に風邪を引いちまう。

奇跡的にそんなことにまで頭が回った俺は、自分の部屋のクロゼットからお気に入りの黒いジャンパー 俺が持つてる中で1番保温性が高い上着 を引っ抜き、ダッシュで穂波を追い掛けた。玄関を開けると、すでにあいつの姿はいない。しまった

ジャンパーなんか取り出してる場合じゃなかったか……後悔しても遅い。今はそんな時間さえ惜しい。

穂波はどこへ行った？ どこか、穂波の行きそうな場所は

「もしかして……」
幼い日の記憶を辿り、心辺りを一つ……
思い出した。

「……何でここがわかったのよ……」
俺が差し出しているジャンパーは手に取らずに、不機嫌そうな顔と声で、目を逸らしている穂波は呟いた。

息を整えるのに10秒ほど使い、それから俺は口を開く。

「昔……お前が小さい頃さ、何かあったらよくこの公園で泣いてた

だろ…… 今みたいに」

「わ、私は泣いてなんかないっ！」

「少なくとも部屋を出たときは泣いていた」

「っ……くう……」

穂波は何も言い返せないらしく、悔しそうな顔で頬を膨らました。薄暗い街灯に照らされた目元は、やっぱりまだ潤んでいるみたいだ。

穂波は小学校低学年だった頃、親に叱られたり俺と喧嘩したりしたとき、毎回と言っていいほどの公園のベンチへと逃げ込んでいた。それを探し出して慰めてやるのが、当時の俺の役目だったのだ。幼い頃の穂波は、俺のことを『お兄ちゃん』と呼び、今よりも大分懐いてくれていた。しかし、小学校高学年 いわゆる思春期に入った頃から、徐々にそう呼んでくれなくなり、『アンタ』とか『タカ』とか『兄貴』や『バカ兄』という呼び名に変化してしまった。そして最近では、会話自体がめっきり減少していつてる。「べ、べつに、追い掛けて欲しくなんてなかったんだからね！ それをアンタが勝手に……」

少し頬を赤らめ、ソッポを向く穂波。

ツンデレかよっ！ ってか…… 可愛い、な……

こんな時にできえ、思わずそう感じてしまう。いや、こんなときだからこそ、か

普段の穂波にはあまり見られない心細げな雰囲気、余計にあいつをかわいく見せるんだ。

一瞬、さっきまでやっていた『ディストピア』のユキと、今ここにいる穂波とが重なってドキリとする。もしこの状況がギャルゲーだったら、フラグを立てるチャンス……

待て待て待て落ち着け俺よ。リアルとゲームをこっちゃんにするな。こいつはどんなに可愛かろうが俺の妹なんだ。

その妹が泣いているなら、兄貴として、するべきことが他にあるだろ！

「そ、そんな恰好じゃ風邪ひくぞ。これ、着るよ……」

グイッと、ジャンパーを穂波に押し付ける。穂波はそれを引つた
くるように受け取ると、「そ、そこまで言うなら着てやるわよ……」
とブツブツ文句を言いながらもジャンパーの袖に腕を通した。そし
て再び膝を抱え、アルマジロのように小さく丸まる。

「……まだ、帰る気はないのか？」

返事代わりに、コクンと小さく頷く穂波。

「……分かった。落ち着くまでここに居ればいい。話くらいは聞い
てやるよ」

「ア、ア、アンタには関係ないでしょ！ ベベべ別にアンタに聞い
てもらいたい話なんてないしっ！ ア、アンタはもう帰りなさいよ
！ 私ももうしばらくしたら帰るから！ わ……私のことなんかほ
つといてよ……！」

「ほつとけるわけねえだろ……！」

気がつけば、俺は重いつきり声を荒げていた。ビクンツと大きく
震え、穂波が顔を上げた。その表情からは驚きと、突然怒鳴りつけ
られたことに対する恐怖が伺える。

「心配しちゃ悪いかよ！ 何があつたかは知らねえがよ、お前がこ
んなに苦しんでるのに…… お前をこんな真夜中に公園に一人ぼっ
ちで置いて、ノコノコ帰れるかつっーんだよ……！」

近所迷惑だとかそんなもんは、まったく考えていなかった。俺の
台詞にそんなに驚いたのか、穂波の目が大きく見開かれていく。

俺は感情の赴く^{おもむ}まま、大声で言葉を吐き出し続けた。

「……俺がいるだろ！ 話したくないなら何も話さないでいい！
けどよ！……し、心配くらいは…… させてくれよ……」

言つてて照れ臭くなってきたため、途中から語気が弱くなってい
た。しかし、こんなに自分の感情さらけ出したのは久しぶりだった。
……少々さらけ出し過ぎかもしれないが。

もしかして俺は、穂波を必要以上に恐がらせたり…… ある
いは怒らせたりしてしまったのかも……

気になって穂波の顔を覗き込むと、何やら真つ赤な顔で口をぱくぱくさせていた。しかも目の焦点が定まっていなかった。

……怒りで声も出ない状態か!? マ、マズイ、早く謝らねば……

「う、ごめ……」

「こ、このバカっ!!」

バカ!?

……確かに俺はバカだ。傷心の妹にあんなに激しく怒鳴るなんて……

心遣いとか思いやりとか常識とか、そういうものが欠けていたのだからな。

よし、これから繰り出されるであろう凄まじい罵倒を、俺は甘んじて受けいれよう。そして反省して、謝って……それから、何か穂波の力になれるようなことをする。

そう決心したのだが……

「ア、ア、アンタどーゆーのつもりなの!? ししし失恋の弱みに付け込んで、く、く、……口説こうとするなんて!」

予想だにしなかった言葉が、穂波の口から飛び出した。

3月21日(月)家を飛び出した妹「3」

「は、はあ!？」
何を……

言っているんだコイツは!？」

俺が穂波を……

口説く!？」

おいおい、俺の妹とんでもない勘違いをしているぞ！ 今すぐ弁明しなければ！

「ち、ちげえよバカ！ 心配したり慰めたりするのは、その……当たり前前……だろ。……あ、兄貴なんだからさ」

そ、そう、俺はあくまでも、『兄貴』としてあんな 今思えば顔から火が出るほど恥ずかしい台詞を、叫んだんだ。く、口説こうとか気を引こうとか……

そつゆー思惑は一切ない！

する気もない！

なぜなら！

こいつは俺の！

妹だから！

「え!？ ち、ちがうの!？ ……つてええ!？ だ、だって私てつきり……」

「と、とにかく落ち着け、な。兄貴が妹を口説くはずなんてないだろ」

とりあえず俺は、全力でこいつを宥なだめることにした。

さっきよりもさらに顔が赤くなっているぞ。まるでトマトみたいだ。

「ま、ま、まま紛らわしいのよこのバカ!！」

「ちょ、おまつ！ お前が勝手に勘違いしたんだろ！」

ほ、本当にひどい勘違いだ……

俺まで顔が赤くなっちまうじゃねえか！

「……………」

「……………」

それからしばらく、D公園は静寂に包まれた。俺たち兄妹の間にあるのは、ただただ気まずい沈黙のみ。互いに視線は合わせず、あちこつちへと泳いでいる。

今日は、星も月も出ていないみたいだ。空が墨をぶちまけたように黒い。

これがもしギャルゲーだったら、満天の星に月明かりが穂波の顔を照らして、よりロマンチックな雰囲気……………」

そ、想像してはダメだ！ 危険過ぎる！

それこそ本当に、口説き文句の一つや二つを言っただけで済むから。

どれくらいだったのだろうか…………… 10分？ 20分？ 1

時間？ いやいや30秒くらい？ それはわからなかったが、穂波がついに沈黙を破った。

「あ、あのさ……………」

「お、おう……………」

相変わらず真っ赤な顔をしている妹と、思わず畏まっかしこてしまう兄おれ。「一応、礼は言っておくわ…………… ありがとう」

穂波は上目使いに俺をちらりと見た。その顔に、わずかに笑みが浮かんでいるのを俺は発見したが、穂波はすぐにプイッとソツポを向いてしまう。

な、なんだよその笑顔…………… くそっ！ なんっーか…………… 反則？ じゃねえか。

何が反則なのは、俺にもよくわからなかった。

「おう……………」

返事をしようとしても、言葉に詰まる。もっと何か気の利いた台

詞はないのかと模索しているうちに、

「じゃあ、私そろそろ帰るね……」

穂波は立ち上がり帰る意志を示した。

「お、おう…… 帰ろうか…… ってお前、は、裸足じゃねえか！」

「今気付いたの？ …… 靴、履くの忘れてた」

穂波の足は何の布も纏わず、地面に直しかに接していた。俺の手の平よりも小さいんじゃないだろうか、そんなこじんまりとした足裏で、穂波は自分の体重を土の上で支えている。

「お、お前いくらなんでも靴忘れるとか…… はあ。…… ほら、家までおぶってやるから、乗りな」

俺は穂波に背を向けると、右足で立て膝をつくようにしゃがんだ。

「いいわよ！ じ、自分で歩いて帰れるし！」

「バカ言つなよ！ 何か踏ん付けて怪我したらどうすんだよ！ ……

… てかお前、部屋出るときにガラス踏ん付けたりしてないか？ 大丈夫かよ」

「してないわよ！ それに帰りも、大丈夫…… なんだから」

… ったく、何いつまでも強がってんだよ…… 頭が冷えて冷静になった後じゃ、裸足で家まで帰るのは正直恐いくせに。

「ここから家まで、そんなに近くもないだろ？ 利用できるやつは例え兄でも利用しとけて。…… それによ、役立たずの兄貴にはな

りたくねえからさ、ここは一つ、大人しく乗っかってくれねえか？」

最後の一言は余計だったかもしれない。また少し照れ臭くなった。

「わ…… わかったわよ！ そ、そこまで言っただったら、おぶわれてあげなくもないわよ」

穂波は意外にもすんなり、俺の背中に乗っかることを決めたようだ。

俺の肩に手を回し、後から抱き着くような恰好になった穂波は、ゆっくりと体重を俺にかけてくる。俺は両腕で穂波のふともも裏をつかみ

「よいしょっ」と掛け声を小さく呟いて、立ち上がった。

壮絶に色々と後悔した。

ついでに自分の浅はかさや覚悟の足りなさを呪った。

なぜなら……

俺は今、実の妹で、その……

せ、性的興奮…… しかけているからだ

死ね！ 俺死ね！

……この変態野郎！

……ああ、自分で自分を殺したい……

……よかった。穂波の助けに、なれたみたいだな。

穂波をおぶって深夜の路地を一緒に帰っている俺は、ホツと安堵した。もし何もしてやれなかったら、今頃俺は無力感に苛さいまれているところだっただろう。

まったく、世話の焼ける妹だよな……

てか、13歳とはいえ軽すぎじゃないかこいつ？ それになんだろう、後ろから良い匂いが……

そして、気付いた。というより、意識してしまった

“見た目だけは”超ハイレベルに可愛い妹おんなのこが、俺の背中に厚手のジャンパーを着ているとはいえ
ぴったりと、密着していることを！

待て待て待て。あれは妹あれは妹、そんな変な感情は起こりうるはずが…… うっ、こいつ、甘酸っぱい良い匂いがしやがる……
落ち着け落ち着け落ち着け。あれは俺の 妹だぞ！ ……
やわっこい体だなあこいつ…… 脚とか、フニフニしてて気持ちいい……
……
だから落ち着けて！ …… そうだ、素数を数えよう！ ……
…2、3、5、7、11、13…… よし！ 落ち着い…… うっ
っ、首筋に熱い吐息が……

駄目だ。全然落ち着けない。堕ちてはいけない領域へと真つ逆さまにダイブしている。

あいつはただの妹で…… それにいつもはあんなに性格最悪だし……

『一応、礼は言っておくわ…… ありがとう』
あの上目使いの表情を、思い出してしまった。
あの隠しきれていなかった、口元の笑みも。

……アウト。
完璧アウト。

「うおおおおー！！！！！！」
「ちょ、ちよつと！ バカ兄！ 何突然走り出してるのよ！ と、止まちなさいよー！！」

もー無理！ マジ無理！ ホント無理！！ ごめんなさい神様(?!)

耐え切れねえっつーの！ 一刻も早くこの状況を終わらせなきゃ、確実に俺はシスコン変態野郎へと成り下がってしまう！

「この…… 止まちなさいって言うてるでしょ……！！」
「ガンツ！」と、後頭部に頭突きを食らわされた。

「いつてえ!!」

猛烈な痛みには耐え兼ねて、俺の脚がフラフラと減速する。

「急に暴走するんじゃないわよ! し、死ぬかと思ったじゃない!」
いや俺のほうが、現在進行系で『人として』死にかけているんだが……

「もう、このバカ! アホ! 駄犬!」

「す、すまん……」

さ、さすがに駄犬はないだろ…… 犬じゃご主人様は背負えないんだから、馬だとして駄馬?

……いやいやそんな問題じゃなくて。

「……………ごめん」

激しく罵倒されていると思ったら今度は、首筋から、熱っぽい吐息と共に切なくてか細い囁きが聞こえてきた。

「……………は? なんでお前が謝るんだよ」

その妙に色っぽかった声に若干ゾクゾクしてしまったので、意味を理解するのに数秒要した。

「バカ兄とか駄犬とか言ったことを謝ってるのか? それなら別に気にすることじゃ……………」

「そうじゃなくて……………ほら、大暴れしたり家飛び出したり……………」

心配かけて……………ごめん……………」

「そっちのことが……………」

さっきまでとは一転、穂波は急にしおらしくなった。その申し訳なさげな雰囲気にあてられ、さっきまでの俺の興奮も波がひくようにスーっとおさまっていく。

「どうしてアンタは……………そんなに、心配して……………くれる……………の?」

「……………言つたら、心配くらいさせてくれって。……………当たり前だろ、兄貴なんだからさ……………。これからは、もっと頼ってくれても良いからよ。……………ま、まあ俺じゃ、頼りないかもしれないけどさ」

俺の肩に回している穂波の腕が、ギュッと強く抱きしめてきた。

「ああ、あ、あ、…… あり、ありがと……」
俺の台詞がそんなに意外だったのか非常にたどたどしくなりながらも、穂波は俺に礼を言ってきてくれた。

結局俺は穂波を背負ったまま再びゆっくりと歩きだし、10分ほど経ったあと家に着いた。

ギリギリ……

本当にギリギリ、俺はシスコゾーンへ堕ちずに済んだ。

……繰り返す。俺は堕ちなかった。あと1分長かったら危なかったがな。

……本当だ。きつとそうだ。多分堕ちなかった！ ……かも。

……死にてえ。

結局、私は兄貴におぶわれて家に帰った。

家に着くと兄貴が、『お前は裸足で外出たんだから、風呂入ってこいよ。ガラスは俺が片付けとくからさ』と言ってくれたので、私はその言葉に甘えることにした。

もちろん、最初は私も断りはした。ここまで世話になったときながら、さらに自分で壊したためざまし時計の後片付けをやらせてもらうなど、いかに兄貴でも申し訳なさすぎる。だけどアイツが、『怪我したら危ないだろ。俺に任せろ』としつこいくらいにうるさかったので、渋々従うことにしたのだ。

「なんでアイツ…… あんなに優しいのよ…… それに、あの台詞……」

湯舟の中で、私は思い出した。不覚にもキユンときてしまった、アイツの台詞。そして……

私の壮絶な、勘違いを。

「バカバカバカバカ！ 私のバカ！」

かつてないほどのこの恥ずかしさを打ち消すように、水面をバシヤバシヤと叩く。

「おおお落ち着くのよ私！ ア、アイツはただの 兄貴じゃない！」

そう、アイツはただの兄貴

お節介焼きで、くだらないことでウザったいほど話し掛けてくるし、時々私のこといやらしい目で見てくるし、ゲームの女の子に話し掛ける声が部屋の外にまで漏れてて気色悪いし……

そんなどうしようもない、あ、兄貴なんだから……！

けど……

私のこと、心配してくれた。わざわざ公園まで、追い掛けてきてくれた。家まで私を、おんぶしてくれた。部屋の掃除まで、してくれている。それに……

『心配しちゃ悪いかよ！ 何があつたかは知らねえがよ、お前がこんなに苦しんでるのに…… お前をこんな真夜中に公園に一人ぼっちで置いて、ノコノコ帰れるかつつーんだよ……！』

『……俺がいるだろ！ 話したくないなら何も話さないでいい！ けどよ！ ……し、心配くらいは…… させてくれよ……』

あんなに嬉しい台詞、人から言われたのは初めてだった。

「もう…… バカ兄……」

湯舟に入ってからまだ3分と経っていなかったが、すっかりのぼせてしまったみたいだ。

……湯舟のせいだけじゃ、ないんだけど。

3月21日(月)家を飛び出した妹「3」(後書き)

予想以上にたくさんの方が読んでくれているみたいで、とても嬉しいです。

こんな若輩者が書いた作品ですが、これからもどうぞよろしくお願ひします。

ちなみに、あいまいつ！という小説は、筆者が実際に見た夢の話が元になっております。

タカトシというのは実際には夢に出てきた名前です、穂波はその後自分で考えました。

3月22日（火）兄貴と朝食

朝7時30分、兄貴が2階からキッチンへと降りてきた。

「お、おはよう……」

「おう……」

兄貴に「おはよう」なんて言ったの、ずいぶん久しぶりな気がする……ま、まあ、昨日色々世話かけたし、挨拶くらいちゃんとしておくのが、筋ってものよね。

「朝飯……作っているのか？」

「うん……昨日は迷惑かけたから、そのお詫びと……お礼に……」

「え、もしかして……俺の分も？」

兄貴は目を丸くした。

「べ、別に！ たまたま早く起きたからであってその、あの……そ、そうよ！ アンタの分も作ってやるって言ってるの！ 悪い！？」

うう……私ったら、なんでこうトゲトゲしちゃうのかな……

今日一日くらい、穏やかに接しようと思ったのに……

「い、いや……素直に嬉しい……ありがとな」

な、何顔赤くしてるのよ！ は、恥ずかしいのはこっちのほうだっつーの……

兄貴と顔を合わせていられなくなり、私は「フンッ」とソッポを向いて料理の続きを再開した。

結局昨夜は、一睡もできなかった。

当たり前だ。彼氏にフラれたうえに、兄貴の思わぬカッコイ

イ姿を見せつけられたんだ。色々考え過ぎちゃって、眠れるわけもない。

結局、普段より早く朝食を摂ろうと思い、キッチンに降りてきていつも通りパンを焼こうとしたのだが……

ふと、思い付いた。兄貴に朝食を作ってやるのはどうだろう、とべ、別に、料理で兄貴の気を引こうとか、そんなことは断じてない。ただ純粹に、何らかの形で……

お礼が、したかったんだ。

たまたまいつもより1時間半も早く起きてきたんだ。兄貴に朝食くらい、作ってやつても良いかもしれない。あくまで、お礼なんだから、当然の行いよね……

というわけで、私は炊飯器でご飯を炊きながら、昔兄貴が好きだと言っていた気がするアジの開きと、和食には欠かせない味噌汁を作り始めたのだった。

「いただきます……」

リビングのテーブルの座席に、私と向かい合うように兄貴は座っている。食卓には二人分の朝食。アジの開き、みそ汁、お椀によそったご飯が置いてあり、その一つ一つをゆっくり見回すと、兄貴はアジの身を箸で摘んで口へと運んだ。

「ど、どう？……」

正直、上手く作れたのか不安だ。一応味見はして、大丈夫だと思っただけれど、人に食べてもらうのはやっぱりドキドキする。

「……おいしい」

兄貴の顔が、わずかに綻んだ。

「ほ、ホント？」

「ああ。美味しい、美味しいぞこれ！ 味加減も焼き加減も絶妙だ！」

「ホントに！？ ……よ、良かったあ……」

ああマズイ。私もニヤニヤが隠しきれない……

でも、やっぱり嬉しい。

兄貴に、美味しいって言ってもらえて……

「ああ、本当に美味しいよ。……お前、料理得意だったんだな」

そういえば、兄貴の前で料理作ったことなんて、今までなかった気がする。

「い、一応私だって女の子だし…… お母さんに昔習ったりもして

たから……。しばらく作ってなくて、ちよっぴり不安だったけど。

……意外？」

「いや、意外というか…… じゃあなんで外食ばかり…… あ、

す、すまん」

私が春休み入ってから彼氏と一緒によく外食に行っていたのを思い出したのである。兄貴は慌てて謝ってきた。

「べ、別に気にしなくていいわよ！ ……お母さんからたくさんお金もらっていたし、料理とかするのが面倒くさかったただけなんだから」

「そ、そうか…… そ、それにしても！ このアジの開きも味噌汁も、最高だよな！ 最近自分の作った正直微妙な飯しか食べてなかったから、余計に美味しく感じるよ、ホント」

「そ、そう…… ああ、あ、ありがとう……」

もう！ そんなに褒めないでいいって！

……ニヤニヤがどんどん、溢れてきちゃうから。

兄貴に褒められ嬉しくなる気持ちを、私は抑え切れないでいた。

そして……

「いや、こんな料理だったら、毎日食べたいな」

何の気無しに言ったであろう兄貴の言葉に、

「そこまで言うんだったら…… 作ってあげてもいいわよ…… 毎日」

思わず、こんなとんでもないことまで言ってしまった。

「え！？ その…… 良いの？」

信じられないといった表情をする兄貴。

「べ、別に良いわよ…… どうせ彼氏もいなくなって春休み中暇だし、久しぶりに料理作ったら案外楽しかったし…… アンタが食いたいんだったら、ついで…… そ、そう、ついでに！ …… つ、作ってあげても、い、いいわよ……」

そそそそう、ついで！ これもついで！ たまたま新しい趣味を見つけたそのついでなんだから！

と自分で自分に言い訳をしつつ、一方でワクワクしている自分を、私は感じていた。

「じゃ、じゃあお願いしようかな…… ありがとな、穂波」

兄貴はそう言って照れ臭そうに微笑んだ。

だからそんな嬉しそうな顔しないでよ……

私まで…… 嬉しくなっちゃうじゃない……

気持ちを紛らわすかのように慌ただしく、私も朝食に手を付けるのだった。

3月22日(火) ツンデレな妹

『お、おい、ユキ…… 俺達、兄妹だろ!』

『そんなのどうでもいいの! 私は…… アンタのことが……』
ガバッとヘッドフォンを外し、俺はゲームを中断した。……限界だった。

「で、き、る、かつつーの!! 無理だから! マジ無理!!」

穂波が作ってくれた朝飯を食べ終わり、俺は『デイストピア』のユキルトをプレイし始めたのだが 10分と経たずに、頭が沸騰した。

昨日は穂波のせいで非常に良いところでゲームを中断せざるを得なかったから、実を言うとな続きをやりたくてしかたなかったのだ。

しかし昨夜は色々と疲れてたうえに、穂波の部屋に散らばったガラスの破片を片付け終わったら夜中の1時を回ってしまった。

まあそれでなくとも、あんなことがあった後じゃギャルゲーなんてする気になれなかったのだが……

「昨日の俺…… 無駄にカツコつけすぎだろ……」

「うっう……」と肘を机につき頭を抱え、昨日の自分を猛省してみる。

穂波を追い掛けたのは、間違っていない。あそこで行動できないやつは、兄失格だ。問題はその後であって……

お、思い出だけでも恥ずかしい! ……確かにあれは、口説き文句と取られても仕方ないのかもしれない……

何が、『俺がいるだろ!』だ。

なんであんな臭い台詞、妹に向けて堂々と叫んだりしちゃったんだよおい……

いや、妹だから、だろうか。現実リアルの女の子には奥手の俺が、たと

え自分に彼女がいたとしても、その彼女に向けてあんな台詞を言えるとは思えない。妹だから、あくまで兄として安心させる台詞を言いたかったのであって、決して他意はなかったのだ。それを、穂波ときたら……

『ア、ア、アンタどーゆーのつもりなの！？　ししし失恋の弱みに付け込んで、く、く、……口説こうとするなんて！』

はああああ！？　ふざけんなバツツカ野郎！！

どこの世界に好き好んで妹口説こうとする奴がいるよ！

それなんてエロゲですか！？　ええ！？

俺は怒りをぶつけるかのように「ガンガンッ！」と額を机に打ち付けた。

さらに次の日お礼に朝飯！？　普段料理なんてしないあいつが！？　それなんてエ……

打ち付けていた頭が、ふいにピタリと止まった。

新たに知った、料理上手という、穂波の良い一面。

久しぶりに俺に向けてくれた、眩しい笑顔。

素直になりきれないけど、俺のこと感謝してくれているみたいで……

そこが逆に、可愛く感じてしまうポイントなのか？

「……これが、リアルツンデレの破壊力なのか……　実に恐ろしい……」

俺はシスコンじゃない。

大事なことなので2回言うが、俺はシスコンじゃない。

……そう、ツンデレが好きただけなんだ。だから穂波が見せてくれた『デレ』に、過剰に反応しているだけであって……

うん、きつとそうだ。そうに違いない。そうでなくてはおかしい。

穂波が見せてくれた『デレ』も、あくまで『妹として』兄貴には感謝してるよ』的な兄妹愛から生まれたもののはずだ。俺と同じようにブラコンに目覚めかけてるとかそういうことは……

ない！ 絶対はない！

むしろあつてたまるかってんだ！

もしそうだったら、俺がシスコンへ墜ちる確率急上昇だぞ！？

残念なこと！

いや、穂波がブラコンだったら嫌というわけじゃなくて……

むしろ嬉しくないわけじゃないのだが……

常識的に考えて、ありえんだろ。兄妹がどうのこうのとかい

う以前に

あれだけ俺のことを、嫌っていたんだから。

ゲームの続行を諦めた俺は、今日のノルマ分の勉強に取り掛かることにした。

……まあ、穂波のことやらシスコン疑惑のことやらが頭をぐるぐるまわり、結局勉強も集中できずじまいだったのだが。

驚いたことに、穂波は昼飯も作ってくれていた。朝食のときに穂波が言った、「毎日ご飯作ってあげる」は、てっきり朝飯だけだと思っていたのだが、本人は春休み中毎日三食作るつもりだったらしい。俺はなんだか申し訳ない気持ちになり、

「さすがに毎日三食は大変じゃないか？ 嬉しいけど、あんま無理しないでも……」

と遠慮したのだが、穂波に

「だ、だから！ 別にアンタのためじゃなくて、私の趣味よ！ 料理の面白さに目覚めただけなんだからって言ってるでしょ！」

と怒鳴られたので、とりあえずお言葉に甘えることにした。照れ隠しだったのか、本当に料理の面白さに目覚めたのかは、俺には難しい問題だ。

……いやまあ、穂波が料理作ってくれるなら俺も嬉しいけど。
シスコンだから嬉しく感じてるわけではないということは、ご理解頂きたい。

食卓には、これまた俺の好物の　　タラコスパゲティーが、大皿に盛りつけてあった。俺がいつも座っている席には、スパゲティーとサラダが、それぞれ小皿に盛りつけてある。

朝飯のアジの開きといい、昼飯のタラコスパゲティーといい、もしかして俺の好物を選んで作ってくれているのかもしれない。だとしたら……

余計に、嬉しく感じてしまう。

「す、すげえな……　お前、本当にこれ一人で作ったのか？」

「あ、当たり前でしょ！　私とアンタ以外に誰がこの家にいるってゆーのよ！」

怒っているような口調でも、俺のリアクションに満足しているのか穂波の口元は笑っているみたいだ。

「そんなことよりさ、早く、食べてみてよ」

「お、おう」

今度はつきつきとした顔で急かしてきたので、俺は席に座り穂波の手料理を頂くことにした。

「いただきます」

フォークで麺を絡みとり、口へと運ぶ。「ごくり……」と、俺の横で突っ立ったままの穂波から唾を飲む音が聞こえた。ような気がした。それほどまでに、コイツは真剣な顔をしている。

「穂波……」

「はいっ！」

はい！　って……　そんな返事、穂波から初めて聞いたぞ。どんだけ緊張してるんだこいつは。

「……お前、料理の才能ありすぎだろ。店で喰ったやつよりも、全然美味いぞ、これ……」

俺は感じたことを率直に伝えた。

嘘偽りのない、100パーセントの本心を。

すると、花が開くようにパーっと、穂波の顔が綻んでいった。

「ホント!? 嘘じゃない!? ……てか嘘だったら殺すわよ!？」

「う、嘘じゃねえよ! ……本当に、美味しい」

チラリと隣を見ると……

穂波が

今まで見たどんな女の子のそれよりも明るく

それこそ太陽のように、キラキラと

満面の笑みを、浮かべていた。

俺に向けて。

……アウト。

一発でアウト。

うおおおおお!!

違う違う違う!!

俺はシスコンなんかじゃないっ!!!!

こいつに惚れているとかそんなこと有り得ない!!!!

ガツガツガツと、俺はスパゲティをどんどん口のなかへと放り込んでいった。とにかく何かして気を紛らわせないと、シスコンという谷底へ紐無しバンジージャンプしてしまう。そんな恐怖感に駆り立てられ、無我夢中の猛スピードでタラコスパを喰らい上げる。

「おかわりっ!」

30秒ほどで空になった小皿を、直ぐさま穂波に差し出す。

「もう、そんなにがつついちゃって…… よ、よっぽど美味しかったんだ…… ありがとう……」

ウニウニクネクネと、何やらモジモジしている穂波。その女の子っぽい仕草もまた……

ああもう、料理はめちゃめちゃ美味かったさ！

ただそれよりも、お前の笑顔がかわ……

だー！！！！

な、に、考えてるんだ俺はー！！！！

アイツはただの！

……妹だぞー！！！！！！

3月22日(火) シスコンな兄貴、ブラコンな妹

穂波が作ってくれた昼飯を食べ終わり、3時くらいまで本を読んで過ごしたあと、俺はパソコンで調べ物をした。

調べた内容は……

『シスターコンプレックスについて』である。

俺は知っておかなければならなかった。自分が今まさに陥^{おちい}るうとしていて、この状態について。

調べた結果、シスコンになる原因は社会不安や家族問題などが挙げられることがわかったのだが、どうにも俺には当て嵌まりそうにない。ただし原因は学者ごとにいくつもの説があるらしく、定説と呼べるものはないようだ。

もう一つ、わかったことがある。シスコンとは姉や妹に恋愛感情を抱くことだとばかり思っていたが、姉妹に強い愛着や執着を持つことをシスターコンプレックスというらしいので、恋愛感情を抱いていないからセーフとは一概に言えないのだ。つまり……

「俺は、限りなくシスコンに近いのかも知れない……」

シヨックのあまり「ドンツ」とベッドの上に倒れ込んだ俺は、それでも自分がシスコンだということを確認できなかった。あくまで、ギリギリスレスレなのであって、完全にはなっていない。そう自分に言い聞かせなければ、これから先生きていけそうにないのだ。

「ちつくしよう…… 誰かどうにかしてくれよ……」

正直、一昨日までのトゲトゲした穂波が恋しくなってきた。

日も落ちてきた午後4時頃

私は自室の椅子に座り、机の上のパソコンと睨めっこをしていた。

画面には、オススメの料理レシピを紹介しているWebサイト、『風の食卓』のトップページが開かれている。このサイトは、とある主婦が個人で運営しているブログなのだが、今日見渡してみたレシピサイトの中では1番メニューの数が多く解説も丁寧だったので、今日の夕食はこのサイトを参考にしようと思ったのだ。

「うーん、今日の夕飯はどうしようか…… アイツは他に何が好きなんだっけ？ 魚とか、魚介類が好きだったような…… んー、いつも同じテーブルでご飯食べてるのに、なんで思い出せないのかな…… って、なんで私がアイツの好みなんか考えなきゃいけないの！？ ついでに作ってあげるだけなのに！」

……絶対おかしい！ これはあくまで、料理するのが楽しくて仕方ないからどうせなら他の人にも食べてもらって感想とか聞いてみたいな〜とか思っているだけだし、それなのにアイツが好きそうな料理を作ることばかりか考えちゃってるし、アイツに『美味しい』って言うてもらうのばっか楽しみにしてるし、私の料理食べたときのアイツの笑顔が忘れられないし、そもそもアイツのこと自体が頭から離れないし……

「も、もしかして私って……」
「ブラコン、なのかな……」

そんなことを思ってしまった。恐ろしくて、とても口には出せなかったけど。

「ダメ！ そんなのダメよ私！ あ、あんなやつ別にどうとも……」
目を覚ませ！ という感じに、私は「パンパンツ！」と両手で頬を叩いた。しっかりしなきゃ！ 私はアイツとは違うんだから！

私は昔から、兄貴のことをシスコンだと思っていた。私のこと構ってばっかだったし、無意識だとは思っけど、私のことよくいやらしい目で見てるし（特に脚を）、私が彼氏と電話しているのを聞いたら、突然イライラした雰囲気になって舌打ちすることだったのだから。

やっぱり、アイツには元々シスコンの気があるとしか思えない。客観的に見ても、おそらくそうなんじゃないか。本人は自覚がないかもしれないけど……

そんな兄貴のことを、私はぶっちゃけ気持ち悪く思っていたんだ。

昨日の、あの事件までは。

私を公園まで追い掛けてくれた、あの時までは。

俺がいるだろと言ってくれた、あの言葉を聞くまでは。

本当は私のこと、いやらしい気持ちとかじゃなくて…… 大
切に、大事に、思ってくれていたんだよね…… 妹として……

兄貴の性格が優し過ぎることは、私もよく知っている。困っている人を見ると放って置けないタチなのだ。

道端で喧嘩しているオツサン二人を宥めようとして巻き込まれて殴られたり、コンビニのレジで小銭を床にばらまいてしまったおばさんを見て、拾うのを手伝おうとしたら、金を盗むなど怒鳴られたり…… 誰かを助けたその度に、兄貴は損をしている。それでも、誰かを助けたいという思いは変わらないみたいだ。

私だって、実際は何度も兄貴に助けられてきた。けれども私は、素直に感謝ができず、昨日の夜のように 『ほつといてよ!』
などと、逆に傷つけるようなことをしょっちゅう言ってしまうんだ。

兄貴のそんなところ、本当は嫌いじゃないのに。

とりあえず、様子を見よう。もしこれから先ずっと、兄貴のことがばっか考えているようだったら、私はブラコンに目覚めちゃったんだってことをきちんと受け入れて

しっかり、治していこう。

客観的に見て、今の私はブラコン気味だと思うけど、昨日あんなことがあったばかりなんだから気の迷いってことも十分ありうる。

むしろそうであってほしい。

「こ、この件は保留ってことで、うん、そうしよう」
私はパソコンのマウスを握り、再び画面と睨めっこを始めた。

昨日元カレにフラれたばかりなのに、考えているのは兄貴のことばかり

この時点で、すでに重症なのでは？

……ということに、私はまだ気付いていなかった。

3月22日（火）兄貴の夢

私と兄貴は、食卓に向かい合うように座って、お互い無言で夕食を食べている。リビングに響くのは、テレビから流れるニュースの音声のみ。

今日の夕食は、シーフードカレーを作ってみた。『風の食卓』で紹介しているメニューの中でも特にイチ押しらしいので、挑戦してみたのだ。

ま、まあついでに、兄貴もシーフード系の料理が好きらしいし。……あくまでついでだけれど。

朝昼と兄貴に好評価を貰っていたから自信が付いていたはずなのに、いざ食卓で食べてもらうとなると途端に不安になったのだが、そんなモヤモヤを打ち消すように兄貴は、『めっちゃめっちゃ美味しい！』とテンションを上げてくれた。

嬉しいのと恥ずかしいのと照れ臭いのがごっちゃになって、私は兄貴に話し掛けられない。兄貴も、食事のときは私にくだらないうとで話し掛けてくるくせに、今日の食事は朝昼晩とも会話がほとんどなかった。

そこで、なんとなく気まづくなった私はテレビの電源を入れてこの場の雰囲気と和ませようとしたのだ。画面では、ニュースのアナウンサーが国際情勢について報道している。

『続いているニュースです。内戦が続いてきたスーダン南部、独立へ向けて一方前進か。国連のスーダン派遣団が……』

どうやらアフリカのスーダンという国の一部が独立するかもしれない、ということがアナウンサーの話からなんとなくわかった。そういえば……

兄貴は、こういう世界中の紛争とか難民だかの話題がニュースで流れているとき、いつも真剣な顔でテレビを見つめていたっけ。

スプーンを置いて兄貴の顔を見てみると…… やっぱり、視線がテレビに釘付けになっていた。

「兄貴ってさ、こようゆー話題、好きなの？」

いい加減無言の空気が嫌になってきたのもあり、何の気無しに問い掛けてみた。

「ん、ああ。好きというか…… 放って置けないっていつかさ……」
兄貴は私のほうに視線を向け、少し悲しそうな顔をした。

「放って置けないって…… またいつものお節介癖？ ……ま、まあ別に、アンタのそういうとこ嫌いじゃないけど……」

というよりそんなお節介癖に助けられたんだから、感謝しているよ。

……とまでは、思っても口に出せなかった。

その……

は、恥ずかしくて。

「お節介癖…… そうかもしれないな。けど…… 世界を救うくらいのお節介、してみたいんだよね」

「え？」

兄貴はどこか遠くを見るような目をしていた。

……私の知らない、兄貴の顔だった。

「俺さ、将来国連に勤めて…… 難民とか飢餓で苦しんでいる人とかのために働いて、世界を少しでも平和にするのが夢なんだ」

若干照れ臭そうに笑いながらも、強い意志を感じさせるはっきりとした声で、兄貴は言った。

3月22日(火) 兄貴の夢「2」

「国連って…… 国際連合のこと？」

国際連合については、学校の歴史の授業で少し触れたぐらいの知識しか私にはなかった。

「そう。国際連合のUNHCRアンカーって機関に入って、あ、UNHCRアンカーってというのは難民に関する色々な問題を解決していく組織なんだけど、そこでさ、人を救う活動がしたくてね」

自分が将来やりたいことを話しているからだろうか、兄貴のテンションが上がってきたらしく、早口になる。

「いやまあ、最終的には世界の貧しい国々で活躍できればいいから、他にもいろんな組織とか機関とかにも興味あるんだけどさ。とにかく、実際にその国に行って、その場所で仕事がしたいんだ」

「そうなんだ……。だからアンタは、こういうニュース見てるとき目がマジになってるのね」

「そう？ …… ああ、そうかもしれないな。今の俺にはそういう国や人のためにできることはあまりないけど、いつかは絶対やってやる、的な意気込みっつーか、そーゆーこと思いながら見てるって感じだ」

再びスプーンを手に取り、兄貴はシーフードカレーを口に運んだ。テレビの画面はすでに、B級グルメ特集のコーナーに移っている。

知らなかった。兄貴が、そんな立派な夢を持っていたなんて。

勉強が得意な兄貴は、県内でも有数の進学校に通っている。しかし、中学3年生になるまでの兄貴は勉強がまったくできない、いわゆる落ちこぼれだったのだ。それが受験が近づくと連れてどんどん伸びていったらしく、最終的には、絶対無理だと親にも先生にも言われた志望校に合格した。

それからの兄貴は、よく私に『勉強教えてやろうか』と聞いてくる

るのだが、その押し付けがましい感じが嫌いで、私はほとんど断ってきた。だから、兄貴の頭が良いところは好きじゃなかったのだけど……

「兄貴はさ、なんでそういう夢を持ったの？」

「そうだな…… 中3のとき、たまたま見たテレビの特番がきっかけかな。たくさんの国が、内戦や飢饉で苦しんでいる実情を見て衝撃を受けて、それから俺がなんとかしなくちゃって思った。だから勉強頑張ってさ、世界の問題を理解していつて役に立てようってなつたワケよ」

やっぱり、そうだったんだ。

兄貴が急に勉強できるようになった理由は知らなかったし、興味もなかったんだけど……

真相を知ったこの瞬間、自分の兄貴が何だか誇らしくなった。私はまだ明確な夢とか目標とかを何も持っていないのに、兄貴はしっかりと将来について考えているし、しかも、貧しい国々の人を救う、だなんていう立派な夢を持っているんだ。

カツコ良い……

思わず、そう思ってしまう。けど……

別に、いいや。立派な夢に向かって真剣に考えている人間をカツコ良いと感じるのは、たとえ相手が自分の兄貴でも、自然なことだと思っ。

私は素直に、この自分の感情を受け入れることができた。兄貴はカツコ良い、と思う感情を。あくまで、立派な夢を持っているってところだけの話だけだ。

「……ま、まあ、なかなか良い夢だと思うわ。だから…… が、頑張ってるね……」

うっ、は、恥ずかしい……

こんなに恥ずかしいのに何で言っちゃったの？

私バカなの？ 死ぬの？

頭が丸ごと火の玉になったかのように、自分の顔が熱くなっているのがわかる。恥ずかし過ぎて、兄貴の顔をまともに見られない。

「え、が、がん……？ あ、えーっと…… お、おう！ 頑張るか
らな。ありがとうよ」

兄貴の顔もほんのり赤らんできた。やっぱり兄妹だからか、変な
ところがそっくりだ。

結局また、食卓は静かになってしまった。私はシーフードカレー
を食べ終わるまで、テレビをただ何となく眺めているしかなかった。

3月22日(火) 妹とデート…？

時刻はすでに夜の9時。

リビングのテーブルで、かりんとうを食べながらテレビを見ているところに

穂波が、ドアを開けて入ってきた。

「おっ、なあ穂波、『デビル・ブレイカー』の劇場版が明日から公開だってさ」

俺は先程テレビで流れていた映画のCMでそのことを知ったので、やってきた穂波にそのことで話し掛けてみた。

「へえー、明日なんだ。じゃあ早く観に行きたいな」

お、あんがい普通に答えてくれたぞ。

普段なら「あつそ」と興味なさ気にスルーするはずなのに。やっぱり昨日から俺に対してそんなに尖らなくなってきたな。

穂波は俺の向かい側の席に腰掛けると、テーブルの上にあるかりんとうをポリポリと食べ始めた。どうやら小腹が空いていたのでやってきたらしい。

「穂波も観に行く予定なんだ」

穂波の雰囲気柔らかいのを感じ取ったので、俺は話を続けることにした。

「んー、観に行きたいけど、デビル好きな友達あまりいないから、1人で行くのかなって感じ」

『デビル・ブレイカー』とは、某人気少年誌で連載中の漫画、及びそれを原作としたテレビアニメのことである。若い世代にかなり人気のある作品で、小学生から高校生まで男女ともにファンが多い。俺と穂波も小学生の頃から愛している作品なのだ。

「そっか。意外だな、女子でもけっこう好きな人多いと思ったんだけど」

「まあ、原作好きな人はけっこういるんだけど、アニメは見てない

らしいのよね」

「なるほど。そういうことか」

デビル・ブレイカーのような5年以上も続いている少年マンガ原作のアニメは、マンガが高校生まで人気があってもアニメだと対象年齢がグッと下がる傾向にある。俺の高校でも、原作を集めている人は多くてもアニメは見えていないという人はけっこういた。

「で、そういうアンタはどうなの？ 誰かと観に行くわけ？」

かりんとうをかじりながら、穂波が探るように聞いてくる。何となく尋ねてみたというよりは、俺の動向が気になっているといった感じだ。

「え？ あ、ああ……俺も行きたいんだけど、一緒に行く友達がいないからどうしようかな〜って。1人で行くのもつまらないし、誰か一緒に行ってくれる人がいればいいんだけどな」

その返事を聞いた瞬間、穂波の顔が一瞬明るくなった。ような気がした。

「そ、そう。えーっとじゃあ！ ……あの……その……」

今度は顔が赤くなってきてるぞ？ どうした？

見ると穂波は、かりんとうを指先で転がしながら、小さく俯き何やらモジモジとしている。何かを言いたいんだけど言えない、そんなもどかしい感じだ。

こ、これは、もしかして

じゃあ一緒に見に行こう！ ってなるパターンか！？

……いやいやまさか。

穂波が俺と、なんて……

あ、ありえんだろ……

いや待てよ、やっぱりそうなのか……？

最近何だかやけに俺に優しいし、誰かと一緒に行きたいって言った俺に気を使ってくれたのかも。もしくは穂波も1人じゃつまらないから、仕方なく冗責でも誘おうかな〜って思っているんじゃないか。だとしたら……

一緒に行くのも、良いかもしれん。

ほら、穂波ならデビル・バスターの話も合うし、兄妹なんだからたまには一緒はどこか出掛けるくらい自然なこと、そう自然なことなんだ。俺も1人で映画行くのなんてつまらないし……

穂波はまだ、モジモジとしている。

さすがにここまできたら、いくら女心がわからないと言われる俺でも丸わかりだ。

だったら、兄としてここは空気を読んで……

「なあ穂波…… 明日暇だったら、い、一緒に…… 映画観に行かねーか？」

モジモジしてる穂波かわいい…… と思う気持ちを超必死に押さえ込み、俺のほうから誘ってみた。

「ほえっ!？」

穂波は驚きのあまりか、かりんとうをテーブルに落つことし間抜けなりアクションをしてみせた。

「い、いやまあ、1人で映画観に行くのもつまらないし、穂波も観に行きたいんなら一緒に見に行くのも良いんじゃないかな〜って」

「え、え、え、えーつと、い、一緒!? 私と!？」

ボンっ! と爆発音が聞こえてきそうなくらい、穂波は急速に顔を赤化させた。

そんなに動揺されると、こっちまで顔が赤くなってしまう。

「べ、別に深い意味はないさ。まあ、穂波が嫌ならいいけど……」

「いいい嫌じゃないわ!」

突然声を張り上げた穂波に驚いて、今度は俺が、持っていたかりんとうを手から零した。穂波はすぐに我を取り戻し、俺の発言を強く否定したことをごまかすように続ける。

「ままままあ? 私も1人で映画行くななんて寂しさ極まる行為はしたくなかったワケだし? アアア 안타が! どうしても一緒に行きたいって言うなら、や、やぶさかでないっていうか、つまり、い、行ってもいいけど、私は別に好きで 안타とデ、デートに行く

んじゃないってことよ!」

ん!?

呂律ろれつが回っていなくて聞き取りにくかったが、今けっこうな爆弾ワードがあったような……

「えっと……別に『デート』までは言っていないんだけど……」

「え!?! 私、デ、デエエ ±×÷ ¥ #@\$%!?!? ????」

穂波の言語が人外のそれになった。

ついでに顔面も、赤 白 朱 蒼白 紅と目まぐるしく変化していく。

「お、おい落ち着けて!」

「このヘンタイっ!!」

「グハアアア!!」

かりんとうを額に投げ付けられた。至近距離から、おもいきり。

「な、何するんだよ!?!」

痛い。おでこがものすごく痛い。

「うるさいうるさいうるさい!! このバカ兄!!」

穂波は耳まで真っ赤にした顔で椅子から立ち上がり、ドンドンと足を踏み鳴らしながらリビングを出てしまった。

3月22日(火) 妹とデート…？ (後書き)

次話かその次の話で、新キャラ登場させます！

3月22日（火）妹で妄想

「まったく、穂波のやつ……　　まだおでこいてえぞ、ちくしょう……」

俺はベッドの上で大の字になりながら、先程穂波にかりんとうを投げ付けられた額をさすってみた。鏡で見たらきつと赤くなっていることだろう。

穂波、俺のこと映画に誘おうとしてたんじゃなかったのか？

あんなに動揺してたつてことは……

結局俺にはわからないが、どうやら一緒に映画を観に行く話はなしになったみたいだ。あんなに怒って部屋を出ていってしまったんだから、当然だろう。

「はあ……」

自然にため息が出る。なんだかんだ言っても、ちよつと残念だ。深い意味や下心なんてないが、どうせ見に行くならやっぱりデビル・ブレイカーが好きなアイツと見に行きたかった。

……繰り返すが、下心なんてない。

……多分ない。

「ああもつっ！　だから俺は違うんだつて！」

そう、俺はシスコンじゃない。

ちよつとお節焼きだから妹のことがよく気になるだけだし、エロいことたくさん考えちゃう年頃だからたまに妹までもそういう目で見ちゃうだけだし、ツンデレ好きだから穂波の仕様にちよつとキユンときてしまったりするだけで、別に妹を1人の女として意識しているとか妹に彼氏できて欲しくないとかそういうことは一切考えてない！

俺は気を紛らわすために、ベッドの下から『ディストピア』のパッケージを取り出した。カバーイラストには、メインヒロイン5人が非常に綺麗な絵で描かれている。

「俺が好きなのはこう、大人っぽくてセクシーな…… リサみたい
な女の子が……」

俺の視線が、無意識のうちにパッケージ右上のヒロイン……
ユキへと移っていく。主人公の実の妹で、黒髪ロングに気の強そ
うな目でロリで貧乳でツンデレで美脚のニーソで……
穂波に、そっくりで……

ドクンっ。

心臓が一回、大きく跳ねた。

俺が今までプレイしたギャルゲーのどのルートよりもめり込ん
だ、ユキルート。まだ途中までしか進めていないその内容が頭の中
で再生され、しだいに脳内のユキが穂波に変わっていき……

興奮、した。

かなり、激しく。

ドクンドクンっ。

心臓がさつきよりも大きく脈打つ。

俺は今、一線を越えようとしているのではないか。実の妹で
アレな妄想をするという、禁忌の一線を。

理性が上手く働かない。感情が上手く制御できない。俺の頭の中
で、穂波がどんどんとあられもない姿に……

「コンコンッ」

部屋のドアを叩くノックの音で、俺は現実に戻された。

「あのさ、話があるん……」

「うわぁあああぁー!ー!ー!」

俺は慌てて『ディストピア』のパッケージをベッドの下へと隠した。ドアの向こうでは、「な、何!? どうしたの!?’と穂波がびっくりした声をしている。

おおお俺はなんつーことをしてたんだ!! ユキを穂波に変換して、あんなエロい……

だあああちつくしよう!!

忘れる忘れる忘れるお!!

俺は何もしてない!! 何もやましいことなんてしていないんだ!!

不整脈を起こしたんじゃないかというくらいに、心臓がバクバク暴れている。俺がしていた妄想が穂波にバレたんじゃないかと、いらん心配まで頭を駆け巡る始末だ。

「い、いや、ななな何でもない! て、ていうかなんか用でもあるのか!?’

平静を装うつもりだったが、まったく上手くいかなかった。しかも舌を少し噛んでしまったみたいだ。

「そ、そうよ。……あのさ」

ドアを挟んでいてもわかる。言いたいことがあるがなかなか言い出せない、あの状態だ。

「まあとりあえず、入れよ……」

ベッドの上に座りなおすと、ドアがゆっくりと開いていって、風呂上がりだろうか まだ髪が湿っていて上気した顔をしているパジャマ姿の穂波が、俺の部屋へと入ってきた。

「で、どうしたんだ? 話したいことがあるなら、言ってくれ」

さっきまで妄想していた穂波が風呂上がり姿で現れたことで内心激しくうるたえたが、なんとか平淡な言葉を絞り出す。

「あのさ……」

こっちを見ないまま俯き顔で、穂波も懸命に言葉を絞り出そうとしているようだ。

「ごめん……ね、さっきの、かりんとう……」

「え？ …………… ああ、あのことが。 …… 別に気にしてないよ。大丈夫だって」

…………… 意外だった。穂波がわざわざ、俺の部屋まで謝りにきてくれるなんて。いやそれよりも、かりんとう投げ付けたことを気にしていたことのほうが意外だな。普段のアイツは物投げ付けるとか日常茶飯事だったわけだし。

「ありがとう…………… あ、あと……………」

穂波は顔をほんの少し上げ、続けた。

「明日、やっぱり一緒に行こう？ …… 映画」

「ほえっ!？」

かりんとう事件の穂波みたいな間抜けなりアクションを、今度は俺がとってしまった。

穂波の顔を見てみると、風呂上がりのせいだけじゃないことがわかるほど、顔が真っ赤になっていた。

3月23日（水）兄妹でお出かけ

時刻は深夜0時を回っている。

部屋の明かりは消したけど、窓から入ってくる街頭の明かりが、ベッドの上の私を照らす。

早く眠りたいのに、頭が冴えて眠れない。昨日の夜眠れなかった分長く昼寝しちゃったのも原因かもしれない。

あのときから……

一緒に映画行こうと兄貴に誘われたときから、私の心は手綱たじなをなくした馬みたいに制御がきかないんだ。考えたくないはずなのに、兄貴の姿ばかりが目に見えちゃう。

映画観に行きたいけど1人じゃつまらないって言ってたから、本当に仕方なくついでに一緒に行つてあげようかって思ったのに、まさか兄貴のほうから誘ってくるなんて……

びっくりして変な失言までしてしまった。ついでにかりんとうも

……

「くすっ」

思わず笑ってしまう。兄貴には悪いことしたなって反省してるけど、今思い出すとなんだかすごくおかしい。おでこにかりんとうぶつけられて「グハアアア!!」だって、ふふっ。

兄貴は本当に、なんとなく誘ってみただけなんだろうか。私も男心つてやつはわからないし、まあどうでもいいか。

昨日の夜同様に兄貴が眠りを妨げているけど、今夜はなんだか穏やかな気持ちでいることができた。

「ほら、早くしなさいよこのグズ!! 電車遅れちゃうでしょ!!」

日は既に出ている、朝7時45分。穂波が1階から急かしているのが嫌でもわかる。その声にはやはりイライラが滲み出ている。

「マズイ、早く支度完了させなきゃ。」

「すまん今行く！」と、シャツのボタンを留め終えるなり荷物を引っつかんで自室のドアを開け放ち、俺は慌てて階段を駆け降りるのだった。

今日は朝から、穂波とデート…… じゃない嘘だ違うありえない。

穂波と2人で映画を見に行くだけだ。ついでに昼飯も一緒に食べてくるだけで、ついでに買い物とかも一緒に行く予定になっただけで、決して男女のアレコレではない。

世間一般にはそれをデートと言うんじゃないだろうかと、ほんの一瞬微細で不粹な考えが頭を過ぎったが、大丈夫。

なぜなら、穂波は妹だから。

これはあくまでも「家族でお出かけ」ってやつだ。今日はたまたま両親が不在だが、そこら辺の仲が良い家族となんら変わりのないことをするだけ。

一通り自己正当化を終えたところで、玄関で靴を履いている穂波の斜め後ろに降り立った。

「もう！ 遅いじゃない！ 何やってるのよ！」

穂波は玄関の段差に腰掛け靴の紐を結んでいるので、こっちに顔を向けず文句を言ってきた。

「す、すまん。財布探してたんだ」

今日は6時半には起床して、それよりも前に起きていたらしい穂波が作った朝飯を食べ、時間には余裕があったはずなのに……

財布が見つからずに探し回っていたのだ。我ながら恥ずかしい。結局、机の引きだし奥に隠れるように入っているのをついさつき見つけたわけだが。

「もう、このバカ兄…… あれ？ 解けない？」

穂波の靴紐を覗き込むと、何やら堅結びになっているようだった。

紐を解くのに悪戦苦闘している。

お前こそ、何やってるんだか…… と穂波の斜め後ろからその様子を見ていると……

黒いニーソックスに包まれた穂波の脚に、目が行ってしまった。

さらに視線が移り、白を基調とした少々短めのスカートと黒ニーソで区切られたふともも回り

いわゆる『絶対領域』にも。

アウト…… じゃないギリギリセーフ。

けっこう危なかったが、なんとか持ちこたえた。思慮道徳理性など善の感情をフル動員したうえ、機動隊が凶悪犯を取り押さえるかのように必死だったけど。

朝っぱらからアウトなんてしてたら、今日一日持つわけもない。

ここで真人間の道を踏み外すわけにはいかなかった。

妹が好みど真ん中の脚をしているというのは、幸運なようで実は限りなく不幸な事だ。いつも見つめられるほど近くににいるのに、妄想に使うことは決して許されないからだ。

もしこれが、クラスメートや幼なじみや先輩やら後輩やらの脚だったら、遠慮なく脳内で触りまくれるのに……

内心名残惜しくも、俺は穂波の美脚から目を逸らし、今日一日決してあいつに邪な感情よこしまを抱くまい、と心に誓うのだった。

俺と穂波が乗り込んだ数秒後、「プシュー」と音を立て、電車のドアが閉まっていく。ふう、なんとか間に合ったな。

車内には空いている席がいくつかあるくらいで、2人並んで座れそうな座席は一カ所しか見つからなかった。穂波がそのうちの一つ

に座ったので、俺はその座席の左隣りに腰をおろし、ホッと一息ついた。

「危なかったわ…… まったく、アンタのせいなんだからね！ わかつてる！？」

「お前だつて靴紐解くの5分も使つ……」

「ああ！？ なんかいつたかしら？」

「……なんでもありません」

右隣りの穂波に一睨みされ、何も言い返せない。まあ、実際に俺のほうに財布探すので時間喰つてたわけだし、悪いのは俺だよな。

「ホントにバカ兄なんだからアンタは……」

俺の隣でぶくつと頬を膨らます穂波。マズい、家を出たときよりも不機嫌そうだ。

「まあそう言うなつて。向こう着いたらなんかおごつてやるから」

「え！？ ……じゃあ、劇場グッズも？」

物で釣られるのかよ。現金なやつだな。

「わかったわかった。あんまり高くないやつな」

「う、うん！ じゃなかった……し、仕方ないわね。アンタがそこまで卑屈になるんだつたら、それで許してあげるわよ」

一瞬嬉しそうな顔を見せたが、すぐにツンツンとした顔に戻った。

本当に素直じゃないやつだな……

てか、そんなに劇場グッズが欲しかったのか？ 昨日はグッズの話なんて少しもしていなかったけど。

走り出した電車の中、俺達は『デビル・バスター』の話でそこそこ盛り上がった。やっぱり共通の趣味の話題は、ここ数年あまり会話をしてこなかった兄妹同士でも効果があるらしい。

今日俺達が行く映画館は、鳴沢家の最寄り駅であるB駅から、電車で40分ほどのところにある。本当はもつと近くに映画館があるのだが、穂波が知り合いに遭遇したくないからというので遠出をすることにしたのだ。

……いやまあ、あれだけ正当化しておいてなんだが、たしかに兄妹2人で映画見に行くところは見られたくないよな。それに、俺みたいなのやつを彼氏だと誤解されるのもこいつは嫌だろうし。

なんだか複雑な気持ちの俺と、不機嫌だか上機嫌だかわからない穂波を乗せて、ガタンゴトンと電車は揺れる。

電車がB駅を出てからけっこう時間が経ち、俺と穂波の会話も減ってきた。普段あんまり会話をしてこなかった溝は、そう簡単には埋まってくれない。

思えば、本当に久しぶりだった。昨日今日とあれだけ会話をしたのも、穂波と2人で出かけることも。

俺のほうから穂波に話し掛けることはよくあったが、穂波の返事はいつも一言二言で会話にまで発展しなかったし、家族でどこか出かけることはあっても穂波と2人きりでなんて、そもそもあったかどうかも疑わしい。

お互い無言になった少し後、穂波がケータイをいじくりだしたので、俺もケータイで友達のブログでも見ようかと思い、ズボンの右ポケットにケータイを取り出そうと手を伸ばしたのだが……

穂波のふとももが、目に入った。俺のすぐ右隣りに座っている穂波。その黒ニーソに包まれた膝が　俺の膝と触れ合うくらい近くに
ある。

……やばい、意識してしまった。というより、今まで意識しなかったのがもはや奇跡だ。それほどまでに俺と穂波は密着しているのだから。電車の座席だから当然だが、この距離はマズイ。……かと言って席を立つのも不自然だし……

俺は脳ミソフル回転で打開策を思索した。こういうときに限って席に座りたそうなお老人などが一人も見当たらない。俺は自分の不幸と浅はかさを呪った。穂波の隣になど座るべきじゃなかった。多少不自然でも、初めから立っておくべきだったのだ。

……これじゃあの時の二の舞じゃねえか。裸足で家を飛び出した

穂波を、おんぶして帰った時と……

あの時の感覚が蘇る。俺の背後に密着していた穂波。やわらかい感触がして、熱っぽい息がして、良い匂いがして…… 甘酸っぱい、なんだろう…… 柑橘系の良い香りがしてたな……

…… やっちまった。

…… アウト。

完璧アウト。

…… 脚だけじゃなく、隣にいる穂波の匂いまでも意識してしまったから。

…… 甘酸っぱい香りが、俺の鼻をくすぐる。

ガアアアアアア！！！！

俺の、バツカヤロー！！！！

耐え切れずに席を立ち上がる。限界マジ無理ホント無理。兄が兄でなくなり妹が妹でなくなる俺はただの変態じゃなくてシスコンのレットルを貼られたド変態になり家族からも友人からも蔑まれ絶望的になり死……

「ちよつとバカ兄、降りるんでしょ？ さっきから何ぼーっと突っ立ってるのよ」

精神崩壊を起こしかけ絶望的な妄想を繰り広げていた俺は、穂波の声で我に返った。開いた車内ドアから見える駅のホームの看板は、俺達が降りる予定のW駅に着いたことを知らせていた。

「た、助かった……」

実際には既にアウトしていたのだが、なかったことにした。人は忘れることで前に進めるのだよと、悟りを開いたような気持ちで自分に言い聞かせ、怪訝な顔をしている穂波と一緒に俺は電車を降りるのだった。

3月23日(水) 兄妹でお出かけ(後書き)

次回、タカトシの幼馴染に遭遇して穂波が!?

3月23日(水) 兄妹でお出かけ「2」

兄貴と一緒にチケットを買い終わった私は、映画館のグッズ売り場で兄貴に買ってもらうグッズを吟味している。支度に時間がかかった罰で買わせるのだから、高いやつを買わせようかと一瞬思ったけど、すぐさまその考えを打ち消した。もともとグッズには興味なかったし、せっかく兄貴から買ってやるって言ってくれたのにじわるなことをするのは気が引けたからだ。それに……

兄貴が私に買ってくれるものなら、なんだっていいから欲しいな。

…………… ななななーんて嘘だよーん(?)

そそそそんなこと微塵も考えてないし? 強いて言うなら、タダで貰えるものなら何だって貰ったときの貪欲精神だし? べ、べつに兄貴からプレゼント貰えることを喜んでるわけじゃないんだから!…!

私は頭に浮かんだありえない思いを必死に掻き消し、グッズ選びを再開した。やっぱりどうせなら、自分が気に入ったものを兄貴に買ってもらうおう。そう思い私は、当初よりも真剣に商品棚を見回した。

デビル・バスターのグッズは、携帯ストラップやクリアファイルから、ぬいぐるみや抱き枕まで多種多様に揃っている。種類が多過ぎて、逆に決まらない。そうこうしているうちに、デビル・バスター上映まであと10分を切ってしまった。

「どうせなら、俺も何か買っところかな」

時間が迫っているのに気付いてないのか、隣で兄貴はのほほんとしている。まったくこれだから、今日の朝も電車乗り遅れそうになるんだ。

ふと、兄貴が何を買うのか気になって、手元を覗いてみた。兄貴は、劇場版デビル・バスターのメインキャラがプリントされた携帯ストラップを手に持っている。

「お、これ良いな。ちょうど携帯ストラップ付けてないし、穂波、俺これ買うわ」

兄貴は一瞬で買う品を決めてしまった。携帯ストラップを手に取り私の顔の高さでちらつかせた。

「あっそう。ま、まあ、好きにすれば？」

携帯ストラップか…… カメラを使うときに邪魔になるからと付けない友人がいたが、私はカメラはあまり使わないほうだし、ケータイに付けないにしてもカバンとかに付けられる。

最初はそんなに興味がなかった携帯ストラップが、兄貴が手にしてからやけに魅力的に見えてきた。

……べべべ別に、兄貴とお揃いにしたいから欲しいとかじゃないし！ もう時間もないことだし？ 私もそれでいいかなーって何となく思ったただけなんだから！

深い意味なんてないけど、私も兄貴と同じストラップを買おうと思った。本当に、深い意味なんてないんだから！

「じゃ、じゃあ私もそれ……」

「お、穂波、これなんか良いんじゃないか？ ほらお前、ちょうど目覚まし時計壊れたばっかだろ？」

そう言っただけで兄貴が手に取ったのは、デビル・バスターのマスコットの的なキャラ、『エリー』という黒色で丸っこい形の悪魔を模した目覚まし時計だった。エリーは私の中でも1、2を争うほど好きなキャラだったし、この目覚まし時計のデザインもなかなか良い。兄貴の言うとおり今の私は目覚まし時計を持っていない。こんなグッズが売っていることに気付いていたら、さっきまでだと間違いないことにしたと思う。けど……

「で、でもそれ、高くない？」

「それでもないぞ。1500円しかないみたいだし」

「あ、えーっと……」

「いいぞ別に。1500円くらいなら遠慮しなくたって」

「違う。遠慮とかじゃなくて、何だろう……よくわからない。」

「……そもそも、私が携帯ストラップを選ぶ理由なんてとくになかったわけだし、ここで目覚まし時計買ってもらうのが普通ってものよね。エリー大好きだし実用的だし元々持っていた目覚まし時計壊したばかりだし。けど……」

「うん。じゃあそれにするわ。ありがとね」

内心の葛藤を悟られないよう、あつさりとした口調で、私は目覚まし時計を買ってもらうことを決めた。

「……べつに、携帯ストラップのほうがよかったなんて、これーっっぽっちも思ったりしてないんだから。」

「やばかったよな！ めっちゃ面白かったよな!？」

「そうね！ あれはここ数年で見た映画の中で1番面白かったわ！」

映画を見終わり昼食を摂ることにした俺と穂波は、映画館近くのファミレス店内で、劇場版デビル・バスターの感想を言い合っている。テーブルの上には、穂波が頼んだピザと俺が頼んだ海鮮風ドリアが乗っかっているが、俺と穂波は話に夢中で食事にはあまり手をつけていなかった。

お昼のかきいれ時だけあって、店内には家族連れや若い男女やスーツ姿のサラリーマンなどがごった返している。回りのお客達も大声で会話しているので、俺達兄妹も遠慮なく盛り上がる事ができた。

「シャドウが捨て身でバリーからアス力を庇ったときなんか、本当

に感動ものでさ」

「そう？ 私にはあの展開予想できたけど…… あ、でも、バリーのナイフがシャドウの胸に刺さったときは冷や汗かいたけど、アスカがプレゼントしていたお守りが身代わりに刺さっていたのには驚いたわ。すごくホツとした」

「……それこそ予想できたんじゃないか？」

時刻はまだ12時30分。午前中に映画を見終わった俺達は、昼飯の後に近くのショッピングモールで買い物をする予定だ。せっかく遠出するんだからついでに買い物くらいしていこうと、俺と穂波は昨日そう決めていたのだ。

映画は予想以上に面白く、俺達は未だに興奮を抑えきれないでいた。行きの電車の中よりも喜々として会話を楽しんでいる。どうやら穂波も、かなりの上機嫌みたいだ。グッズを買い終わって場内に入ったときは心なしか不機嫌そうに見えたのだが、今はそんな心配はない。映画だけじゃなく俺との会話も楽しんでいるようだ。

お互い頼んだメニューを食べ終えた後も、俺達は10分以上会話していた。内容はほとんどデビル・バスターの話だったが、まあ上出来だ。穂波と少しは仲良くなれているなど実感できたからな。そして、そろそろ店を出ようかという話になったとき……

「アンタ、顔にソース付いているわよ」

「え？」

「ほら、1111、1111」

そうやって穂波は、自分の右頬をちょんちょんと指指ゆびさした。ソースってことは、ドリアにかかっていたホワイトソースのことか。俺は慌てて紙ナプキンをテーブルから1枚取り出し、自分の右頬を拭いたのだが、

「違うわよ、逆逆。私から見て右だから、アンタからしたら左頬」

「あ、そうなの？ じゃあこっちか…… 取れた？」

「全然取れてないわよ。もっと下」

「ん……どう？」

「取れてないって。しっかりしなさいよ」

「……ああもう、穂波、取ってくれ」

面倒臭くなり、俺は穂波に持っていた紙ナプキンを差し出した。

「はあ！？ し、仕方ないわね…… ほら、じっとしていなさい！

……まったく、なんで私が……」

断られるとばかり思っていたのだが、穂波はぶつぶつ文句を言いながらも紙ナプキンを受け取ってくれた。怒っているというよりは、なんだか照れ臭そうだ。俺は言われたとおりにじっとしていると……
… テーブルに乗り出した穂波の顔が、俺の顔の前にだんだんと近づいてきた。

……やばい、地雷踏んだか？ なんだか緊張してきちまったじゃねえか。

これは顔に付いたソースを穂波に取ってもらっただけ、それなのに俺の心拍数がどんどん上がっていく。

そういえば、穂波の顔も若干赤い。あいつも、緊張しているのか……？ いやいやまさか。俺達は…… 兄妹なんだぞ！

穂波の顔が俺の視界を埋めていく様に耐え切れず、ギョツと目を閉じた。そのすぐ後、俺の左頬に紙ナプキンが押し付けられるザラザラとした感触がした。

穂波が俺の頬っぺたに…… それってなんだか、恋人同士みたいじゃ…… などと、些細なことなのに大袈裟に考えてしまう。

「はい、取れたわよ」

ようやく終わったあ！

ソースを拭ってもらっただけのはずだったのに、妙に長く感じてしまった。目を開けると、元の位置に座って少々不機嫌そうな顔をしている穂波が目に入った。

「お、おう…… サンキューな」

何だよこれ…… まるで付き合いたての初はつなカップルみたいじゃ
ねえか。

「気まずい空気から逃れるように、」そろそろ行くところか」と俺は退
出を提案した。

3月23日(水) 兄妹でお出かけ〔3〕

ファミレスを出た後、俺と穂波は駅前のシヨッピングモールへと向かった。俺達の地元にはないほど非常に規模が大きいそのシヨッピングモールは、駅前だというのに駐車場まで完備されていて、電車で来る客も車で来る客も大勢まとめて飲み込む、まるでブラックホールのような場所だった。

中に入ると俺達は、まず衣服売り場から回ることにした。シヨッピングモールの入口から、同じ1階にある衣服売り場へと、2人でスタスタと歩いていく。回りを見ると家族連れだけでなく若いカップルも大勢いたので、もしかして自分達もそう見られているのではないかと焦りが出てくる。

改めて考えれば、俺がどう思おうと、俺と穂波みたいな若い男女が2人で映画見に行ったりファミレスで食事したり買い物していたりする様子は、傍から見ればカップルがデートしているようにしか見えないだろう。俺と穂波は3つも離れているわけだが、はたして何人が兄妹だと正確にわかってくれるだろうか。もしくは、兄妹だとわかった上で、兄妹でイチャついてる変態カップルだと思うのかもしれない。

穂波は俺と違い目が覚めるような美少女だが、血が繋がっているだけあって顔のパーツは俺と似通っているところが多い。髪の色はもちろん、少しキリリとした目や鼻、それに唇など……。どれも若干似ているというだけだが、顔全体の雰囲気で見るとよく似ていると思われる。まあ、俺をあと7割増しくらいにイケメンにしてさらに女に変換しついでに年齢を3つ下げたのが穂波、という感じだろう。俺と僅かでも顔が似ているなんて穂波は死んでも認めたくないだろうが、両親親戚友人にも言われる客観的事実だ。諦める、妹

よ。

周りの客からどう見られているのか、考えれば考えれるほどマイナスなことしか浮かばないが、まあいいだろう。どうせここなら知り合いに遭うこともあるまい。どう思おうが、ここですれ違ふ人々は所詮一期一会の出会いなのだ。関わることもこの先ないだろう。

とは言いつつ周りの視線を気にしながら歩いているうちに、俺達は衣服売り場へと到着した。売り場の真ん前にある、まるで客引きをしている店員みたいに見えるマネキンを眺めながら、俺はふと疑問に思った。

「なあ穂波、お前、先々週の日曜も服買ってなかったか？ 母さんと2人で服屋行って、大量に買って帰ってきたろ」

「うるさいわねえ…… 女の子は服買うのが好きなの！ そんなこともわからないじゃモテないわよ？ 可愛いそー」

まったくかわいそうじゃなさそうだ。哀れむというよりバカにしている。

「う、うるせえよ。お前こそ、そんな……」

お前こそ、そんな態度していると彼氏できないぞ 葉が喉の先まで出てかかり、慌てて飲み込んだ。 という言

すっかり忘れていたが、穂波は彼氏にフラれたばかりなんだ。そんな女に投げかける言葉じゃないことくらい、モテない俺にもさすがにわかる。こんな言葉を言ったら間違いない、この3日間で築いてきた穂波との良好な関係が一気に瓦解してしまう。それだけならまだしも、穂波を酷く傷付けてしまふかもしれない。兄としてというより人として、そんなことは御免だった。

「……いや、なんでもない」

俺は努めて平静を装った。

「？ ……変なの」

穂波は若干訝いぶかしんでいるようだが、俺が言おうとしたことには気付いていないみたいだ。

よかったあ。と、俺は心の中でホッと胸を撫で下ろした。

「じゃ、私はあつちで女物の服見てくるから。買い終わったらメールするわ」

「え？ お、おう…… そんじゃあな」

穂波はそそくさと、女性向け売り場へ行ってしまった。俺はその後ろ姿を見つめ、しばらく呆然と立ちすくんでいた。

別に、「これ似合う？」「いや、こっちのほうがいいんじゃないか？」と仲良く一緒に服を選ぶことなんて、期待していなかったさ。

繰り返す。別に期待などしていなかった。ほ、本当だぞ？

服選びを開始してから僅か15分ほどで、俺は会計を済ませてしまった。グレイのワイシャツやブルーのジーンズなどを買ったのだが、もうちょっと時間をかけてもよかったかもしれない。まあ俺は穂波と違ってファッションに無頓着だから、時間をかけてもあまり良くはならないだろうが。

衣服売り場前の通路に置かれたベンチに腰掛け、買い物終了した旨を穂波にメールすることにした。

実を言うと、穂波のメールアドレスを俺は知らない。穂波が小学校5年生になりケータイを買ってもらったときは、俺と電話番号もメールアドレスも交換したのだが、それから半年と経たずにメールが通じなくなってしまった。元々穂波とはほとんどメールしていなかったが、俺が自分のメールアドレスを変更した時に変更を知らせるメールをあいつに送ったら送信エラーになってしまったのだ。

……つまり、穂波は自分がメールアドレス変更したことを、俺には教えて

くれなかった、というわけだ。まあ鳴沢家は全員ケータイの機種が同じなので、電話番号をメールアドレス代わりに使うことができるメールでやり取りができるから、先程もメールを送ることができたのだが。

数分後、返信がきた。おおかた、「わかった」とか「もうちょつと待つてなさい」といった内容だと思っただが、少し違った。「今すぐ試着室まで来なさい」だそうだ。

なんで試着室？ そう思ったが、試着室に人を呼び付ける理由などこれくらいしかないだろう。つまり……「服着てみたから似合ってるかどうか見なさい」ってことじゃないか。

おいおいマジかよ。とんだサプライズだぜ。

たかが妹の服装を見るだけなのに、入試会場へ行くかのような緊張を感じながら、俺は穂波の元へと向かった。

ピンクのカーテンに覆われた試着室が、横一列に六つほど並んでいる。そのうち一つの前に、穂波のものと思われる靴が爪先を試着室側に向けてピツタリと揃えてあった。

「穂波、来たぞ」

穂波が試着した姿を見たらしつかりとした感想を言わなければ……

……と緊張しながら穂波を呼ぶと、

「ま、待つて！ まだ着替え中…… あ、開けたら殺すわよ！！」

カーテンの向こうから声がした。

「わかったわかった」

人を呼び付けておいて、自分はまだ着替え終わっていないなかったわけですか。まあ別にいいけど。

……それにしても、なんでこんなに緊張しているんだ俺は。穂波の服見てやるだけなのに、妙にドキドキしちゃってよ。

わけのわからない緊張感に苛こまれながら、俺は穂波の着替えが終わるのを待ち……ん？ 着替え……？

……意識してしまった。穂波が、この薄っぺらいカーテン一枚隔てた先で、その……服を脱いだり着たりしているのだということ。

穂波の透き通るような肌が、服という防壁を取り去り徐々にその姿をあらわにしていく。

シャツのボタンが外れ、歳相応かそれより少し小さいかぐらいの小振りな胸が、ブラに包まれながらもはつきりとした輪郭を形どり

シャツが完全に脱がされると、触ると壊れてしまいそうなくらい華奢な肩と腰がさらされ

スカートがスルスルと下へ降りていき、脚フェチを魅了してやまない細くてしなやかな美脚がついにその全貌を

ガシャー。

目の前でカーテンの開く音がした。

うわあああ！！

穂波のあられもない姿を妄想していた俺は、思わず下着姿の穂波が出てきたと勘違いしてしまい後ろへ飛びのく。

「は？ あんた何やってるのよ」

「い、いや、何でもない」

俺は何つつつちゅーことをしてたんだ！！ 朝立てた誓いをまた破っちまったじゃねえか！！ い、妹であんな…… 妹のあんな姿を妄想するなんて！！

「あんた最近よく変になるわね。そろそろ心配になってきたわ」

心配というより呆れている穂波。

「だ、大丈夫だ。そんなことより……」

はたしてどんな服を選んだのだろうか。カーテンの開いた試着室に目をやるとそこには……

淡いピンク色をした、ロングスカートのワンピースに身を纏った穂波が　俺の視線に気付いたからだろうか、少し照れ臭そうな顔をして、後ろで手を組みながら立っていた。

「ど、どう？」

斜め下に目を逸らし尋ねてくる。

「ど、どうって……」

「似合ってるのか似合っていないのかってことよ……」

普段こういう服をあまり着ない穂波だからか、余計にかわいらしく見えた。何と言おうか、清纯？　な感じがする。

「す、すごく……　似合っているぞ。普段と違っていて、新鮮だし……」

あんまり上手くは言えなかった俺の感想に、穂波はほんの少し満足そうな顔をする。

「そ、そう？　変じゃない？」

「変じゃねえって。よく似合ってるぞ。お世辞じゃねえからな」

実際、そのワンピースは穂波によく似合っていた。思わず見とれてしまうほどに。ロングスカートだから脚の輪郭がよく見えないのが残念だが……　まあ脚フェチは自重してっと。

「ああありがたいがとう……。じ、じゃあ、他の服も選んであるから、ちよつと待ってて。今着替えるから」

そう言って穂波がカーテンを閉めようとすると……

「あれ？　もしかして鳴くん？」

左から、明るくて快活な、女の子の声が出た。声ができる方を向くと……

「ああー！　やっぱり鳴くんだ！　ひっさしぶりー！」

5メートルほど先から、デニムのショートパンツに薄手のパーカーを羽織った、背が高く非常にスタイルの良い、ショートカットの美少女が

「も、もしかして……　絵里奈！？　絵里奈か！？」

「もしかしても何も、鳴くんの幼なじみの、春川絵里奈だよ〜ん」

顔の横でピースを決めながら、こっちへ歩いてきていた。

「いやー、本当に久しぶりだね！ 小学校卒業して私が群馬に引越して以来だから…… 4年ぶり!? そうだよね!? まさかこんなところで遭うなんてさー、超絶びっくりだよー!」

「本当に久しぶりだな! しかもこんなところで再開って…… 偶然ってすげーよなあ。…… ってもしかして、地元帰ってきたのか!?」

「よくぞ聞いてくれましたー! 実はワタクシ…… S橋町へ再び舞い戻ってきたのデス! 引越したんだよ!」

「マ、マジかよ! 帰ってきたんだ!」

「そうなんだよー 鳴くん、また一緒に遊べるね」

「お、おう! …… そうだな、へへっ」

何よアイツ何よアイツ何よアイツ何なのよ!! 突然現れてきて何様のツモリ!?

兄貴も兄貴よ!! さっきまで私のことジロジロ見てたくせに、あの女に鼻の下伸ばしちゃって、バツツカみたい!! やっぱり胸!? 胸の大きい女が良いわけ!?

って何で私が兄貴の好みなんか気にしなきゃなんないのよ!! ありえない! べ、別に兄貴がどこの女に発情しようが勝手じゃない! まったく、何で私が……

兄貴と巨乳女は、まるで私なんかこの場にいないかのようにペチャクチャと喋っている。その様子が気に食わない。

……そ、そう、私はあくまでも、『私をシカトして』楽しそうに話しているアイツらにムカついているわけで、『兄貴と仲良くして

いる『あの女に嫉妬してたり、』巨乳女に鼻の下伸ばしている『兄
貴にムカついているとかじゃないんだから!!!!!!!!!!!!!!

3月23日(水) 兄妹でお出かけ〔4〕

兄貴の顔をよく見てみると、話に花を咲かせながらも目線が巨乳女の脚へとチラチラチラチラ……

ショートパンツから伸びた長い脚を盗み見ている。

よかった……

胸の大きさは関係な……

ち、違う！ あのエロ兄、今日だって私の脚チラチラ見てたくせに！

私の脚をそんなに綺麗に思ってくれているんなら、仕方なく我慢してあげようかなって思っていたのに、今度は巨乳女の脚にまで

……

脚なら誰でも良いワケ！？

女の脚があれば誰にでも尻尾振るの！？

この変態脚フェチの発情犬が！！

「それにしても、鳴くん背伸びたね」。昔は私の方が大きかったのに、すっかり抜かされちゃってまあ「

巨乳女は、胸だけじゃなく背もデカい。兄貴の身長は170cm後半くらいだけど、頭半分しか変わらない。しかもムカつくことに

……

この女、背の高さがむしろプラスになるような、モデル体型をしているのだ。出るところ出て、締まるところが引き締まっている、世の女の子の理想とも言える体型を……

顔も客観的に見れば……み、認めたくないけど美人な顔をしているし、雑誌の読者モデルをしていると言われればすんなり信じてしまうだろう。

それほどまでに……腹立たしい見た目を、コイツはしていた。「中学から急に伸びだしたんだよ。昔はよくお前にちっちゃいちっ

ちやいって頭撫でられてたけど、今度は俺が撫でる番だな」
ナデナデくしゃくしゃ。

カチン。

「こ、このバカ兄ときたら……」

巨乳女の頭を、いい子いい子って感じで撫で回しやがってる！！
しかも女の方も、「エへへ」とか言ってるデレデレしているし！！
さ、盛りのついたエロ犬共め……

「あれ？ 鳴くん、この娘もしかして…… コレ？」

巨乳女が私の存在に気付くなり、兄貴に向けて小指を一本突き出した。ていうか、気付くのが遅い。

「ち、ちげえって！ 誰がこんなちっこいの！」

カチン。

ちっこい？

身長が？

それとも……胸が！？

「こいつはただの妹だよ！ ほら、お前も見たことあるだろ」

「えっと…… ああハイハイハイ！ 穂波ちゃん、だよな？」

「ってうつそー！ カーワイイー！ あの時も鳴くんの妹だったことが信じられないくらいに可愛かったけど、さらにめーつつちや可愛くなってるじゃんっ！！ やばい可愛い憧れる〜！」

カチン。

憧れるだあ！？

どのツラ下げて言ってるんだメエは！？

モデル体型が調子こいてんじゃねえぞコラ！！

「残念ながら俺の妹だ。穂波、覚えてるか？ たまに家にも来てたる……って、どうした？ 何ムスつとしてんだ？」

「……なんでもない。着替え、済ましてくる」

明らかに居心地が悪かった。私は逃げるように試着室のカーテンを閉めた。

カーテンであのバカ2人と私を遮断しても、バカみたいな騒ぎ声

はバカみたいに私の耳に入ってきて来る。

「穂波ちゃん超可愛い！ 妹にしちゃいたい！」

誰がお前の妹になんかなるか。死んでもお断りだ。

ていうかアンタが死ぬ。輪廻転生して八工にでも生まれ変われ。

「あんな妹でいいならいつでもやるよ。まったく、我が儘で困ったものでさ」

なっ……

このバカ兄！

アンタ、『俺のこと頼ってくれていい』とかほざいてたくせに！

巨乳女は、「またまたー、ご冗談を」とか言って笑っている。

兄貴も兄貴で、すっごく楽しそうにあの女と話している。

……今日私と話していた時よりも、楽しそうだ。

……カチン。

だ、か、ら、！！

何で私がそんなこと気にしなきゃならないのよ！！

私達は……

たまたま見たい映画が同じだったし、他に見に行く友達とかいなかったから仕方なく一緒に映画見に行っただけで、ついでに一緒にお昼食べて、そのまたついでに一緒に買い物してただけなのに……

私は別に

楽しんでなんて……

カーテンの外と中では、まるつきり世界が違うように思えた。向こうが常夏の島なら、こっちは永久凍土。それほどまでに温度差がある。向こうは、私がいるには暖か過ぎた。

ロングスカートのワンピースを脱ごうとする、布の擦れる音がこの隔絶された世界に、虚しくこだましていた。

3月23日(水) 兄妹でお出かけ〔5〕

穂波が試着室の向こうで着替えている間も、俺と絵里奈は空白の4年間を埋めるように会話を楽しんでいた。

いくら幼なじみとはいえ、4年、それも成長期の間の4年も会っていないかったら、ここまで仲良く会話できるはずなさそうなのだが

……

俺と絵里奈は、大丈夫だった。

気兼ねも気遣いもない自然体で

昔と同じく笑い合っている。

俺には、それがたまらなくうれしかった。

「へー、今日は穂波ちゃんと2人でお出かけなんだー！ 君たち昔っから仲良いよね」
ワタクシ嫉妬しちゃいますよお？」

深い意味などなく発しただろうその言葉に、俺は狼狽した。

「そ、そんなんじゃないやねえって！ デビル・バスター見たかったんだけどお互い一緒に行く相手がいなかったから、仕方なく一緒に行くことにしただけって言ったろ。両親が旅行でパリ行っちゃってるし、た、たまには兄妹2人でどっか行くのも良いかなって思っただけでその…… 別にそういう関係じゃ」

「？ そういう関係ってどーゆー関係？」

絵里奈は頭にハテナマークを浮かべている。

そうか、俺が意識過剰になっているだけで、俺と穂波の仲が良かった頃しか知らない絵里奈にとっては、別段驚くようなことじゃないんだ。

「い、いや、何でもない。……そういえば絵里奈は今日は1人なのか？ 家族と一緒にとか？」

「えつとね、ここの近くに親戚が住んでるから家族で挨拶に来たんだけど、お母さんもお父さんも親戚さんと仲良くお酒呑みまくって酔い潰れてるから私だけ抜け出してきたんだよね。ここのシヨッピングモール一度見てみたかったからさ」

「ああなるほどな。そういえばご両親は大の酒好きだって言ってたっけ」

「そうそう。別にアル中とか悪酔いするわけじゃないから良いんだけどね。でも私暇になっちゃって。多分、買い物終わったらこのまま親戚の家戻らずに直接私の家に帰るかな」

「そっか。……あ、だったら、俺達と一緒に回らないか？」

名案が浮かんだ。

「俺達もシヨッピングモール回ったら帰る予定だからさ、良かったら付き合えよ」

正直、穂波と2人きりで買い物しているこの状況は好ましくない。周りの人達にカップルだと誤解されるかもしれないし、何より俺の精神が持ちそうにないのだから。いつまた、穂波を女として意識してしまうかわかったもんじゃない。

元々俺達は、お互い一緒に映画見に行く人が見つからなかったから、仕方なく兄妹で行くことにしただけなんだ。穂波も、俺なんかと2人きりで買い物なんて、嫌じゃなくても気まずさくらい感じているに決まってる。

「え？ 良いのー？ やったー じゃあ、ご一緒させていただきますっ！ あでも、穂波ちゃんは？」

「穂波も良いよな？ 絵里奈が一緒でも」

ガシャーッ！！

乱暴にカーテンが開けられ、試着室から穂波が出てきた。薄ピンクのロングワンピースと、その他色々な服が入った買い物かごを手に提げ、元の服装に戻っている。

……だが、明らかに様子が違った。

「別に良いわよ。勝手にすれば？」

「ほ、ほな……」

ちよつ、穂波さん!?

め、目が怖いんですが……

一見普段通りの顔と言葉使いたが、目が全てを物語ってる。目は口ほどに物を言うらしいが、その諺ことわざには全力で頷うなづこつ。穂波の不機嫌さと怒りが刹那せじなに理解できた。

そんな凶器みたいな目で、穂波は俺と絵里奈をギロリと睨にらむのだ。震えあがるほど怖い。

「じゃ、私、レジ行ってくるから。アンタはそこで待ってなさい」

その声も、普段より低い。怒りを押し殺しているように聞こえる。

……非常に気のせいであつて欲しいのだが。

「えつと…… ほな…み?」

「穂波ちゃん……?」

あまりの眼力に絶句した俺と絵里奈を置いて、穂波はスタスタと歩き去ってしまった。気のせいか、早歩きしているように見える。まるで俺達から早く遠ざかりたいかのよう。

去り行く穂波の後ろ髪が、あまりの憤怒に逆立っている……よう
な気がした。

穂波の姿が見えなくなった後、俺と絵里奈は揃そろって顔を見合わせ
た。

「穂波のやつ、どうしたんだろう……」

「……ひよつとして私、穂波ちゃんに嫌われているのかな?」

絵里奈は少し表情を曇くもらせた。

「そ、そんなことねえつて。昔は一緒に遊んだりもしただろ?」

「いやでも、穂波ちゃん私のこと覚えてないみたいだし……」

「だったらなおさら、お前が嫌われる理由なんてない。考え過ぎだ」

「でも…… あ、そうかつ!」

クイズ番組の解答者がボタンを押すように、絵里奈は自分のふと
ももを叩いた。

「穂波ちゃん、嫉妬しているんじゃないのかな？」

「はあ！？嫉妬！？」

突然何を言い出すんだコイツは。

いや、待てよ……

「……あ、なるほどそうか！」

そうかそうかそういうことが。

これなら説明がつく。

「ね、ね？ 鳴くんもそう思うでしょ？」

「確かにそうだな。……お前、スタイル抜群だもんな」

「はい！？」

「穂波は綺麗な女とか見ても、憧れるんじゃないでなくて毒づくタイプだからな。同性に対しても好き嫌いが激しいやつだし、困ったものだ」
うんうんと納得している俺を見て、絵里奈はちよつとだけ頬を膨らました。

「もー！ 褒めてもらったのは嬉しいけど、違っつて！ 穂波ちゃんは…… 鳴くんと仲良く話している私を見て、焼き餅焼いてるんじゃないかってこと！」

…… フリーズした。

頭も体も。

「……………はあ！？ 何言い出すんだよお前は！」

焼き餅！？

何故今その単語が！？

…… 全く意味がわからない。

穂波が焼き餅？

いやいや有り得ないだろ。絶対に有り得ん。

「だって穂波ちゃん、あんなに鳴くんのこと大好きだったし……」

「そ、それは昔の話だ！ 今なんてむしろ、仲が悪いくらいなんだぞ！？」

「本当に仲が悪い兄妹は、一緒に映画見たり買い物したりなんてしませんよ」

悪戯つぽく微笑む絵里奈。何だか少し楽しそうだ。

「そ、それはそうかも知れんが…… だからって、お前と俺が話しているくらいで嫉妬なんかするかよ！ お、俺と穂波は…… 兄妹なんだぞ！ だからそういう関係じゃ……」

「兄妹だから、だよ」

「は!？」

絵里奈は一瞬真面目な顔をしてそう言ったが、すぐに元のニコニコした顔に戻って続けた。

「鳴くんが言ってる『そういう関係』が何なのかわかってきたかも。……だからさ、何も、恋愛感情とか絡んでは言っていないでしょ？ 休日にお兄ちゃんと2人でお出かけしてたら、急に知らない女が出てきてお兄ちゃんと喋り始めました。しかも、私のことはほったらかしで仲良く楽しげに盛り上がって、さらに3人で一緒に回るう…… ってなったら、お兄ちゃんのことを異性として好きじゃなくても、妬いちやうとは思わない？」

「だ、だからって、穂波に限って……」

「じゃあさ、もし君達の前に現れたのが私じゃなくて、穂波ちゃんの知り合いの男の子だったら？ 鳴くんのことほったらかしでその子と盛り上がってたら、鳴くんはどう思う？」

「どうって……」

少し想像してみる。

俺と穂波は、今日一日2人きりで楽しんできた。……まあ、

本音を言うと、俺は楽しかったさ。映画の話くらいしかしなかったけど盛り上がったし。シスコン化の危機さえ除けば、アイツと来て良かったって思ってる。

だが、そこに突然俺の知らない男がやって来て、穂波と楽しく話し出す。……俺をほったらかしにして、2人で盛り上がっていき。揚げ句、3人で回ろうとかいう話になって……

それはやっぱり

「ムカつく、かもな」

……認めるしかなかった。

絵里奈は「でしょでしょ」「とドヤ顔で頷く。

「まあ、あんまり難しく考えないでさ、もっと単純で良いかもしれないね。誰だって蚊帳の外にされるのは気分よくないし、私も焼き餅ってのは言い過ぎたかも。……あ、やっぱり言い過ぎじゃないや。だって穂波ちゃん、あんなに怖い顔してたもんね。鳴くのと良く思ってたなかったら、あんなに不機嫌にならないよきつと」

そうだったのか。

穂波もやっぱり、俺と一緒に……

楽しんでくれていたんだな。

俺のこと、少なからず……

良く思ってくれていたんだ。

「あ、あのさ絵里奈、悪いんだけど……」

最後まで言い切る前に、絵里奈が遮った。

「わかってるよ。最後まで、穂波ちゃんと楽しんできてね」

俺の幼なじみは、俺の言いたいことなど全てお見通しだった。

「あと、私の方こそごめんね、邪魔しちゃって……。鳴くんに会えたのが嬉しくて、つい」

「お前が謝るようなことじゃないって。悪いのは俺だ」

俺が、無神経だったただけだ。

俺とケータイのメールアドレスを交換して、絵里奈は去っていった。もうしばらくシヨツピングモールで買い物するらしい。

一方の俺は、待っていると穂波に言われていたが、いても立ってもいられずアイツの元へ向かった。

謝らなくちゃ。

お前のことほつたらかしくしてごめん。

お前の気持ち考えないでごめん。

やっぱり2人で回ろう　　って。

……おかしい。

穂波が見付からない。

レジに行ったんじゃないのか？

レジに列んでいる人々を見ても、穂波の姿は見当たらない。

買わないことにした服を元あった場所に戻しているのかと思い、女性向け売り場を探して見たのだが……

やはり見付からない。

トイレにでも行ったのかと思ったその時、女性向け売り場の一角にポツンと置いてある買物カゴを見つけた。編み目状のカゴからは、薄いピンク色が見える。

側に行つて上から覗いてみると

穂波が着ていた、ロングスカートのワンピースが、そこに入っていた。

「　穂波っ！」

ケータイがポケットの中で振動した。

取り出して見てみると、メールが来ていた。……穂波からの。

その内容は……

『用事思い出したから帰る。アンタはあの女と好きに遊んでください』

い。

あ、もう電車乗ってるから、追い掛けたりしないでよっ。』

あんのバカ！！

俺は直ぐさま穂波に電話をかけた。

……プルルルルという電子音がもどかしい。早く終われ。

前も言ったよな？

『ほっとけるわけねえだろ』って。

3月23日（水）曖昧？な兄妹

部屋のベッドの上で私は布団に包まり、小さく丸まって膝を抱えていた。

あの日の、公園のベンチのときみたいに。

「バカ……、私のバカ……」

今更だけど、本当に後悔している。

あの女……、春川絵里奈、だっけ？

帰りの電車で思い出したけど、確かに兄貴の幼馴染で、私も何回か遊んだことがある。よく調子に乗るけど明るくて優しい良い女だった。私も、絵里奈って呼んで懐いてたっけ。

兄貴は数年ぶりに幼馴染に会えたから嬉しかったただけなのに、私ったら変にムカついちゃって……。ホント、小さい女。それに……あんなに激しくムカついたってことは、兄貴をあの女に取られた気がしたからってこと？ それってもしかして……

私が、兄貴のこと好……

「わかんないよもう！ ……兄貴のことなんて、ちょっと前までは何とも思ってたのに……」

曖昧な感情は空回り。

兄貴に変な感情抱いてる私もいれば、

実の兄にそんなもの向けるのを激しく拒む私もいる。

今のところは……

拒む感情の方が、強い。

当たり前だ。相手は実の……

兄貴、なんだから。

「ギィィ」という、鳴沢家の玄関が開く鈍い音がした。

私が家に着いてから20分と経っていない。
薄々予感は……
してたけど。

「穂波、ごめん」

俺は服屋の買い物袋を横にドサッと置き、ドアの向こうにいるはずの穂波に謝った。

……返事はない。

「俺さ、ちよつと舞い上がってたんだ。久しぶりに絵里奈に会ったからさ。……悪かった」

「べ、別にアンタが謝るようなことなんて何もないわよ！ 大体私は用事思い出したから帰っただけだもん！ 謝るのはこっち！ どうもすみませんでした！！」

ドアの向こうから穂波の怒鳴り声がする。声の感じから察するに、俺のいる方とは反対方向に向けて叫んでいるのだろう。ドアを挟んでも、俺と顔を合わせるのには嫌ということか。

「穂波！」

俺はすうつと大きく息を吸い込み、それからゆっくり吐いて……
気持ちを落ちつけてから、続けた。

「俺はさ、今日、楽しかった。映画が、じゃない……、お前と一緒に掛けるのが、だ」
「……………」

穂波がどんな反応をしているのか想像できないが、続ける。

「すっげー楽しかった。デビル・バスターの会話くらいしかしなかったけど、それでも、楽しかった。絶対、俺1人で行くよりもお前と一緒にの方が確実に楽しかったはずだ。だからさ……」

自分がどんな顔をしているのかは、想像できた。

……トマトみたいな顔しているだろうな。

「良かったらまた、一緒にどこか出掛けないか？ お前の気が向いたらでいい。今度は、歩きながら色んな話してさ。だから……」

「うるさい！！」

「っ！？」

「何もかも、兄貴が悪いんだ。兄貴があの夜、私を追い掛けてきたから……」

兄貴があのとき、カッコいい言葉なんか投げ掛けてくるから！！」

何だ？ 穂波は何か、とんでもないことを言いだしそうな……

「あの出来事がなければ、私がこんな気持ちになることもなかった！

……私って単純よね…… 彼氏にフラれて傷心中だからって、よりによって兄貴にときめくなんて……」

ときめく？ おいおいそれって……

「あれから兄貴と一緒にいても、前よりは居心地良くなったし時々嬉しくもなったけど、それも全部あの夜に兄貴に変な気持ちを抱いちゃったからで、あの夜がなければそう感じることもなかったはずなの！」

そう、全部あの夜兄貴が私を追い掛けてきたせいだ！ だから……

……」

そこで一旦言葉を切った。

少し間を置いて、穂波が示したのは

「もう、優しくしたりしないで」

きっぱりとした、拒絶の意思。

「実の兄なんか好きになりたくないのに、このままじゃ……本当に好きになっちゃうから……」

「穂波……」

穂波が俺のこと……

知らなかった。

気付かなかった。

いや、気付かないフリをしていた？

兄妹だからありえないって、自分に言い聞かせてたのかもしれない。

穂波は今、自分の気持ちを正直に俺に伝えてくれている。

死ぬほど恥ずかしがっているだろう。兄の俺に、自らの複雑な胸中を吐露しているんだ。衝動的かもしれないが、それがどんなに勇気のいることか……

だったら俺も、言うしかないだろ。

「俺だって……俺だって！　しょっちゅう思い悩んできたさ！　お前に何度惚れかけたって思ってるんだ！」

「えっ！？」

「……俺だって、実の妹に惚れたくなんかねえよ。だからと言ってお前に冷たくすることも、できない」

「ただだ、か、ら！！　アンのことなんて知らないわよ！！　私、私がアンのこと好きになっちゃうの嫌だからやめてって言うて……」

「関係ねえ」

「っ！？」

「コイツは俺のエゴだ。惚れた腫れたとかの感情抜きで、お前を護りたい」

「何だよ！？　……どうして……」

どうしてだって？　そんなの決まっている。

「……当たり前だろ、兄貴なんだからさ」

「……っ！？」

「妹大事にするのは兄貴の特権であり義務だ。妹と仲良くしたいって思うのもな」

「な、何カッコ付けてんの！？　バカなの！？　それでもし私がアンのたに惚れちゃったら、どう責任取ってく……」

「一生幸せにする」

「っ……………!?!」

「お前が俺に惚れる!? アホか、んなことされたら俺もお前に惚れちまうに決まってるんだろ。」

「……………そうなったら、妹だろうが何だろうが、どんな壁が立ちはだかるうが……………」

俺が一生、お前を護る。兄貴としてだけじゃなく、恋人としてもな」

恥ずかしい。

気分が高揚している状態とはいえ、こんな……………」

こんなほぼプロポーズみたいな台詞、マジで恥ずかしい。

ギャルゲーの主人公の告白を大声で叫ぶ方が、まだマジだ。

けど、全部本心だ。

まったく仕方ない……………」

認めてやろう。

俺はシスコンだ。

妹のことが大事で大事で仕方ない、変態シスコン野郎だ。

だが、それがどうした。

兄貴なんてな……………」

シスコンなくらいが調度良いんだよ!!

「ガバツ!」

ドアが急に、部屋へと引かれた。

眼前には、目元が潤んだ私服姿の穂波が……………」

「このバカ兄!!」

目が合った0.5秒後、「ドンッ!」と穂波は俺を突き飛ばし馬乗りになった。

3月23日(水) 曖昧？な兄妹「2」

「バカバカバカ！ 兄貴のバカ！」

穂波が、俺の上から頭を殴ってくる。拳の雨が容赦なく降り注ぎ

……

「ちょ、穂波やめ！ 痛い！ 痛いからっ……？」

っ痛……く、ない……？

ポカポカとした女の子殴りで、まったく痛くない。肩たたきをするような力加減だ。

「バカ！ 大バカ！ あんぽんたん！ ろくでなし！」

「ほ、穂波…… ごめん……」

「別に良いわよ！」

「へ！？」

ここまで怒っておいて、謝られても『別に良い』？ 赦す気ないから謝らなくて良いってことか？

と思いきや……

「アンタは大バカだけど…… だけど、兄貴としては、す、好き……

…… だから」

そっいうことか……

『兄貴としては』

その言葉が意味することは、わかっていた。

「俺も、お前のこと大好きだ。妹として、な」

「う、うん…… ありがとう」

穂波は、嬉しいようながっかりしたような、ホッとしたような物足りないような顔をしていた。

ひよっとして俺も、同じような顔をしているかもしれない。

「じゃあ、とりあえずは……」

「現状維持……様子見ってことね」

「ああ」

俺は頷いた。

現状維持、様子見。

俺達はそうするしかないだろう。

お互いに気持ちの整理がついていないんだ。ゆっくり考える必要がある。

そもそも兄妹同士の恋なんて、問題が多過ぎるわけだし

日本じゃ3親等以内の傍系血族は結婚できないうえに、交際するだけでも周りの目を気にしていかなければならないだろうからな。

もちろん、穂波と両想いになったとしたら、穂波を恋人として護つていく覚悟はある。絶対に揺らがないうし、曲げるつもりもない。

けど、俺達はまだ恋人未満なわけで……

「穂波、そろそろ俺の上から降りてくれないか？」

「あ、う、うん」

穂波が立ち上がり、やっと解放された俺もよっこらせつと立ち上がった。

「あ、兄貴ごめんね。その……押し倒したりして」

頬を赤らめモジモジとしている妹がたまらなく愛おしくなり

俺は穂波の頭を撫でた。サラサラスベスベとした髪の毛の感触が心地良い。

「気にするな。大丈夫だから」

「ありがとう……」

穂波は俺と顔を合わせ、ニッコリとほほ笑んだ。釣られて俺も、ニッコリと。

そういえば、妹の頭を撫でるなんて何年ぶりだろうか。また一つ、穂波と俺の『久しぶり』が積み重なった。

しばらくそうやって見つめ合ってた後……

穂波はハッと我に返り、

「じゃじゃじゃあ、私、その……そろそろ夕飯作り始めなきゃね。」

そ、そういうわけじゃあね」

夕飯の支度をするにはまだ早過ぎると思うのだが

まあ、そこら辺は突っ込まないであげよう。

俺も……、やばいめっちゃ恥ずかしくなってきた……

「あ、穂波っ」

思い出した。そうだ、すっかり忘れていた。

「これ、買ってきたぞ」

踵かかとを返した穂波を呼び止め、俺は近くに転がっている服屋の買い物袋から

薄いピンク色の、ロングコートのワンピースを取り出した。

「え！？ こ、これどうして……」

「帰る前に、急いで買ってきたんだ。お前、これ気に入ってたんだろ。……あ、一応言っとくけど、物でお前の機嫌直そうとかは考えなかったからな。なんつーか、この服…… すげえ、似合ってたからさ。お前に着て欲しかっただけだ。もちろん、金はいらない」
あの時、穂波に電話しても出なかったから、急いで家に向かおうとしたのだが……

このワンピースのことを、思い出した。穂波に喜んで欲しいのもあったが、試着したときの穂波が、その…… 可愛くて……

それに、今日の想い出をも一つ、穂波に持っていて欲しかったんだ。

「え、ええ、えと、えっと…… あり、ありがと、とっ」

「どういたしまして」

なんか色々、あの夜を再現しているような気がする。今度の穂波は、俺が差し出した服をまるで高級な陶器を扱うかのように丁寧に受け取った。

兄妹以上恋人未満か……

悪くないかもしれないな。

これが問題の先送りだつてことはわかつてる。俺も穂波も、恋人同士になるなんて望んではない。

けど、恋つてやつは人間の思い通りにならなくて……、自分自身の恋心すら、満足に制御できないんだ。

これから先、俺達の関係がどうなるかなんてわからない。けど、できるならずつと仲の良い関係でいたいと思う。

当たり前だろ？ 兄妹なんだからさ。

〈第2章へ続く〉

3月23日(水) 曖昧？な兄妹「2」(後書き)

第1章完結しました！

これもひとえに、読者のみなさんのおかげです。

読んでくれている人がいたから、ここまで続けることができました。作者のような諦め癖が強い人間に、40000文字以上の小説を執筆させたのは、他でもないあなたです。……なんてカッコイイ(?)ことを言ってみました(笑) 本当に感謝しています。

一介の高校生に過ぎない作者が書いた文章は、自分でもわかるほど稚拙でした。しかし、文章、表現、話の展開など、他の作者の方々を参考にしながら勉強していきたいと思います。

さて、兄妹以上恋人未満という関係に落ち着いた二人ですが……第2章以降では、普通の兄妹に戻ろうと奮闘する二人を描きつつ、近親婚やインセスト・タブーについて、もう少し踏み込んだ作品にしたいと思います。関連書などを読んで、できるだけ正確に描いていくつもりです。

あと、新キャラもどんどん出していきたいと思っています。名前だけ出ていたあのキャラとか(笑)

では最後に……

これからもよろしく願います！

3月27日(日)私の？兄貴がこんなに な？わけがない！

私、鳴沢穂波は……

ごく普通の中学生、だった。

けど、残念なことに……、過去形にせざるを得ない。

だって私は……、ブラコンに、なってしまったのだから。

彼氏にフラれたショックで家を飛び出した私を、兄貴が追い掛けてきてくれたあの夜から……

私は、ブラコンに目覚めていった。

兄貴の顔が頭から離れなくなったり、兄貴に喜んで欲しくて料理作るようになったり、兄貴と一緒にデートしたくなったり、兄貴が別の女と仲良く話しているのを見て嫉妬するようになったり……

兄貴に恋愛感情を抱きかけている自分と、兄妹同士の恋愛を否定する自分。

そんな自分が受け入れられなくなって、私は兄貴を拒絶した。これ以上優しくしないで、と。

だけど兄貴は……

それでも、私のことを護りたい、と。実の妹に惚れたくない、けどその結果私が兄貴に惚れてしまうことになったら、自分も私に惚れてしまう、と。そうなったら、責任取って私のことを一生幸せにする、と。兄貴はそう言ってくれた。

本当に、兄貴はどうかしている。よくもこんな恥ずかしい台詞を、堂々と言えたものだ。本当に、バカバカバカ……

でも私は、こんなバカ兄が大好きだ。

まだ、恋愛感情かはわからない。兄妹同士の恋愛を否定する自分は、私の中で未だにどっしり居座っている。けど、兄貴に恋しても別に良いかなという想いは、どんどんと膨らんでいった。

だから私は、「兄貴としては好き」「現状維持、様子見にしよう」

と、兄貴に伝えた。兄貴も同意してくれて、とりあえずは兄妹以上恋人未満という関係に落ち着いている。

けどそれは、2人乗りのシーソーが奇跡的に平衡を保っているようなもの。どちらかに「恋愛感情」という重りが乗ったら、あつという間に関係が崩れてしてしまう。

兄貴は、私が兄貴に惚れたら自分も私に惚れてしまう、と言った。私も、兄貴が私に惚れたら、兄貴のことを異性として好きになってしまうに違いない。

どちらかがどちらかに惚れれば、即両想いになる。けど私達は、兄妹同士の恋愛なんて望んではいけないんだ。望んではいけない、はずなのに……

私が兄貴を想う気持ちは、もうほとんど恋だった。

兄貴に感情を伝えたあの日から、兄貴のことを考えるだけで胸が苦しくなったり、切なくなったりした。だけどそれ以上に、嬉しくなったり、心が踊ったりもした。

暖かな陽射しの中でまどろむような、まったりとした幸福感に包まれていくんだ。

そう。

もうすぐで、言い訳もできないほど完全に恋に堕ちる……、はずだった。

残念と言っているのか幸いと言っているのかわからないけど、過去形にせざるを得ない。

……いや、残念って言ったほうが良さそうだ。
だって……

「優香可愛いよ優香！ やばい、俺の嫁さん超カーワイーイー！
！俺が一生幸せにするぜ！！ エへへへ……」

部屋の外にまで聞こえる声で、ゲームの女の子に話し掛けている、吐き気がするほど心底気持ちの悪い物体……

アレ、私の兄貴なんですけど。

ブラコンな私の、兄貴なんですけど。

……私の兄貴が、こんな、こんなに……

こんなに気持ち悪いわけがない！！！！！！

3月27日(日)私の？兄貴がこんなに な？わけがない！(後書き)

もうすぐ読みきりを掲載するんで、よかったら読んでみてください。

3月27日(日)私の兄貴がこんなに なわけがない!「2」

兄妹以上恋人未満の関係とは言っても、私と兄貴のやり取りには特に大きな変化がなかった。

私は兄貴の為にご飯を作り、兄貴は「美味しい」といつも絶賛してくれて、私はその度に顔が真っ赤になり、それを見て兄貴も顔が赤くなる。テレビを見ながら他愛もない会話をしたり、ニュースの内容を兄貴に解説してもらったりもした。

傍から見たら、仲の良い兄妹に見えるかもしれないし、付き合い合いたての初なカップルにも見えるかもしれない。鳴沢家の兄妹は、両親不在の春休みをそんな風に過ごしていたのだけれど……

私が兄貴の異変に気付いたのは、昨日の夕食後だった。

私が作った海老ピラフを、美味しそうに完食してくれた後……

「やっぱりお前、料理上手いよな。ていうか、回を重ねるごとに上手くなってきたくないか?」

「そ、そう? ありがと。……エへへ」

「ああ。本当にすげえよ。香苗かなえにも見習わせたいくらいだ。アイツはカレー作っても青酸カリ並の劇薬に錬成しちまうからな……。まったく、困ったやつだぜ」

「へ? 香苗って誰?」

「あ、いや……、これはその……」

狼狽する兄貴

「香苗って、だ、れ、か、し、ら?」

とりあえず笑顔で、穏便に尋ねてみる私

「ご、ごちそうさまでしたー!」

「待ちなさいバカ兄! 逃げるんじゃない!」

香苗って誰？ あのうるたえ具合からすると、もももしかして兄貴の……

気になる人、とか？

さらに今日の朝、兄貴が朝食を食べにリビングへ来たとき……

「遅い！ いつまで寝てるのよ！ ご飯冷めちゃったじゃない！」

「悪い悪い。昨日は茜が長電話してきてさ。なかなか寝かしてくれなかったんだよね」

「……茜さんって、どなたかしら？」

笑顔が引き攣っていないか心配な私

「あいや、こ、これはその……、友達！ そう友達だよ！ 学校の部活のことでちょっと話し合いをだな……」

完全に顔面引き攣っている兄貴

「本当……？」

「本当だとも！ ……ああ、こ、この鯖の味噌煮美味しいなあ！ ホント美味しいよ〜」

「……………」

香苗とか茜とか、誰なのよ！？ なんてごまかすわけ！？

私と兄貴は別に付き合っているわけじゃないから、あんまりしつこく聞くのも不自然かと思いつつと我慢したんだけど……

今日の夜、私が自分の部屋に入ろうとしたとき……

すぐ隣の兄貴の部屋から、気持ち悪い声がしていることに気付い

た。何かと思い聞き耳を立ててみると……

「優香可愛いよ優香！ やばい、俺の嫁さん超カーワイーイー！
俺が一生幸せにするぜ！！ エへへへ……」

兄貴の声だった。

……非常に残念なことに、兄貴だった。

……非常に残念なことに、言葉の内容が非常に残念だった。

あのバカ兄い……、「俺の嫁」って言うてることは、相手は
ゲームの女の子よね？

……たかだが2次元グラフィックの空想フィクション女相手に、
「一生幸せにする」！？ わわわ私に言ってくれたのと同じ台詞を
与えてるって言うの！？ ……あんなに、私があんなに嬉しかった
台詞なのに！

ギリギリと齒軋りをして、兄貴の部屋に飛び入って罵倒したい衝
動を抑えた。兄貴がゲームの女の子に話し掛けるのは時々聞いて
きたし、今までは無視してきたのに今突然怒るのも気が引ける。大
体私は、兄貴のただの妹なんだし……

ああけど、ムカつくムカつくムカつく！！ 私じゃ恋愛成分は満
たされないって言うの！？

……いや別に、満たして欲しいとかじゃないんだけど、……私と
あんなことがあったのに、よくもまあ恋愛ゲームなんかできるわね
！ さんざん私とラブコメしたじゃないの！

それにしても、兄貴がゲームの女の子に話し掛ける台詞って、
いつもはこんなに気持ち悪かったかしら？ なんだか前より悪化し
ているような……

「優香……、やっぱり俺、お前じゃないとダメだ！ 俺と一つにな
ろう！ 未来永劫いつまでも！」

……カチン。

我慢の限界だった。

「こんのバカ兄いい！！！！」

「うお、ほ、穂波！？」

ドアノブをおもいつきり押し、兄貴の部屋に飛び入った。兄貴は私の方を振り向き、ヘッドフォンを耳に付けたまま慌ててパソコンの画面を体で隠した。

「アアアアアンタねえ、ゲームの女の子相手に何愛の告白なんかしてるのよ！ バカ？ バカなのこのバカ兄は！ …… ああバカ兄なんだからバカなのは当たり前前よねえ？ …… この大バカ兄が！！」

「いや、これはその… つてもしかして聞こえてた！？」

「当たり前じゃないこの発情犬！ …… 何を必死に隠してるの？

そんなに見られたくないわけ？」

「ちっち違い！ 見られて困るようなものなど、断じて、断じてない！！」

「… ちよつと背中どけなさい」

「あ、ちよつ、穂波、腕引つ張るな！ ってあー！！！！」

兄貴をパソコンから引き離すと、私の目に飛び込んだのは…

予想通り、2次元のグラフィックだった。

ただ、私が考えていたような絵面えづらとは違い、その…

描かれている内容が…

「なっ、ななな何よこれえ！！！！」

だ、男女が…

裸で抱き合っている絵なんですけど！！

「えっとこれは…、ほ、保健体育の勉強！」

「… ねえお兄ちゃん？ 火に油を注ぐって言葉知ってる？」

「ごめんなさい！ てかお兄ちゃん！？ あと笑顔逆に怖いからやめてマジで！」

「… 他に、言い残すことはないかしら？」

「… 本当に…」

「この変態性欲最低工口兄貴いい!!!!!!」

「ガッ!!　ゴッ!!　グハアアア!!!!」

遺言を最後まで聞く前に、バカ兄のアホ面目掛けて左ジャブ
ストレート　ハイキツクの3連妹コンボを叩き込んでおいた。

「死んじやえバカ兄!!」

もう一度言わせて。

私の兄貴が……

こんなに気持ち悪いわけがない!!

……と、ブラコンの私は思ったかった。

3月27日(日) 妹と協力して女の子を攻略!?

見られた。

エロゲーしているところを、妹に。

……つて最悪だアアアアアアアア！……！！！！！！

恥ずかしい死にたいマジかよおいよお！！

それにこの状況……

「で？ これは何かしら？」

椅子に座り脚を組みながら、エロゲーの18禁シーンのCGをビシッと指さしている妹に、床に正座し尋問されている兄。

……つて、どんな構図だよ……！！

「これはだから……」

「頭が高い！」

慌てて頭を下げる。もうこのフィールドは、完全に穂波様の支配下に置かれたようだ。

「えっと……恋愛アドベンチャーゲームです……」

「……対象年齢は？」

「じゅ……18才以上……です」

「アンタ今いくつかしら？」

「……16です……」

何だ何だよ何ですかこのザマア！

兄の威厳とかプライドとか、完膚なきまでにスタボロじゃねえか

！ 我が家のボロ雑巾の方がまだ形保ってるわ！

もういっそ殺してくれよ！ 一思いにグサツと！ 言葉のナイフ

じゃなくて本物のナイフで！

「これ、アンタの年齢でやって良いものかしらって違うよねそうよね!？」……それをアンタときたら……」

「お、お前には関係ないだろ！　なんでお前にそんなこと言われなきやなんないんだよ！」

「そ、それは……そうだけど……って違う！」

「グッ！」

椅子の上で組まれていた穂波の脚が、俺の頭を踏み付けた。

「私が言いたいののは！　アンタがなんでそんなにゲームに依存してるかってことなの！」

グリグリグリと、力を入れて頭を踏み付ける穂波。

……って、この状況はヤバイ！　超ヤバイ！

何がヤバイって、だって穂波の脚が、長ズボンのパジャマで輪郭が分かりづらいけど、俺好みの美脚が……

頭を踏み付けてきてるんだぞ！！

ガバツ！

転がるように穂波の踏み付けから逃れ、脚が届かないもつと遠くへ正座し直す。

ヤバイ、ちょっと興奮し……

だからダメなんだって！

アイツは妹アイツは妹アイツは妹……

い、妹に踏まれて興奮するなんて、最低最悪の暴拳、変態の極みだぞ！

好みの脚で踏み付けられるなんて、脚フェチにとつては最上級至福だけど、いかんいかんいかん。相手は妹なんだ、自重しろこのバカ兄！

こんな兄の情けない姿に若干怪しむような視線を送ったが、穂波は再び椅子に脚を組んで座り、続けた。

「妹としてわね、いくらどうしようもない兄貴とはいえ、ゲームの女の子相手に「一生幸せにする」とかほざいてるのを聞くと、さーすぐに心配になってくるわけ。べ、別にアンタが一生2次元の女以

外に彼女できなくても私にはなんの関係もないんだけどね、それでも、こんな気持ち悪い兄がいるってことは私にとつての一生拭えない汚点になるの。わかる？ わかるわよね？ わかって」「はい、わかりました…………」

本当に情けない…………

何も言い返せないなんて、俺はヘタレだ。

ちよつと前まではカッコ良い兄貴でいる自覚があつたのに…………

「…………で、何でアンタはこのフィクション女にそこまで依存しているのかしら？ 依存症治すのに協力してあげるから、正直に話さない？」

…………だからこの状況で笑顔はやめてくれ！ ガチで怖いから！

穏便に協力する気ゼロだろお前！

「えつと、それは…………」

ニコニコニコ。

ほほ笑む穂波。

…………目が笑っていないし、気のせいかギリギリという歯軋りのような音がする。

穂波の笑顔は可愛いはずなのに、この笑顔は可愛い通り越して憤怒が伝わってくる。その笑顔、俺にとつての恐怖の象徴に認定するぞ？ 頼むから普通に怒ってくれ。

笑顔の重圧に耐えられず、俺は正直に全てを話すことにした。

「…………俺さ、前言ったろ？ お前に何回惚れかけたと思っただつて。…………このままじゃ本当に危ないから、その…………、ゲームの女の子に逃避して、シスコンを回避しようと思っ…………」

「な、な、なっ…………私に、ほれ、ほれえ……………っ！…………？」

赤化して石化した穂波。

口がポカンと半開きで、言葉を失っている。

「本当に、本当に危険だと思っただ。それでゲームにのめり込むうちに、だんだん依存が強くなって、リアルとゲームの境が曖昧に

なったりして……」

「じゃ、じゃあ、香苗や茜つてのも、ゲームの女の子だったわけ？」

「ああ……。リアルの子には縁がないからさ……」

死にてえ……

何でこんな恥ずかしいこと暴露しなきゃいけないんだ。

兄としても男としても、完全に地に堕ちたな……

「わわわわわかったわよ！」

「え？」

突然椅子から立ち上がり、真っ赤な顔のまま仁王立ちをした穂波。

「私が！ アンタが、かの、かか彼女作るのに協力してあげるわよ

！ そうすれば良いんでしょ！？」

「つて、えええええ！？」

突然何を言い出すんだ俺の妹は！？

何でいきなり俺が彼女作る話になってるんだ！？

「ちよつと待て穂波。何で俺に彼女？ さっぱり意味がわからないんだが」

「だから、アンタが私に……ほれ、ほれ惚れちゃいそうだから、それが嫌だからゲームの女に依存したんでしょ！？ だったら、3次元にちゃんとした彼女作れば良いじゃないのつて言ってるのよ！」

「ああそういうことか……つてはあ！？ お前それ本気で言ってるのか？」

「ほ、本気よ！ 私が華麗にプロデュースしてあげるつて言ってるの！ それとも不満！？ 私じゃ不満だとも言うつの？」

「いや、不満つていうか……」

もうやめてくれ……

これ以上、兄を惨めにしないでくれ。

2次元に依存してるのとエロゲーやってるのがバレた上に、彼女作りに協力してもらおうとか……

どんだけカツコ悪い兄貴なんだよ俺は！

「……ねえ、私たちつてさ、……恋人同士になるのは、やっぱりマ

ズイよね……?」

穂波は少ししおらしくなった。さっきまでとは一転、悲しそうであり自らを嘲るような笑みを浮かべている。

「……ああ。やっぱり、兄妹同士ってのは……色々……」

日本には兄妹同士の恋愛や性行為を禁じる法律はないが、結婚はできない。民法でそう決まっているんだ。人並みの幸せですら、叶えるのは難しいだろう。

「……そうよね。じゃあ……、とりあえずアンタが彼女作りなさい
」!

「お、おう……」

……はっ!? 思わず頷いちゃまったじゃねえか!

でもまあ……

確かに、彼女はともかく好きな人くらい作っておかないと本気で危ないかもな。完全に妹ルート入る前に、手を打っておかないと……。

恋、かあ……

気が重いよ、ホント。

もう完全に妹ルート入ってるだろこのシスコン……

と、もう一人の自分が脳内で呟くが、無視することにした。

3月27日(日) 妹と協力して女の子を攻略！？(後書き)

おまけ：

作者お気に入り、穂波のセリフ集(第1章Part1)

「べ、べつに、追い掛けて欲しくなんてなかったんだからね！ それをアンタが勝手に……」

「ア、ア、アンタどーゆーつもりなの！？ ししし失恋の弱みに付け込んで、く、く、……口説こうとするなんて！」

「一応、礼は言っておくわ…… ありがとう」

「ああ、あ、あ、…… あり、ありがとう……」

「べ、別に！ たまたま早く起きたからであってその、あの……
そ、そうよ！ アンタの分も作ってやるって言ってるの！ 悪い！
？」

「そこまで言うんだったら…… 作ってあげてもいいわよ…… 毎日」

「もう、そんなにがつついちゃって…… よ、よっぽど美味しかったんだ…… ありがとう……」

「放って置けないって…… またいつものお節介癖？ ……ま、まあ別に、アンタのそういうとこ嫌いじゃないけど……」

「……ま、まあ、なかなか良い夢だと思うわ。だから…… が、頑

張ってね……」

3月28日(月) 妹が可愛くて仕方ない

認めてやろう。

俺はシスコンだ。

妹のことが大事で大事で仕方ない、変態シスコン野郎だ。

……なんて、やっぱり開き直れない。

常識的に考えて、シスコンはマズイだろシスコンは……。

そんな事を言っておきながら、妹がブラコンであることを嬉しく思っていたりする俺は、どうやら本物の変態らしい。

「ちつくしよう……、何でアイツは妹なんだよ……」

俯せに寝ているベッドが、ギシギシと軋む。

腹立つ。

恋したい相手がすぐ側にいるのに、恋することが許されないというところが。

見た目だけなら、最初から好きだったさ。そこらのアイドルなんか目じゃないくらいに整った顔に、色ツヤ形全てが俺の好みど真ん中の美脚。サラサラとした美しい黒髪に、庇護欲をそそられる華奢な体躯。

見た目だけなら、いつまで見ていても飽きないほどの可愛さだったんだ。

けど、知ってしまった。

内面もすごく可愛いやつなんだということ。

強がりです直じやないところも、かと思えば感謝の気持ちをきちんと伝えてくれるところも、照れ屋なところも焼き餅焼きなところも料理上手なところも、その全てが

「……たく、こんなこと考えてるからダメなんだよな。……俺は

シスコンじゃない俺はシスコンじゃない俺はシスコンじゃない」

……決して、現実から目を背けているわけではない。暗示をかけているのだ。自分に言い聞かせることから始めようって奴だ。

昨日俺は、穂波から「宿題」をもらった。俺が知っている女の子の中から、彼女にしたいやつを選んでこい、と。高嶺の花でも何でもいいからとにかく選べ、という御達しだ。

「無茶言うなよな、まったく……」

今日の昼になっても、「宿題」はできなかった。別に、周りに良い女の子がいなくていいわけじゃない。俺の学校は女子の見た目レベルが高いし、進学校だからか大人しめの良い子が多い。部活の女子も、一部例外はあるが、好感が持てるやつばかりだ。けど……リアルは恋って、しようと思ってるものじゃないだろ。

ギャルゲープレイするのはわけが違う。自分の意思で誰かを好きになるんじゃない、いつの間にか好きになっていた、っていうのが本物の恋だろ。

でもまあ、恋をするためのきっかけくらいは自分で作れるかもな。女子と話す機会を増やせば、そこから発展して誰かしらを好きになるかもしれない。

「部活のやつらとかクラスの女子に、積極的に話し掛けてみるか……」

宿題はそれまで未提出でいいや。今ここで、彼女にしたい女子をピックアップしろとか無理だし、とりあえずは……、明後日の部活で、実践しよう。

けど、穂波は……、俺に彼女ができて、何とも思わないのかよ……。

俺はぶつちやけ……、アイツに彼氏ができたら嫌なんだけど……
「って、死ぬ死ぬ死ぬ俺死ぬ！ 何でそんなこと考えちゃうんだよ！ シスコン過ぎるだろこのバカ兄！」

今だから言えるが

穂波が彼氏とイチヤイチャ電話しているのを聞いたりすると、俺は激しく嫉妬してしまうのだ。彼氏に対して穂波はいつもデレデレだったし、俺には見せてくれない態度を他人にとっているのが非常に気に喰わない。

以前は自覚がなかったのだが、今考えてみると

俺、昔からシスコンだったろ。

って、いい加減妹離れしろよバカ野郎！ 気持ち悪過ぎるんだよクズが！

ああけど、穂波に彼氏……、やっぱり不愉快だ……

そんな風に、ベッドの上でジタバタ葛藤していると……

ブルルルル。

枕の横に置いてあるケータイが、メールの受信を告げた。

「Date」 3 / 28 13 : 16

「From」 阪内大介

「Sub」 鳴くんお願い！

明日の合コンなんだけど、男子のキャンセル1人出ちゃったから鳴くんに来て欲しいんだ (<|>)

鳴くんの分のお金は、僕が半分くらいなら払っても良いから……だからお願いo (><) o

合コン？

そういえば先々週、大介からそんなメールをもらったな……

合コンとか興味なかったから断ったけど。

しかしこれは……

「チャンスだろ」

あまりにもタイムリーな報せ。

神の悪戯か、悪魔の罠か……。

良い予感も悪い予感もしたが、とりあえず

OKの返事を、大介に送っておいた。

3月28日(月) 妹が可愛くて仕方ない(後書き)

「破壊神は少女のために」という小説も連載開始しました！
よかったらそっちも読んでみてください！

3月28日(月) 共同作業を兄妹で

穂波が作ってくれた夕食を食べ終わり、俺はキッチンで洗い物をしていた。

両親がいない間は、食事担当は穂波、洗い物担当は俺という分担当だ。

ゴム手袋に包んだ手で、食器を一つ一つ泡だったスポンジで磨いていく。面倒臭いと思ったことはない。むしろ、三食飯を作ってもらっているのだから、洗い物するくらいじゃ釣り合わないとさえ思っている。それなのに穂波は、洗い物も自分がすると言ってきてくれるのだ。

「ホント、良い妹だよな、アイツは……」

ちよつと前なら、そんなこと絶対に思わなかった。穂波は人に対する好き嫌いの激しいやつで、気に入った人にはとことん優しいくせに俺のような気に入らないやつは邪険に扱う。そんな二面性のある性格は好きじゃなかった。なかつたんだけど……

いざ自分が気に入られた側になってみると、なんだかんだ言ってる心地が良い。俺も結局は、自分本位だったってことだ。今まで冷たくされてた分、「デレ」の破壊力が核ミサイル並になっている。まさに殺人的なかわいらしさだ。

「嫁にしたいわ……、妹じゃなかったら」

ああチクシヨウ、またシスコン発言しちまったよ。言葉にすると悪化するだけなのに……

「よ、よよ、よっ、よっ、嫁え!？」

「っ!？」

ちよつと待ったアアア!!

今後ろから、女の子の音が……

「ほ、穂波! おまつ、いつからそこに!? てか聞いてたのか!？」

まさかのご本人登場サプライズ。

振り向くと、キッチンへ続くドアが開かれていて、その場所に俺の妹が突っ立っていた。

「き、聞いてたわよ！ 良い妹だよなってところから……。ア、アンタ、このシスコン、変態……」

「わ、忘れてくれ！ 頼む！ お願いだ！」

ブラコンに言われたくねえよ！ という突っ込みをする余裕はない。俺はただただ、顔を真っ赤にしてモジモジとしている穂波に、ゴム手袋を付けた両手を合わせるしかなかった。

ていうか、俺の独り言って声デカいのか？ エロゲーといい今のといい。

「これはその、口が滑ったというか……。だから忘れてくれ！」

「……忘れられるわけないでしょ！ このバカ兄！ そ、そんな嬉しいこと言われて……」

「う、うれ……。しい？」

そんなこと言われたら、むしろ俺の方が嬉しくなるんだが。

「はっ！？ い、今のナシ！ べ、別に嬉しくなんかないし！ 嫁にしたいとかアアアアンタどういふ神経して……。あ、でも、良い妹って言ってくれたのは……。嬉しくないわけじゃないんだけど……。その……。ありがと……」

ヤバイ。

このツンデレはヤバイ。

このままじゃ死ぬ。

人として死ぬ。

……。俺が。

「ま、まあ落ち着けて！ で、何か用でもあ、あったのか？」

とりあえず強引にでも、話題を逸らしておく必要があった。俺が穂波に襲い掛かってしまう前に。

「え、えっと……。洗い物、手伝ってあげようかなって……」

本当に良い妹だよチクショウ！

「だけど間が悪すぎるんだよなあオイ！　よりによって、あんな恥ずかしいこと呟いた瞬間に……」

「だから洗い物は俺がやるって言ったろ。飯作ってもらってるんだから、これくらい俺に任せろって」

「良いから私にもやらせなさいよ！　……この鈍感……」

「え？　何？」

「な、何でもない何でもない！　とにかく、私も洗い物するわよ！」

穂波は俺の横に立ち、俺が泡だったスポンジで磨いて置いた食器の泡を、蛇口から出る水で洗い流し始めた。

「まったく。じゃあ、よろしく頼むわ」

俺は根負けして、穂波が手伝うことを承知したのだった。

最近、穂波が近くに来るだけで妙にドキドキしてしまう。……

……今みたいに。

前はそんなことなかったのかと言われれば……嘘になるが、少なくとも今より酷くはなかった。

チラリ。

穂波の横顔を見つめる。

未だに真っ赤な顔をしていた。

チラリ。

俺の視線に気付いたのか、今度は穂波が俺に顔を向けてきた。

目と目が合ったその瞬間、俺達は両方とも顔の向きを洗い物へと戻すのだった。

「……明日の合コン、しっかりやりなさいよ」

「お、おう」

お互い洗い物をしながら、顔を見ないで会話する。

「とりあえず、目当ての子見付けたら絶対にメアドゲットしてきなさいよね」

「……わかってるよ」

「そしたら、私が色々協力してあげるから。女の子のことは女の子

に聞くのが1番だもの。頼りにしなさいよ?」

「……ああ」

何で俺は、ちょっとイライラしているんだ? そもそも何にイライラしてる?

「大丈夫よ。……アンタならきつと、良い彼女できるから。自分を信じなさい」

「……」

「……兄貴……?」

「……なあ穂波、お前さ……」

言えない。

そんなこと、聞けない。

だって俺達は……

「兄貴? どうかしたの?」

「……いや、何でもない。……そういえばお前、素手じゃねえか。

ゴム手袋はどうした?」

今気付いたが、穂波は素手で洗い物をしていた。我が家のキッチンの蛇口は冷水しか出ないので、素手で洗い物するのはけっこう堪える。

「もうないわよ。一つしかないもの」

「……だったら、お前が俺の使え」

俺は迷わず、自分のゴム手袋を脱いで穂波に差し出した。

「べ、別に大丈夫よ。冷たくなんて……ないんだから。それに、今度はアンタが手冷たくなつちゃうじゃない」

「……実を言うと、このゴム手袋小さくて手が痛いんだ。これなら素手の方が全然マシだし……だからお前が代わりに付けてくれ」

「で、でも……」

ゴム手袋が小さいのは本当だ。元々洗い物は母さんが基本的にやっていたから、手袋も母さんの手の大きさに合わせたやつだった。

とは言っても、俺が付けても別に痛いわけじゃない。素手で洗い物するよりは全然マシなのだが……

「遠慮するなって。妹に素手で洗い物させるなんて、兄貴がすることじゃないからさ」

「……………ごめん」

「違うだろ。ありがとうって言うてくれる方が、俺は嬉しい。……まあ、お礼を言わなきゃならないのは俺の方なんだが……。手伝ってくれて、ありがとな」

「うん……………あ、あ、ありがと……………」

やっぱり俺は、妹の前じゃカッコ付けなくなる性格みたいだな。

正直、こういう台詞は言ってて少し恥ずかしいんだが、意外とスラスラ口を出してしまう。

それから、一段と頬を赤らめた穂波と同じく真っ赤な顔をしているのである俺は、特に会話をすることもなく順調に洗い物を済ませていくのだった。

3月28日(月) 共同作業を兄妹で(後書き)

今日も学校が休みだー！

by 作者

3月28日(月) 妹の？殺人技

「これで良いのよ……。兄貴に彼女ができて、私にも彼氏ができれば……」

洗い物を終えた私は、自室のベッドで漫画を読んでいた。けれど、その内容は全く頭に入っていない。

「私は別に、兄貴と付き合いたいとか思ってるわけじゃ……。ないんだから……」

本当に良いの？

と誰かが耳元で囁いてきた気がしたので、私は慌てて寝返りをうった。

本当にこれで、良いに決まっている。だって私たちは、兄妹なんだから。

でも、嫁にしたいっていう独り言を聞いたとき……

すごく、嬉しかった。

だって私も、兄貴が兄貴じゃなかったら、夫にしたいって思

ガサ、ガサガサ。

思考を遮るかのように、突如、嫌な音がした。まるで虫がはいずり回っているような、そんな音が。

ガサガサガサ。

音の正体を確かめるために、周りを見渡してみると……

「ソレ」は意外と、近くにいた。

私の、お腹の上に。

「キ、キツ、キヤアアアアアア！……！！……！！……！！」

「どうした穂波!?!」

1階のリビングでテレビを観ていた俺は、穂波の悲鳴を聞いて慌てて階段を駆け上がった。2階に着いた瞬間、穂波が自分の部屋のドアを開け放ち弾丸みたいに飛び出してくるのが見えた。

「大丈夫か!? いったい何が…… っておい!!」

「あに、あ、ああ兄貴い……、ゴキ、ブ、…… イヤアアア!!」

そう叫んだ穂波が……

上半身にブラジャーしか付けていない、下半身のみパジャマ姿の穂波が……

ダダッ、ドーン! ガバツ、ギユツ!

なんと俺に、猛スピードで抱き着いてきたのだ!!

「ちよ、おま! 裸! っておまつ、何やってっつて、ちよ、ちよっ、ちよおおお!!」

「兄貴、ゴキブリ! ゴキブリなの! た、助けて!」

涙目で上目使いはやめてくれ!

しかも上半身裸で抱き着きながらっつて、俺を殺す気か!?

っか何で裸!?! なんでブラだけしか着けてないの!?

「ゴキブリ!? っつてゴキブリが出たのか!?!」

穂波の抱き着く力が半端なく強いので、俺はそのままの状態です明を求めるしかなかった。

「わ、私の部屋で、お腹の上に、ガサガサっつて!」

ガクガクガクガクと頷く穂波。

「た、助けて…… 兄貴い……」

アウトだった。

だが言わせてくれ。この状況でアウトしないとか、男失格だろ。

穂波の柔らかな肌が、その感触が、服を着ていない分リアルに伝わってくる。しかも、本当に微かだが、胸の…… 感触も。

ああヤバイ。甘酸っぱい香りまで、どんどん俺の脳髓を刺激してくる。コイツ、匂いまで俺好みとか勘弁してくれよ……。つく

づく、妹であるのが悔やまれる。

そして何より、この顔と声が。

潤んだ目元、はかなげな声。

普段は強がりな穂波が、こんなにも切実に俺を求めてくるなんて

……

クラクラ……してきた。

理性……？ 倫理……？

……何それ……喰えるの……？

そんなもの、もう俺の中には残ってねえよ。

限界だ。

穂波が俺にしているのと同じように、俺も穂波の背中に手を回し

……

「……って、何をやってんだ俺は！！！！！！！！」

回しかけて、慌ててその手を引っ込めた。

あつぶねえ！

危ねえ危ねえ危ねえ！

もうすぐで俺、犯罪者！

理性も倫理も喰えないし！

理性仕事しろ！ 倫理ちゃんと守ろうぜ！

「わかったわかったわかった！ わかったから、一旦離れる！ そ

それから、頼むから服を着てくれ！」

俺はなおも激しく抱き着いている穂波を無理矢理引きはがし、急

いで俺の部屋から黒いジャンパーを引っ張り出して穂波に投げ付け

た。穂波は急いでそれを着ると、涙混じりの声で「助けて……助けて

て……」と讒言うわごとのように呟き始めた。

「わかったから。俺が退治してやるから。で、お前の部屋に出たの

か？」

穂波はコクリと頷いた。

「じゃあ、俺がぶっ殺してくるから」

俺はとりあえず、自分の部屋に落ちていたティッシュの箱を掴み、

そいつを武器にすることにしたのだが、

「殺さないで！ 潰したりしたら、私の部屋に気持ち悪い汁が……
ってイヤアアア！！！」

「わかったわかったから！ 生け捕りにして外に捨ててくるから！」
「……外で殺して。跡形もなく燃やして。燃やした煙りも空気中に
出ないように封じ込めて」

「わかったから。お望み通りにしてやるから、お前は俺の部屋で待
ってる」

殺す気はあっても燃やす気なんてサラサラないが、穂波を安心さ
せるためにとりあえず頷いておいた。

ていうか今の事件で、俺のシスコン度数が急上昇しちゃった
かもしれん。このままじゃ、マジで妹に手出しちまいそうだ……。

しかも、俺が手出しても穂波なら受け入れてくれるかもしれない
から……

余計に怖い。

そもそも、穂波が俺に手を出すようなことがあつたら……

間違いなく、確実に、俺も穂波に手を出しちまうだろうな。

ギャルゲーやラブコメみたいな展開なのに、素直に喜べない。

……それもこれも、コイツが俺の妹だからなんだよ！！

ああ、運命を呪わせてくれ……

3月28日(月)これは、妹を護るためなんだ！

そういえば、穂波は虫の類が大嫌いだったわけ。蚊や蠅にすら過剰に反応するやつだったな。

家に虫が出たときは、母さんか母さんがいなかったら仕方なく父さんに、穂波は退治を頼っていたのだけれど……

久しぶりに、今回は俺だった。

しかも出没したのがゴキブリという超ハイレベルの気味悪生命体だったからか、テンパリ具合が尋常じゃなかった。ギャップ萌えどころの話ではない。ギャップを利用した殺人技だ。俺の理性を壊さないでくれ。

そんなことを考えながら穂波の部屋でゴキブリを探していたのだが……

結局、20分探し回っても見付からなかった。

代わりに、ボタンが全部外れたパジャマのシャツを発見した。：

…アイツ、一体何してたんだ？

ゴキブリ退治を諦めて俺の部屋に戻ると、穂波が俺のベッドで膝を抱えて座っていた。俺が渡した黒いジャンパーはブカブカで、手が袖から出ていない。

「……ゴキブリ、見付からなかった。巢に帰ったのか、どっかに隠れてるのか……」

俺の報告を聞くと、穂波は真っ青になった。

「イヤ……もうイヤ！ 最悪最悪最悪！ 何であの野郎が私の部屋に出るの！ ありえない！ ……もうイヤ……」

「落ち着けて。明日、バルサン買ってきてやるから」

「……ゴキブリホイホイも。……100個ほど」

「んなに買えるか」

「……どうしよう……部屋で寝れないよお……」

……

……俺は今、何を考えた？

穂波に何を言おうとした？

……確かに、ゴキブリが未だに潜んでいるかもしれない部屋で寝るのは、女の子にとっては自分を狙う殺し屋と添い寝するに等しいだろう。

だからって……

「俺の部屋と一緒に寝るか」、って何だよ！

ゴキブリに託^{かこ}けて嫌らしいこと考えてんじゃねえ！

バカ！？ バカなの俺は！？

これじゃバカ兄とかエロ兄って呼ばれても仕方ないよな！？

もし穂波と同じ部屋で寝ることになったら……

穂波をベッドで寝かせて俺が床で寝るとしても、寝顔とか寝息と

か……ば、爆弾が多過ぎる！

眠るといっつのは無防備になるのと同義で、そんな無防備な姿の穂波を目にしたら俺は……

想像するだけで、恐ろしい。

自分が前科者になる姿がありありと目に浮かぶ。

ああけど、穂波の寝顔……見てみたいかも……

……って、だ、か、ら！ 俺は何を考えて……

「兄貴、今夜は兄貴の部屋で……寝て良い？」

「……は、はい？」

お前、俺の心でも読んでた？

「ゴキブリ怖いから……一緒に寝て」

「……ちよつと待て！ 何で一緒に！？ 自分の部屋で寝れないの

はわかるけどよ、母さんの部屋とか父さんの部屋とか空いてるだろ

「！」

「……もしゴキブリが出たら、兄貴に退治して欲しいから……。私の部屋以外にも、いるかもしれないし……」

「……ま、まあ、確かにそうかもしれないが……、けどよ……」

「……兄貴なんだから、少しは役に……立ちなさいよ……」

「お、……おう」

……って、何願ってんだ俺は！？

そ、そこは何とかして別の打開策を思案するところだろ！

まあでも、確かに理由は正統のような気も……

そうだ。俺が考え過ぎなだけなんだ。だいたい兄妹なんだから、一緒に寝るくらい不自然なことじゃない！ だって昔は同じ部屋で同じベッドで寝ていたわけだし！ 兄貴なんだから、ゴキブリから妹を守ってやる義務があるわけだし、何より妹が安心して眠れるようにするのは兄貴として当然だし、義務当然必然妥当適切……

……

「じゃ、じゃあ、お前が俺のベッドで寝ろ。俺は床で寝るから」

承諾、しちまった。

「べ、別に私が床でいいわよ。……兄貴に悪いし……」

「気にしないでいい。俺も3日に1回くらいは床で寝てるし」

「壮絶に下手くそな嘘しか言えなかったが、穂波は「わかった……ありがとう」と了承してくれた。……妹を固い床の上で寝かせるわけにはいかないからな。」

3月28日(月)へ、別に、兄貴にそんな期待してなんて……

何で何で何で!?

何で私、兄貴と一緒に寝てとか言っちゃったの!?

深夜0時近く、私は兄貴の部屋で、兄貴と一緒に寝ていた。私は兄貴のベッドで、兄貴はベッドの横でカーペットの上に寝ている。ジャンパーをかけ布団代わりにしているようだ。

兄貴は気を使って、私をベッドで寝かせてくれたのだけれど……

ベッドから、兄貴の匂いがする。

不快ではなかった。むしろ、安心させてくれるような……

あの時

ゴキブリに怯えて兄貴に抱き着いたときも、同じような匂いがした。兄貴の胸板は意外とがっしりしていて……

半狂乱の状態だったからあまり鮮明に覚えているわけじゃないけど、兄貴に抱き着くだけで、安心することができたんだ。

「なあ穂波、何であるの時、上半身裸だったんだよ」

ベッドのすぐ横、斜め下から兄貴の声がする。部屋が暗いので、隣を覗いてみても兄貴の顔はまったく見えなかった。

「ゴキブリがお腹の上に乗ってきたから、混乱してパジャマ引き裂いちゃったのよ……って、何言わすのよ! ていうか何でそんなこと聞くの!?! 恥ずかしいこと思い出させないで!」

「わ、悪い……」

「あのことは忘れなさい！ 未来永劫口外しないこと！ 良いわね！？ このセクハラ兄貴！」

「おう……」

まったく、何でこのバカ兄は蒸し返したりするのかしら。

調度今、兄貴のこと……

カッコ良いって、思ってたのに。

恥ずかしさから逃れるように、私はかけ布団の中で胎児みたいに丸まった。

何で、一緒に寝ようとか言ってしまったのだろう。

ゴキブリが怖いから？ それもあるけど、もしかして……

違う違う違う！

そんなこと考えてない！

私はただ、万が一の事態に備えて兄貴という警備員をゴキブリ退治用に側に置いておきたいだけで、

仕方なく、本当に仕方なくお願いしただけなの！

私はそんな、ふ、ふふふしだらな女じゃないんだから！

でも、兄貴はどうなんだろう。

私と2人きりで寝たりしてるのに、何も思っていないの？

同じベッドで寝てるわけじゃないけど、寝息とかたてたらお互いに聞こえちゃうわけだし、寝顔も、見ようと思えば楽に見えるはず。

それに、お……、襲おうとすれば簡単に……

って、期待なんかしてない！

兄貴に襲われたとか、ホントありえない！

そんなこと微塵も考えてないの！

期待なんかしてない！ してないけど

抵抗はしないかも。

って思ってしまったのは、やっぱり私がブラコンって証拠の
かな。

「……ねえ兄貴」

布団から頭だけ出して、兄貴のいる方向は見ずに話し掛けてみる。

「……何だ？」

「……襲ったりしないでよ」

抵抗しないかもしれないから

とまでは流石に言えない。

「す、するか！ 絶対死んでもするか！ ありえねえっーの！

だ、誰がお前なんか！」

カチン。

ありえない、

誰がお前なんか、

……ですって!？」

「あつ、そそそそそう、そそうよね？ ありえないわよね？ よ、

よくわかってるじゃない。バカ兄のくせに……」

「……お前、何怒って……」

「うるさいうるさいうるさい！ 怒ってなんかない！ そ、それこ

そありえない、明日地球が滅亡するってくらいにありえない話だわ

！」

「ス、スマン……」

「まったく！ いいからとつと寝なさい、このバカ兄！」

バカバカバカ、兄貴のバカ!!

死んじゃえバカ兄貴!!

私は何故だか悔しくて、両手でシートに爪を立てた。

それからしばらく、兄貴と会話することなく夜が更けていっ

ただのだけれど……

ム、カ、ツ、……クウウウ！！

何！？ 何なのあのバカ兄は！？

お前に何度惚れかけたと思ってんだ、とか、嫁にしたい、とか言っ
つときながら……

この状況で何も思っていないわけ！？

それどころか、お前なんか襲うか、って、なんかって何よなんか
って！

べ、別に私は何かされたいわけじゃないんだけど、女の子と2人
きりで寝てるんだから何かしらはそーゆーこと意識してくれないと
プ、プライドが傷付くっていうか何というか……

い、妹とは言っても、私達は色々あってちよつと進んだ関係にな
ってるわけだし、別にそれ以上先に進みたいとかはちつとも思っ
てないんだけど、でもそのあの………

頭がごちゃごちゃしちゃって、結局何が言いたいのかはつきりし
ない。

色んな感情がまとめてミキサーに放り込まれて、回転しながら混
ざり合っているみたいだ。

何で兄貴は分かってくれないの……？

何を分かって欲しいのかは、私にも分からないんだけど。

「なあ穂波……」

私を呼ぶ声が、隣から聞こえた気がした。

「さつきは襲ったりしねえとか言ったけどさ……、正直、俺にとっ
てこの状況ってけっこう危ないんだわ」

「……………」

兄貴と会話するのが気まずかった私は、狸寝入りを決め込んだ。

「……だからさ、何て言ったら良いんだろ……。実は、自分を抑え

るのに必死だったりしてるわけであって……」

「……………」

「……非常に、ドキドキしている次第であります」

「……………」

この……バカ兄……

な、何急に、乙女心読んだ発言してるのよ……。

それに、その発言もよく考えたら問題発言じゃない。妹相手に欲情押さえ込んでること、堂々と宣言するなんて……。

「変態な兄貴でごめん……。けどよ、お、お前が可愛過ぎるのがいけないんだからな」

か、かつかかつか、かかかか可愛い!?

バカ兄の大バカ!

何でそんなこと言うの!?

私を……不眠症にさせる気!?

嬉しい。素直に、嬉しかった。

嬉しかったけど……

何も、言えなかった。

口を開いたら、ダムが決壊するみたいにどんどん気持ちちが溢れていって

「兄妹」っていう心の重しを、流し去ってしまいそうだったから。

襲われるのは嫌だけど

抱き枕くらいになら、されても良いかな……

って思えてきた。

やっぱり、私ってブラコンだ。

兄貴のこと……

大好き過ぎる。

春なのに、ベッドの上だけ熱帯夜。

布団を掛けていられなくなった私は、兄貴のことしか考えられなくなつた頭を兄貴の枕に埋^{くづ}めて

兄貴の匂いを感じながら、兄貴への思いを消そうともがいた。

一晩かかっても、無理だったのだけれど。

3月28日(月)へ、別に、兄貴にそんな期待してなんて……(後書き)

レビュー書いてくれる人がいると、嬉しいです。

みなさん、感想本当にありがとうございます。

すごく励みになりました。

てか……

今から病院へ行って来ますorz
そして明日は体育祭

3月29日(火)放心の兄貴、ただ今絶賛後悔中

ん？

……もう朝か……

カーテンの隙間を縫うようにして、窓から光が差し込んでくる。外から聞こえてくる小鳥の鳴き声も、一日の始まりを告げていた。目覚まし時計は鳴っていない。どうやら、いつもの起床時間よりも早くに目が覚めたようだ。

俺は寝起きで気怠い体を起こし上げ、目覚まし時計で時刻の確認を……

あれ、何でジャンパーが体の上に？ それに、ベッドが妙に硬いような……

というか、ベッドではなかった。俺が寝ているのは、床の上。じゃあ、何で俺は床の上に？ ベッドはどうした？

ベッドを覗き込んでみると、掛け布団が膨らんでいた。中に何が入っているのかと思い、さらに身を乗り出して覗くと……

妹だった。

ベッドの上にいる物体は、紛れもなく俺の妹だった。

妹が

スースーと穏やかな寝息をたてて、何だか幸せそうな顔で寝ている。

「ほ、穂波!？」

ちょ、おま、何で俺のベッドで!？

ゆっくりと、記憶の扉を開いていく。

昨日は、ゴキブリがどうのこうのので穂波がテンパって、なんやかんやで俺と一緒に寝ることになって……

そうだ。

俺は昨日、俺の部屋で穂波と一緒に寝たんだ。穂波をベッドに寝かして、俺は床で寝ることにして……

「あに……き……むにゃむにゃ……」

ドクン。

朝っぱらから、心臓がフルビートした。

穂波が寝言で俺を……？

それってもしかして……

猫がひなたぼっこしてるみたいな、穂波の寝顔。

穏やかでかわいらしい。

ずっと見つめていたくなる。

「この……ばかあにい……あにきい、あにきい……」

おいおいおい！

穂波、お前いったいどんな夢見て……

「それはじゅーはちきんげーむでしょお？ ……ぼっしゅう……な

んだからあ……」

って待てえい！

ー昨日のエロゲの話かよー！

ったく、期待して損したぜ。

……って期待？

……落ち着け。期待じゃなくて危惧だろ。何を言ってるんだ俺は

……

「あにきい……」

夢の内容が多少アレだとしても、穂波に寝言で俺の名前を呼ばれるよ……

やっぱり、ドキドキしてしまっ。

もうちよっと思えていたくなる。穂波のかわいらしい寝顔を……。

イケないことだとは分かっている。だけど、目が離せないんだ。触れてみたい、とは思わなかった。この寝顔を壊したくない。穂波には、しばらく眠り姫のままでもいいからいたかった。

熱を出して寝込んだ時のように、

思考がぼんやりと霞んでいく。

俺はただただ、穂波の寝顔を見つめて

パチリ。

穂波が、まぶた瞼を開いた。

その視線の先、目の前には……

穂波の顔を覗き込む、俺の顔があるわけで。

「イ、……イヤアアア!!」

「グハアアア!!」

眠気覚ましには少々ハードな、鉄拳右ストレートが飛んできた。

おはようございます、穂波さん。

こんな経験はないだろうか。

深夜に人と話していると、ヤケにテンションが上がったり、羞恥心が薄れていって普段できないような行動や言動を取ってしまったり、まるで酒に酔ったかのような状態になってしまったり
そして翌日、後悔する。

冷静になった頭で考えてみると、急激に恥ずかしくなる。

昨夜の自分は自分じゃなかった、と言い訳したくなる。

誰もが、こんな経験を一度はしたことだろう。

かくいう俺も、何回も経験してきた。

けど……………

「死にたい。とにかく死にたい。……………昨日の自分を殺したい今の自分は自殺したい死にたい消えたい召されたい……………」

廃人同然になるほどの経験は、今回が初めてだった。

時刻は午前11時。

近所のスーパーでバルサンと昼飯に食べる弁当を買い終えた俺は、D公園近くの路上をふらふらと歩き、自宅へと向かっている。

穂波は一緒ではない。アイツは10時から友人と遊びに行く約束をしていたので、俺1人で買ってきたのだ。穂波が遊びに行ってる間に、バルサンを焚いておく予定である。

まあそれだけでなく、穂波と一緒に買い物になど行けなかったが……………。

アイツは、朝から俺と目を合わせてくれなかった。それどころか、まともに会話さえしてくれない。

いくら弁明しても、俺に対する「寝顔を見つめてた変態」という認識を変えてくれないのだ。……………まあ、実際にそうなのだが。

朝飯は作ってくれたけど一緒に食べてくれないし、俺を見ると真っ赤な顔になって逃げ出すし。

いっそのこと罵倒してくれるほうがまだ良いのだが、全く口を聞いてくれない。

シヨックだ。

穂波に嫌われた。

帰ったら、土下座してでも赦してもらおう。そう思えるくらい、穂波と仲良くしていたいんだ。

って、シスコン丸出しだよな。どんだけヘンタイなんだよ俺は……………。

ヘンタイと言えば……………

昨日の俺、何をやっているんだ。

女の子と一緒に寝ている状況で、「何も嫌らしいこと考えてない」と言うのはやはり失礼かと思ひ、正直な気持ちを伝えたのだが……正直過ぎた。

表現がダイレクト過ぎた。

そもそも、妹相手に言う台詞じゃないし、妹相手に抱いて良い感情じゃない。

あの時穂波が起きていたのか寝ていたのかはわからないが、どっちにしろ俺があんな発言をした事実は変わらない。死にたい。

そんなわけで俺は、ただ今絶賛後悔中なわけである。

ガッソ。

ふらふらと歩道を歩いていたら、すれ違ったオッサンにぶつかった。

「すみません……」

「気をつけるよな」

オッサンは舌打ちをして去っていったが、俺は再び歩き出すまでに時間がかかった。

もうダメだ。

多分次は、車にでも轢かれて死ぬのだろう。

いや待て、そしたら運転手に迷惑がかかる。どうせ死ぬなら他の方法で……って、そもそも人に迷惑をかけない死に方ってあるのか？ どんなに上手く死ねても、葬式代とかで親に迷惑かけるし……ゴッソ。

「キャッ」

俺の前を歩いていたセミロングの若い女性が、電柱に頭をぶつけ、その反動で俺の胸に背中を預けるように寄り掛かってきた。

「だ、大丈夫ですか？」

「ご、ごめんなさい……。ポーとしてまして」

女性は寄り掛かったまま、動こうとしない。脚がふらふらとしていて、今にも崩れ落ちそうだった。

「ごめんなさい……、体に力が入らないんです……」

その声も、沈んでいてとてもか細い。

「とりあえず、体調悪いなら、その公園のベンチで休みますか？
肩お貸しますよ」

「ありがとうございます……ございます。優しいんですね」

「い、いえ……それほどでは……」

背中越しに振り向いたその女性は

全体的に地味な印象はするものの、なかなかの美人だった。

歳は20代前半くらいだろうか。縁無し眼鏡を掛けた顔も、灰色のロングスカートにベージュの上着を羽織った服装も、非常に大人びた印象を受ける。

「とにかく、そのベンチへ行きましょう。俺で良かったら、力になりますから」

「すみません……お願いします」

「任せてください」

もちろん、俺は笑顔で快諾した。「困っている人がいるのなら助ける」ってというのが、俺のアイデンティティだから。

突然女性に寄り掛かれた時はドキリとしたが、彼女の雰囲気あまりにも心配だったので、逆に冷静でいることができた。

あの夜穂波が座っていたベンチへ、俺は彼女を支えながら移動することにした。

3月29日（火）出会い、そして……

D公園は、砂場やブランコ、滑り台やシーソーなど、一通りの遊具が揃っているなかなか大きな公園だ。

今日も、幼稚園児くらいの子供たちが砂場で親と一緒に遊んだり、小学校低学年～中学年くらいの子供たちがジャングルジムに登ってはしゃぎあったりしている。

「貧血、ですか？」

彼女と一緒にベンチに腰掛けた俺は、とりあえず彼女に容態を聞いてみることにした。

「はい……そうみたいです。昨日の朝から……何も食べていなくて

……」

納得だ。

彼女の顔は精気を無くしていて、まるで何日も水をあげていない花みたいになっている。本来は綺麗に花を咲かせることができるのに、決定的に養分が足りていない。

「あ、もし良かったら、これ……食べますか？」

俺はスーパーのレジ袋から、鮭弁当を取り出した。もちろん、箸も一緒に。

「え？ ……そんな、ここまでして頂いたのに、申し訳ないですよ

……」

「気にしないで下さい。全然オツケーですから」

「でも……」

「もしかして、鮭はお嫌い？」

「いえ、……大好き……ですけど……。食べて、……良いんですか？」

「もちろんです！ あ、あそこの自販機で飲み物買ってきますよ。何が良いですか？」

「えっと……じゃあ、お茶を……」

「わかりました！ では、買ってきますね」

俺はベンチから立ち上がり、右斜め20メートルほど先にある、公園内の自販機にダッシュで向かおうとしたのだが……

「あつ、あの……、お金は、後でちゃんと、お渡ししますから。…

…お弁当の方も」

「そ、そんな！ 遠慮しなくても大丈夫ですよ」

「えっと……」

「それよりも、早く元気になってくれた方が、俺は嬉しいですから
まだ何か言いたそうな彼女に笑顔を向けて、俺は自販機へと向か
った。

そしてしばらく後、自販機でペットボトルのお茶を2本買って戻
ってきた。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

彼女はお茶を受け取ると、俺に軽くお辞儀をして「いただきます
と言ってから弁当に手をつけた。どうやら、俺が戻ってくるまで食
べていなかったらしい。

彼女はゆっくり、一口ずつ箸を口へ運んでいく。

背筋を伸ばして脚を閉じた座り方も、落ち着いた食べ方も、すご
く上品だ。ただ弁当を食べているだけなのに、優雅にすら思える。

顔色さえ悪くなければ、春の公園で昼食を楽しんでいる綺麗な女
性として、絵になっていたはずだ。

しばらく、無言の状態が続いた。

彼女は、ゆっくりとはあるが、箸を休めることなく食べている。
昨日の朝から何も食べていないんだ、腹が減っていて当然だろう。

俺は彼女の食事を邪魔しないように、隣で静かにお茶を飲んでい
た。

弁当を半分ほど食べ終わると、彼女が話し掛けてきた。

「あの……、本当にありがとうございます。助けていただいて……」

「い、いえ。感謝されるようなことなど……」

「……謙虚、なんですね」

彼女は俺の顔を見て、クスリと笑った。

「見ず知らずの人にここまでしてくれる人なんて、なかなかいませんよ。いくら感謝しても足りないくらいです」

顔色が大分良くなった彼女。元気も出てきたようだ。

「えっと……そんなことないですよ……あ、ありがとうございます」
そこまで言われると、さすがにテレる。

しかも、顔色を取り戻した彼女の笑顔は……

とても、可愛かった。

穂波の笑顔はギュツと抱きしめたくなるような気持ちにさせるが、彼女の笑顔は癒し系で、むしろこっちが優しく包まれたくなる。

「あの……。お礼、させて下さい。あ、とりあえず、お金払わせて下さい」

彼女は財布を取り出すつもりか、自分の上着のポケットに手を入れて探り始めた。

「いえいえいえ！　だ、大丈夫です！　諸事情によりお金たくさんもらってたんで！」

「でも……」

「それより、もう体調は大丈夫なんですか？　どこか悪いとことか、ありませんか？」

「はい。おかげさまで……」

「よ、良かったです！　それじゃ俺、急いでるんで！　さようならー！」

「あ、ちょっと……」

俺はバルサンが入ったスーパーのレジ袋を掴み、逃げるようにその場を立ち去った。

「しまった……」

D公園を出て自宅へと歩きながら、俺は後悔していた。

ナンパ目当てで助けたと思われたくなくて、互いの名前も交換せず立ち去って行ったのだが……

よくよく考えたら、チャンスだったんじゃないか。

穂波の「宿題」の件や、俺自身のシスコン化の問題もあり、ちゃんとした彼女を作ろうと俺は考えていたはずなのに……

やっちまった。

出会い、フイにしちまった。

さっきの女の人は、俺に少なからず好意を持ってくれていたみたいだった。

しかも綺麗だったし、大人っぽいところとか俺の好みだったし……
彼女に一目惚れしたというわけではないけど、順調に会話とかしていけば将来的に恋に落ちるかもしれない人だった。

そもそも、穂波は確かに可愛いし、というか可愛い過ぎて恋に落ちる一歩手前なのだが 本来は俺のタイプではない。

俺はさっきの彼女みたいな、大人っぽくておしとやかでお姉さんタイプが好きなのであって

決して、穂波のようなガキなど……

……ま、まあ、ツンデレは好きだし、あの脚は俺のタイプド真ん中だし、最近は色々が良いところが見えてきたりしてますます好きに……

……って、結局穂波もタイプじゃねえかよ！！

死んどけこのシスコン！！

まあそれは置いといて。

逃がした魚は、確かに大きかった。

フラグを立てる又とないチャンスだった。

なのに俺は……

「……まあ、人助けができただけでも善しとするか」

これは負け惜しみではない。

大事なことなので二度言っが、負け惜しみではない。

……本当だから！！

3月29日(火) 出会い、そして…… (後書き)

次話は穂波サイドです。

3月29日（火）待ち？合わせ

午前10時、B駅の西口改札前で、私は友達を2人待っていた。

B駅は県内有数の大きな駅で、通勤ラッシュを過ぎた時間でも多くの人が行き交っている。派手な恰好をした若者や、スーツ姿の中年男性、白髪が生えたお婆さんなどなど。

その人込みの中から

お目当ての友達を1人、見つけ出した。

「颯姫ー！」

腰まで伸ばした髪を揺らし、スカートをなびかせ、ハンドバックをガタガタ鳴らしながら 私は彼女の下へと走っていく。

「おう、穂波！ 久しぶり！」

ニカツと犬歯を剥き出しにして笑みを浮かべている、背の高いスレンダーな女の子は

私の友人、木立颯姫だ。

うなじが見えるくらいに後ろ髪を上げた長いポニーテール。無造作にワックスでスタイリングした髪。

あえてボロボロにしたジーンズに、髑髏がプリントされたTシャツ。
ッ。

首や手首に銀色のアクセサリをちりばめた、パンクな恰好をしている。

「さーつきっ！」

走ったままの勢いで、私は颯姫に抱き着いた。けど、颯姫は全く動じない。余裕たっぷり、私をギュツと抱き留めてくれた。

「ほーなみつ！ ったく、可愛いヤツだなオメエは！」

「エへへ。颯姫だ颯姫だ颯姫だあ！ 会いたかったわ！」

「おうおうおう！ 俺も会いたかったぜ！ ったく、ちょっと見な

い間にまた可愛くなりやがってよお！」

颯姫の胸の中で、私はグシグシと頭を撫でられていた。ちょっと乱暴だけど、そこがまた堪らない。姐御肌の彼女に、ずっと甘えていたくなる。

凜々しくて美しい。

そんな彼女が、私は大好きだった。

「颯姫……大好き！ もっとギュッとしてっ」

私より頭一個半くらい高いところにある颯姫の顔を見上げながら、私はさらなる甘え攻撃を仕掛けた。

「つたく、穂波は甘えんぼさんだな。ほらよっ！」

「アンツ！ さ、颯姫い……」

「穂波……へへっ」

颯姫だ……

颯姫の感触、颯姫の匂いだ……

好き好き、だーい好き。

春休み入ってから会えなかった分を補うように、こうして颯姫成分を全身で吸収していたのだけれど……

「ふみやあ！」

背後から突然

何者かに、スカートの中に手を入れられた。

……まあ、私にこんなことをする人間は1人しかいないんだけど

「私にも、穂波ちゃん成分下さいな！」

「あ、蒼！ やめなさいこのヘンタイ！」

「よいではないかよいではないか、減るものじゃないんですよ
？」

スリスリスリと私のお尻を撫で回してくるこの痴漢は

颯姫と同じく、私の友人

天櫛蒼だ。

ちっちゃい背丈に、ボブカットの髪。目もくりりんとして愛らし

い。ウサギやハムスターみたいな小動物のようだ。

見た目だけ見れば、超可愛い美少女なんだけど

「今日の穂波ちゃんのパンツは、ピンク色だあ！」

この通り、超を3つくらい付けてさらにハイパーとかスーパーとかウルトラとかも付けて良いほどの、ドヘンタイだ。

「いい加減にしろっ！」

「アイタっ！ 穂波ちゃん、オデコにグーは酷いですよう！」

「うるさいこのヘンタイ！ バカバカバカ！ アンタはいつつもヘンタイなんだから！ このヘンタイ大魔神！」

「そんなに褒めないでえ。嬉しくなっちゃうよん」

罵倒されているのに満面の笑みを浮かべている……

一体どこに褒め要素があったっていうのよ。

「し、死んじゃえこのヘンタイ！ 冥土で悔い改めなさい！」

「メイド！？ メイドの国なら行きたいな って痛い、痛いよ穂

波ちゃん！ アンツ、ダメエ！ 目覚める、何かに目覚めちゃいますっ！」

もう目覚め済みじゃないの……？

何で未だにニコニコ笑ってるのよ。

私けっこう本気で殴ってるんだけど……

「ったく蒼、オメエもちよっと見ない間にヘンタイぶりに磨きがかかってやがるな」

蒼と私のやり取りを見て、やや呆れ顔をする颯姫。

毎度の光景過ぎてすっかり慣れてしまっている。

「ありがとうございますっ！」

「お礼言つとこじゃないでしょ、このヘンタイ……」

もうだめ。

きつと、このヘンタイには常識とか通用しないんだわ。

将来牢獄に入らないことを祈るしかない……

「颯姫ちゃん颯姫ちゃん、私の事もギョツとして下さいな！」

「まあ良いけどよ……、変なところ触ったらジャイアントスイングだ

「からな」

「こんな人が多いところでジャイアントスイングなんて、通行人の方々に迷惑過ぎますう！ やるならお尻ペンペンにして下さい！ もちろんパンツを降ろして、直接お尻を……」

「自重しろヘンタイ！」

あまりのヘンタイぶりに、思わずツッコんでしまった。

「ハイハイ、ヘンタイでけっこうですよーうだ。……ではでは颯姫ちゃん、ギョギョと……」

颯姫に向けて、つぶらな瞳で上目使いをする蒼。傍から見ても、思わずキュンときてしまうほど可愛い。庇護欲をそそられる。

「……わーったよ。ほらっ」

そんな蒼の小動物攻撃に負けたのか、苦笑いをしながらも、私にしてくれたみたいに蒼を抱きしめた颯姫。おまけに頭をグシグシと撫でている。

「ったく、オメエも黙ってりゃあ可愛いのによ」

「颯姫ちゃん……」

颯姫の胸に顔を埋め、うっとりとした顔を浮かべている蒼だったけど

「寂しいよう……胸が」

ピキッ！

血管がはち切れる音が、颯姫のこめかみから聞こえた。気がした。

「な、め………とんのかおんどりゃあああ！」

ゴツンッ！

男勝りの力を持つ颯姫の、本気のゲンコツが蒼の脳天をカチ割った。

「いつ………たーい！」

さすがの蒼でも、これは効いたみたい。

頭を押さえながら、涙目でうずくまっている。

でも………良い気味だわ！

だつてだつてだつて……

「なくて悪いか！ 背が高いのに胸がなくて悪いか！ 男みたいで悪いか！」

「そうよこの外道！ アンタみたいな持つてるヤツには、持たざる者の気持ちなんてわかんないんだから！」

「そうだテメエこの野郎！ チビ巨乳が調子こいてんじゃねえぞコラ！」

「ご、ごめんなさ……」

地面にうずくまって、肉食獣に追い詰められた本物の小動物みたいにになっている蒼に、私も言葉の牙で噛み付いた。

「いいこと？ 私たちはまだ13歳なの。成長期なの。将来があるの。希望があるの！ それをペツタンコだのまな板だの洗濯板だの……」

「そうだそうだ！ テメエなんて、背伸びんに使う栄養が胸に回ってるだけだろうがよ！ おととい来やがれってんだ、このチビ助！」

「もう許して下さい……」と懇願する小動物に、容赦なく怒りをぶつける私と颯姫。

……まあ、ちよつと八つ当たりな部分もあるんだけど……

「良いか！？ 耳の穴かつぼじってよく聞きやがれ！」

両手を腰に添え、仁王立ちをして蒼を見下ろした颯姫は、大きく息を吸って一言、

「貧乳に勝る乳はねえ……！！！」

地球の裏側にまで届くんじじゃないかという怒鳴り声を発した。

さすが颯姫だわ！ 超超超力ツコ良い！

もうホント、惚れちゃいそう……

……ってあれ？

なんか嫌な予感……

ここは駅の改札前で、周りにはたくさん的一般人がいるわけ

で……

「さ、颯姫、周り……」

「……はっ！ し、しまっ……」

気付いた時には遅かった。

視線、視線、視線。四方八方、視線のオンパレード。

大声で大胆発言をした颯姫に、みんな惜しめない視線を送っている。

「うっ……蒼の……バツカヤロオオ！」

「ま、待って颯姫！」

あまりの羞恥に耐え切れず

颯姫も私も、ダッシュで駅の構内から逃げ出すしかなかった。

……涙目の蒼を置いて。

3月29日(火)待ち?合わせ(後書き)

今更ですが、「あいまいつ!」というタイトルには「愛妹」と「曖昧」がかかっています。

3月29日（火）歌うぞオメエらア！

B 駅を出た私達3人は、駅前のあるカラオケ屋にいた。

レジで受け付けをして、ドリンクバーでコップにジュースを注ぎ、自分達に与えられた部屋に入っていった。そして、颯姫、私、蒼の順でソファアに腰掛けている。

室内は薄暗く、非常に雰囲気が出ていた。テーブルや壁といった内装も綺麗で、これなら気持ち良く歌えそう。

カラオケ用のテレビ画面からは、最近デビューした女性歌手のプロモーショナルビデオが流れている。その「GO!GO!GO!GO!」という歌詞がまるで、私達に早く歌えと催促しているようだった。

「ほらほら颯姫ちゃん、いつまでもいじけてないで、嫌なことは歌って忘れましょ」

マイクを颯姫に差し出し、ニッコリほほ笑む蒼。

ちよつと前まで涙目だったのに、その面影は微塵もない。切り替えの早い女だわ。

「うるっせえんだよチビ助。そう簡単に忘れて堪るかってんだよ」
マイクは受け取らずに、ツーンとそっぽを向く颯姫。

こっちは切り替えができていないみたい。恥ずかしさからか、まだ顔が赤い。

「颯姫、元気出して。今日は久しぶりに一緒に遊べるんじゃない。楽しまなくちゃ損だわ」

颯姫の肩に手を添えて、私も颯姫を慰める。

「そうだけどよ……。でもあんな……。恥ずいこと言っちゃって……。ますます顔が赤くなってきた颯姫。

正直……。可愛い。

「颯姫ちゃん、私が悪かったよね……。からかったりしちゃって」

めんね。今日は颯姫ちゃんがタダ券持ってきてくれたのに……。

颯姫ちゃん普段兄弟たちのお世話で忙しくて、久しぶりにカラオケ来れたってゆーのに……」

ちよっとしおらしくなった蒼に、颯姫は慌てて顔を向けた。

「う、うるせえ、謝るなよ………。つたく、しかたねえ」

一旦言葉を止めて蒼の手からマイクを引つたみると、電源を入れて、

「……おいオメエら！ 今日9時間ぶっ通しカラオケフリータイムだぜこのヤロオ！ 気合い入れて行こうぜ！」

立ち上がって叫んだ。

さながら、ロックバンドのライブのMCみたいに。

「うん！ 楽しもう楽しもう！」

「やったあ！ 颯姫ちゃん、今日は1番点数低かった人は罰ゲームだよ！」

「上等じゃねえか！ そんなじゃ……歌うぞオメエら！」

「「おーう！」」

私と蒼も、ハモリながら叫んだ。

うんうん。

楽しい一日になりそうだわ。

トップバッターは颯姫。

もうホント、超超超カッコ良い！

男性ボーカルのロックバンドを、ライブで歌っているみたいに煽りとかシャウトとか入れながら熱唱しているんだもの！

しかも超上手い！

バンドのヴォーカルのスカウトとか来てもおかしくないくらい！ その圧倒的なパフォーマンスに、私と蒼もノリノリで手拍子を打った。

カッコ良いカッコ良いカッコ良い……

本当に颯姫はカッコ良い。

颯姫の家は父子家庭の5人兄弟で、普段は颯姫がお母さんみたいな役割をしている。だから家事とかが忙しくてあまり一緒に遊べないんだけど、今日はお父さんの仕事が休みで、家事はお父さんに任せてきたみたい。

しかも、そのお父さんから、たまにはハメを外してこいと言われてカラオケフリータイムのタダ券を3枚も貰ったらしい。

そんなわけで、今日の颯姫は開放感バリバリでめっちゃハイテンション。

1曲目にして、テーブルの上に片足を乗せてエアギターを弾き始めた。

でも上手い。

カッコ良い。

すっごく様になっている。

セカンドバッターは蒼。

こっちものっけからハイテンション。

今流行りの女性アイドルグループの曲を熱唱している。しかも振り付け付き。

点数勝負を提案してくるだけあって、蒼の歌もかなりのものだった。歌も踊りも洗練されている。

それになにより、すっごく楽しそうに歌っているんだもの。

見ているこっちまで楽しくなってくるわ。

そしてサードバッターは、私。

喉慣らしを考えて、自分にとって歌いやすい曲を選んだ。私の好きな男性シンガーソングライターの曲だ。

まあまああのベテランで、私の年代じゃそこまでファンな人は多くないと思うけど、テレビコマーシャルのタイアップ曲とかで知名度

はずごく高い。

案の定、私が歌うと颯姫と蒼もノツてくれた。サビで一緒に歌詞を口ずさんでいる。

「よっ、お疲れ〜！」

「上手だったよ、穂波ちゃん」

歌い終わった私を、拍手で労ってくれる2人。

「当然だわ！ 今日の優勝は私が貰うんだからっ！」

そして、私の歌の採点が始まり

全員が一回歌い終わった時点で、点数の順位は、

颯姫

蒼

私。

だ、大丈夫よ！

蒼と私は2点しか離れてなかったんだし、イけるイける！

ば、罰ゲームになんかならないんだから！

結局、2時間経っても順位に変動はなかった。

最高得点は颯姫の96点。

勝てる気がしない。

「こりゃ優勝は俺がもらいだな！ 悪いねえ、お二人さん！」

自信満々な笑顔でソファーに踏ん反り返り、ナポリタンをフォークで絡め取っている颯姫。

ちなみに、私と蒼も同じのを食べている。歌はちよつとおやすみして、お昼を摂ることにしたのだ。

颯姫がくれたタダ券にはナポリタン無料のサービスも付いていたから、私達はこうして、値段高いから普段は食べることはないカラ

オケ屋のフードメニューを味わっている。

「甘い、甘いですよ颯姫ちゃん。私はまだ、本気を3割も出してないんです」

「何言ってるのよ、私なんか2割だわ。私が本気出したらアンタたち感動してポロポロ泣いちゃうから仕方なくセーブしてあげてるの」

「おうおうオメエら。男なら初めから全力投球、一曲入魂だろうが。魂込めて歌ってやらねえと、作った人に失礼だぜ」

バカなやり取りをしている私と蒼に、余裕の笑みを浮かべて男らしい格言を言い放つ颯姫。

「私達は全員女ですよーうだ。颯姫ちゃん、女の子なのに男ならうとか言ってる、彼氏できないよお？」

「ハツハツハ。言ってくれるじゃねえかチビ助エ。こっつ見えても俺は、中学入ってから4人の男子に告られたんだぜ！」

「それ何度も聞いたわよ。颯姫ったらモテモテなんだからっ。うらやましいわ」

「ええ〜？ でもお、颯姫ちゃんに告白してきた男子って、みんなドM疑惑のあるヘタレ系男子だったような……」

「う、うるせえ！ た、確かに、その男気に惚れたとか強いところが良いとか下僕にして下さいとか、ろくでもねえ告白ばっかだったけどよ……って、そんなの知るか！

「つーか穂波！ オメエがうらやましいとか言ってるじゃねえぞリア充が！ ええ？ おいよお、りゅーくとやらとはどこまでヤツたんだあ？ お姉さんに言ってみなあ？」

イジワルな笑みを浮かべた颯姫が、私にグイグイ迫ってくる。

「ちよっ、颯姫！ 首絞めないでよ！」

「ほらほらほら！ 正直に言わないとお仕置きしちゃうぜ〜！」

「蒼も聞きたいですよ！ 穂波ちゃん、もうエッチいこととかしたの？ ねえねえ！」

「ちよっ、なんでそんなこと言わなくちゃならないのよ！ べ、別

にキスすらしてないし！　だ、第一……

……もう別れたわよ！　あんなヤツとは！」

「……ええ！？」

い、言っちゃった……

別に隠す気はなかったけど、いつ言おうか迷ってたのに……

3月29日(火) 元カレ<兄貴

「ええ！？　なんでえ！？」

「別れたってマジかよ！？」

私の衝撃発言に、2人とも目を丸くした。

「べ、別に、理由なんてないわよ。飽きたからフってやっただけなんだから」

嘘。

幸せの真っ只中だったのに、ある日突然電話越しでフラれたんだ。

「マジかよ……あんなにのろけていたのによ」

「穂波ちゃん心変わりしすぎ。容赦ないね」

「……あんなつまらないヤツ、一緒に居ても退屈しかないもの。もつと良い男探すことにしたわ」

つまらなくはなかった。

退屈もしなかった。

ホントは一緒に居たかった。

けど

もう大丈夫。

あの夜、兄貴が慰めてくれてから、あんなヤツの事なんてすっかり忘れていたんだから。

むしろ、兄貴のことばっか考えたりしちゃって困ってる……

そっちのほうが大問題だわ。

今日だって、朝起きたら兄貴に見つめられていて、なぜかそれが嫌じゃなくて、でも恥ずかしくて兄貴と会話できなくなって……

そもそも！

なんでアイツは私の寝顔見つめてたのよ！

やっぱりそれって、私のこと好……

「でもでも、穂波ちゃんの元カレって、写真見せてもらったけどすっごいイケメンだよ！　しかも年上で背高くて、空手やってる

から体のほうもイイ感じなんですよ？ 抱かれないボディ、的な？」
「な、何いやらしいこと聞いているのよヘンタイ！」
「アイタ！」

隣のヘンタイにはチョップをお見舞い。

「穂波が不良に絡まれてたところをソイツが助けてくれたのが出会いなんだろう？ 男気あるじゃねえか。つたく、うらやましい出会いだぜ」

「まるで白馬に乗った王子様だね！ こんな優良物件、手放しちゃうって良かったのお？」

手放すも何も、手放された側は私だ。

「未練なんてないわ。大事なのは「出会い」より「その後」、だもの」

「さっすが、クラスのアイドルは言うことが違うぜ。今度俺にも良い男紹介してくれよ」

颯姫はスリスリと擦り寄ってきて、

「穂波の兄貴とかよ」

爆弾発言を投下した。

「……………は、はあ！？ ななななんで私の兄貴なのよ！」
「だって、カツコ良いじゃねえか。穂波の話聞いてきた限りじゃ、妹想いの良い兄貴だぜ」

「バツ、バ、バツカじゃないの颯姫は！ いつ私がそんな話したのよ！ だいたい、兄貴のどこがカツコ良いわけ！？ 全く思い付かないんですけど！」

……………大嘘言っちゃった。

兄貴は本当はカツコ良くて、でもそんなこと認めたくはなくて、でもでも…………

「小学校の頃、俺と穂波が悪ガキ共に泣かされてたときに助けに来てくれたろ？ あれはポイント高かったぜ」

蒼とは中学校からだけど、颯姫とは小学校から一緒。私の家に何度も来たりしているから、颯姫も兄貴も互いに顔見知りだ。

兄貴は颯姫の事を「妹の友達」くらいにしか認識してないけど、颯姫のほうは、「穂波の兄貴ってカッコ良いよな〜」などと私によく言ってくるんだ。

「助けに来たって言っても、結局ボコボコにされて手も脚も出なかつたじゃない」

「いーんだよそれで。複数の悪漢に妹とその友達を護るため1人で立ち向かう兄貴 それだけで燃えるだろ！」

「……まあ……あの時は確かに、カッコ良くなかもなかったけど……」

私がまだ小さい頃だからうる覚えな部分もあるけど、あの時の想い出は……

一生忘れないくらいの、素敵な思い出になっている。

「だろだろ！ ボコボコにされても何度でも立ち上がったさ、最後まで俺ら護り抜いたしよ！ なあ、穂波の兄貴俺にもくれよ〜」

「私も私もー！ 穂波ちゃんのお兄ちゃん欲しいですう！」

今度は蒼までも、フォークを持ったまま拳手をして身を乗り出してきた。

まるで兄貴を競りに出しているみたいだわ、この状況。

「はあ？ なんでそこでアンタが出てくるのよ」

「だってだってえ、穂波ちゃんのお兄ちゃん、穂波ちゃんに顔が似てるじゃん？」

「………この際似てるかどうかは置いて、

「………どーゆーこと？」

「だからあ！ 私の大好きな穂波ちゃんに顔が似てるからあ、なんかコーンするってゆーかあ！

お兄ちゃんと結婚して、穂波ちゃんに私のことお姉ちゃんって呼ばせて、最終的にはお兄ちゃんと私と穂波ちゃんですりーピ……」

「こ、この発情メス犬！ なな、なーなななんて事を抜かしおるかなそなたはあ！？」

「アッハハ！ 口調変わってるよ っただからグーは痛いって！

パーとかムチなら大歓迎なんだけど、あでもグーも良いかも……
って痛い！」

「この色欲魔！ 歩く猥褻物！ ア、アンタみたいなヘンタイに！
私の兄貴は……絶対絶対絶対絶対ぜーったいにあげないんだから
！！」

私の兄貴は、私が認めた女にしかあげないの！！」

……ってええ！？

わ、私何言ってるの！？

これじゃまるで……

「……そーかそーか。……穂波、やっぱりお前……」

「ブラコンだったんだねってキヤー！ そこまでお兄ちゃんのこと
愛してるんだー！ 萌えるうー！」

うんうんと納得顔で頷く颯姫に、腕を組んで悶える蒼。

「ちっ、ちが……」

「あげないんだから！ って、可愛いこと言うじゃねえか。

そうだよな？ 大好きな兄貴をこんなドM女にはあげたくねえよ
な？ 大好きな兄貴をよ」

「娘を嫁に出したくないお父さんみたいな感じだね！ 愛するが故
の束縛？ 的なの！」

「ちちち違うううう！ 違うの！ こ、これは口が滑ったというか
なんというか……」

「口が滑って本音を言っちゃった、ってか？」

「ごまかさなくて良いんだよお？ いつもはお兄ちゃんの悪口ばっ
か言ってるのも、愛情の裏返しだったんだね！」

「ちが……うって言ってるの！」

ドンッ！

立ち上がってテーブルに両手をたたき付けて、

「わ、私は別に……兄貴の事なんて、なんとも思っていないんだから
！！」

……また嘘ついちゃった。

……でも、言えるはずないじゃない！

最近兄貴の事、異性として意識するようになってきちゃったの

……なんて！

……ブラコン治したい。

早くちゃんとした彼氏が欲しいよお……

3月29日（火）その時がきたら……

結局、私がビリのまま、本日のカラオケフリータイムは幕を閉じた。

颯姫は98点を叩き出し、私は僅か一点差で蒼に敗れ去った。

颯姫の歌は反則過ぎるわ……

本気で歌手を目指してもらいたいくらい。そしたら毎回CD買って、ライブも通い詰めてあげるんだから。

「穂波が罰ゲームかー。こりゃ楽しみだぜ」

「どんなのにしょーか迷っちゃうね！ やっぱり羞恥系？ すんごく恥ずかしいことしてもらおっか！」

朝の10時から夜の7時まで、途中にお昼やガールズトークを挟みながら、私達は9時間もカラオケを楽しんだ。

3人もかすれた声で喋りながら、カラオケ屋を出て駅へと向かっている。

駅はすぐそこにあるのに、人込みを掻き分けるように歩いているから妙に遠くに感じられる。

空はもう暗く、ネオンの光りが辺りを照らしていた。季節はまだ3月。この時間だとやっぱりまだ肌寒い。

「や、やめてよ！ あんま恥ずかしいのは！」

「さーて、どうすっかな」

「うーん……あ、そうだあ！」

蒼はテクテクと前に歩き出て、私と颯姫に振り向いた。

そして、嫌な予感しかしない、悪巧みしているのがバレバレな笑顔で、

「お兄ちゃんにキスする、ってゆーのはどうかな？」

案の定、とんでもないことを言い出した。

「おお！ いいねそれ！ 見たい見たい！」

「でしよでしよ！」

……兄妹同士で重ね合う唇。初めは罰ゲームだった。けれど、お兄ちゃんラブな妹は禁断の愛に酔いしれ、次第に身も心も蕩とろけていく……」

「『まったく、仕方ねえ妹だな』『うるさいうるさい！ 罰ゲームなんだから仕方ないでしょ！』『ははっ、素直になれば良いのによ。俺だって嫌じゃねえんだから……』『アンツ！ あ、兄貴い……』『……ってか？ イイねイイねエ、最高じゃねえか！』」

……禁断の愛……？
……最高？

「……お、お、おー……」

「ん？ オーケー！？ 穂波ちゃんやっぱりお兄ちゃんのこと！」

「お……お前いつぺん死ねエエエ……！」
ドガッ！

周りにたくさん人がいるのも忘れて、蹴りを出してしまった。

「アイタツ！ 穂波ちゃん、蹴りはもつと酷いよお！ あ今パンツ見えた……って痛いっ！ 靴履いてるんだからさすがに痛いよ！

蹴られるよりは踏まれるほうが好きなんだけど……ってグハッ！」

私が兄貴にキス……？

……って、そんなことできるわけないじゃない！

あ、兄貴なのよ！ 自分の！

兄妹同士でそんな破廉恥なまねなんて……

考えただけでも、ドキドキ……じゃなかった寒気がしちゃうわ！
「アツハハハ！ ほ、穂波、顔真っ赤だぞ、そんなにコーフンするなよっ」

ツボに入ったのかゲラゲラ笑いながら、颯姫が頭をゴシゴシと撫でてきた。

「コーフンなんかしてない！ ……もう！ 颯姫までからかわないでよ！」

「ハハハ、わりーわりー。でもよ、キスするのも良いかなってちょっぴり思っただろ？ 顔に出てたぜ」

「え！？ 嘘お！ ヤダ私つたら……」

そんなそんなそんなあ……

顔に出てた！？

……やっぱり私、兄貴にキスしたいとか心の奥で思ってるわけ……？

た、確かに、兄貴が土下座して「一生のお願いです！ キスしてください！」とか言ってきたら、仕方なく、ほんっとーに仕方なく、頬っぺたにならキスしてあげても良いんだけど、

……だからって、私のほうから兄貴にキスしたいとか、そんなの
つて……

「……ってまさか凶星！？ テキトーに言ってみただけなのに……」

………つ！？

テキトーに言ってみた！？

「つて違う！ あ、ありえないんだから！ 嫌嫌嫌嫌ぜーつたいに嫌！ 兄貴とキスなんて死んでもごめんだわ！ バカなこと言わないでー！」

は、はめられた！

私としたことが……！

「穂波ちゃん可愛い！ 兄萌えのツンデレだなんて、どんだけ私の好物なんですかあ！？ 穂波可愛いよ穂波い！」

ギョツ！

大好きなぬいぐるみに抱き着くみたいに、蒼が私に飛び掛かって締め付けてきた。

「離れなさい蒼！ ^{ヘンタイ} あ、ああ兄萌えなんて冗談じゃない！ そんな嗜好はこの世から廃絶されるべきだわ！ それに私はツンデレなんかじゃないんだから！」

「ツンデレブラコン妹……きゃー！ 萌えるー！ 穂波ちゃんだけでご飯3杯はイケるわあ！」

「……って、人の話を聞け！」

キヤーキヤーと叫ぶ蒼を引きはがそうとしても、力強く抱きしめてくるのでなかなか上手くいかない。何かのスイッチが入ったみたいだ。

まったく、なんで蒼も颯姫も、ブラコンがどうのこうのとか言ってくるのよ……

こっちは真剣に悩んでるってゆーのに。

自分の気持ちに正直になれたら、どんなに楽なのだろう。

禁断の恋なんて、小説やドラマの中だけの話だと思ってた。そのいくつか、私も憧れを抱くこともあった。

けれど、いざ自分に降りかかってくると……

辛い。

身分違いの恋や、友達の彼氏との恋。そんなものだったらまだマシだったかもしれない。

けど、私の相手は、兄貴。

生物学的にも社会的にも交わることの許されない、肉親。

小さい頃から一つ屋根の下で過ごしてきた、家族。

恋愛を否定される要素なら、いくらでもある。恋愛をしたところで、幸せになれる保証なんて皆無。

人として失格

そんな烙印を押されても、文句は言えないんだ。

なのに……

日に日に、気持ちを抑えきれなくなってくる。

今はまだ、兄貴に恋なんかしてないって自分に言い聞かせていられる。

けれど、いつまでもそうしていられるわけじゃないってことは、わかっている。

最近は何だんだん言っても、浮かれていた。兄貴との生活を楽しんでいた。

兄妹以上恋人未満

そんな関係も、悪くはないな、って。
けど……

急に、不安になってきた。

いつかその時が来たら……

私は、どうすればいいの？

兄貴は、私のことを一生幸せにするって豪語してくれた。あの時は、その言葉にすごく安心できたんだ。

けど今は……

私はそれを、信じて良いの？

私は兄貴を、自分の感情を、受け入れても良いの？

わからない……

わからないよ……

「穂波……ちゃん？」

「ほ、穂波！俺が悪かった！からかいすぎた、すまねえ！」

不安げな顔で上目使いに見つめてくる蒼に、両手の平を合わせて頭を深く下げている颯姫。私のブルーな気持ちだが、今度は本当に顔に出ていたみたい。

「……べ、別に怒ってないわよ。もうこの話はおしまい。さあ、帰りましょ」

笑顔の仮面を、上手く貼り付けることができたかわからない。けど、こうするしかなかった。

だって、2人に相談できるわけないじゃない。

颯姫も蒼も本当はすごく良い友達だから、相談したらきつと真剣に聞いてくれる。もしかしたら、良いアドバイスをもらえるかもしれない。

……それでも、この悩みは知られたくなかった。
だって恥ずかし過ぎるし、なにより……
打ち明けたらきつと、その後の関係が気まづくなるから。

心配そうな顔をする颯姫と蒼だったが、一先ずこの話はおしまいになったようだ。

私達は再び歩きだし、駅へと向かうところで

「穂波、アレって……」

「……っ!？」

駅の出口を少し出たところにある犬の銅像の横で若い女と2人で親しげに話している、私の兄貴を見つけた。

3月29日(火)再会、そして……

「ちょっと早過ぎたな……」

人波に飲まれながら、俺はB駅の西口出口に向かって歩いていった。待ち合わせの時間にはあと30分近くもある。おそらくまだ誰も来ていないだろう。

主催者の大介によると、今日の集まりは合コンと言うよりも、個人開催の新入生歓迎会みたいなものらしい。

俺と大介が通っている高校にこの春入学予定の新1年生と、俺達新2年生の男女が集まって、お好み焼きを焼きながら交流する、という内容みたいだ。

というか、入学式もやっていないのによく歓迎会なんてやるうと思ったな。

大介のことだからきつと、いち早く新入生の女子にアピールしようとかそういう魂胆だろうけど。

駅の構内から外へ出たところで、待ち合わせ場所に指定された犬の銅像の方を見てみた。予想通り、待ち合わせらしい若い男女は誰も

「……って、あの人は……」

銅像の横に、見覚えのある人が立っていた。

ほんの数時間前に出会った、名前も知らない女性。

貧血で倒れそうなところを助けてあげ

た、あの大人っぽいおしとやかなセミロングの彼女。ふちなし眼鏡が知的で似合っていた。

彼女は俺に気付いたのか、俺のほうを向いて少し驚いたような顔を見せると

笑顔で小さく、手を振ってきた。

まさかこんなにすぐに、しかも別の場所で再開するなんて……
チャンスの神様は、なかなか寛容だったようだ。

今度は、後悔しない選択肢を選ぶしかないだろ。

笑顔で手を振り返し、彼女の元へ小走りで近づいていく。

彼女は軽く会釈をすると、

「またお会いしましたね。あの時はどうも、ありがとうございます
た」

「いえいえ！ 当然のことをしたまでですから」

にこやかな笑顔を浮かべ丁寧なお辞儀をしてきた彼女に、俺も思
わず頭を下げた。ただし俺のは、緊張のせいかロボットみたいに力
クカクだった。

「ふふっ。やっぱり謙虚なんですね。……そういうところ、素敵だ
と思います」

す、素敵!?

いきなり何を言い出さなんだこの人は!?

これが俗に言う、脈ありってやつなのか!?

「そそそ、そんな！ そんなことないですって！」

「そんなことがありますよ」

優しく教え諭すようにそう言うと、彼女は俺のほうへ一歩前に出
て、

「本当にありがとうございます」

ニコツとほほ笑んだ。

「ど、ど、ど、どうも……」

やばい。いまさらだけどこの人……

可愛すぎるぞおい。

しかもなんか良い感じだし、もしかしてフラグ立ってる？ 立っ

てんのかコレ？

年上の女性はハードル高そうだが、彼女を助けた俺の第一印象は
悪くなかったはずだ。多分。

……よし。ここは攻める。
さりげなく攻める。

俺だって、いつまでも年齢〓彼女いない歴の情けない男でいるつもりはないんだ。

「あ、そ、しょういえば、良かったらお名前聞いてもよろしいですか？」

……噛んだ。

見事に噛んだ。

童貞故の情けなさが露呈しちまった……

「はい。海橋夕風みはしゆうふうなぎと申します。海の橋って書いて、みはしって読みます」

夕風……

珍しい名前だな。風の止んだ夕暮れの海、か……

でも確かに、穏やかな海のような人だ。静かで、優しいな。

「海橋夕風さんですか。良いお名前ですね」

「ふふつ。ありがとうございます。良かったら貴方様のお名前もお聞かせ下さい」

「俺ですか？ お、俺は鳴沢タカトシと言います。春から高校2年生の、16歳です」

「鳴沢タカトシさん、ですね。よろしくお願いします」

そう言っただけ海橋さんは、軽くお辞儀をした。それに釣られて俺も、「こ、こちらこそよろしくお願いします」と深々と頭を下げた。

よろしくってことは、これから先何らかの関係が続いていくってことで良いんだよね？ そうだよな？

「高校2年生ってことは……私の一つ先輩ですね」

「……はい？」

「私、4月から高校1年生になります」

そうなの？

高校生、年下、後輩？

え、だって、こんなに大人びているのに……

スタイルもなかなか良くて、少なく見積もっても大学生くらいにしか見えなかったのに……

「鳴沢さん、今、私のこと老けてるなって思いませんでした？」

海橋さんはぷくつと頬を膨らませて、若干不機嫌そうな顔をした。

「あ、いや、その……」

「ふふつ、冗談ですよ。慣れてますから」

と思つたら、一転してやんわりとした笑顔になった。

「違つんです！」

「え？」

俺は思わず声を張り上げて、

「大人っぽくて素敵だな、この魅力を出せるのは年上に違いない、と思つてたんです！」

「え？ 鳴沢さん……」

はっ、しまっ……

俺は何を言ってるんだ！？

ついさっきまで互いの名前も知らなかった間柄なのに……

「ありがとうございます。こんな嬉しいことを言つて頂いて……光栄です」

彼女は俺の顔を真っ直ぐ見て

ニコッ。

周りの人波が静まり、穏やかな海に変わったかのように錯覚させるほどの、慈愛に溢れた笑みを見せてみせた。

3月29日(火)再会、そして……(後書き)

最近鬱気味で、何も手につきませんでした…
今日から執筆活動を再開させたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6789v/>

あいまいっ！

2011年10月2日03時36分発行